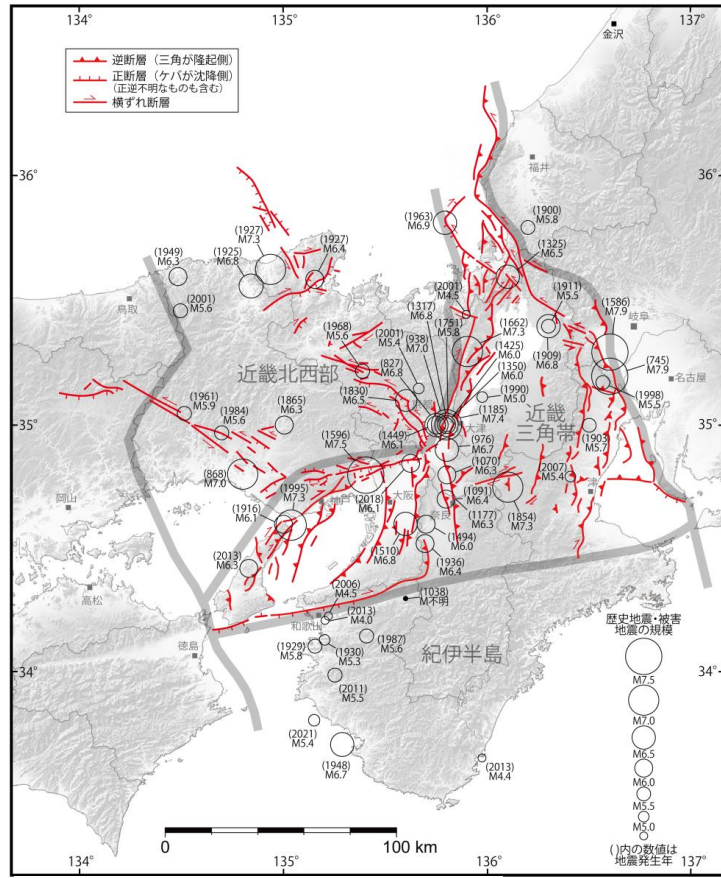


近畿地域の活断層の長期評価（第一版） 概要



— : 地域評価の区域境界

近畿北西部：福井県、滋賀県、京都府、兵庫県、岡山県

近畿三角帯：福井県、岐阜県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、
大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県

紀伊半島　：三重県、奈良県、和歌山県

令和8年8月28日

地震調査研究推進本部 事務局

「活断層の地域評価」の位置づけ



地震について
知りたいこと

自分の町・地域に活断層があるの？
〇〇地震の切迫性・影響は？ 等

〇〇地震ではどの範囲
にまで被害が及ぶ？
応急対策・復旧戦略は？

どの箇所から優先的に耐
震化を進めるか？
最適な資源の分配は？

今後どのくらいの揺れ
に見舞われるのか？

〇〇地震が来ても、十分
耐えられるようにしたい。

調査・観測

地震本部の成果

情報提供

長期評価

どんな地震が将来想定されるか？

内陸の活断層で発生する地震

主要活断層帯の長期評価

断層長 20 km以上、規模 $\geq$ M7.0
位置・規模・動き方・発生確率

「活断層の地域評価」

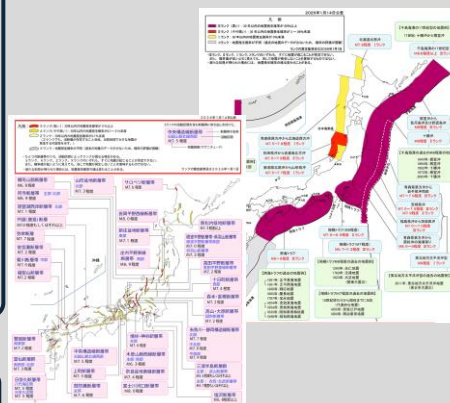
- 断層長20 km未満、規模 $\geq$ M6.8も対象に追加
- 被害を起こす可能性のある活断層を細かく検討
- 地域ごとの地震発生確率値
- 陸域から延長する沿岸海域の活断層や、地下に伏在する部分も含み検討

海域の活断層で発生する地震

海域活断層の長期評価

海溝型地震

海溝型地震の長期評価



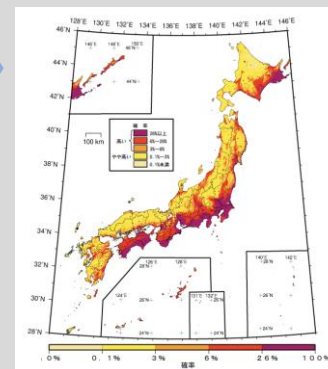
長期評価を基に作成

地震動予測地図

どんな揺れに見舞われるか？

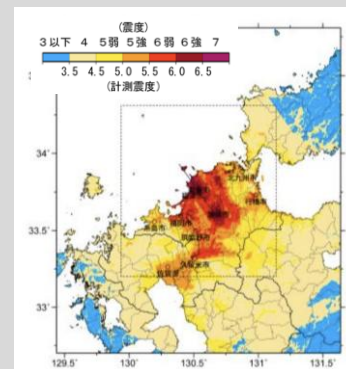
確率論的
地震動予測地図

今後30年間に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率



震源断層を特定した
地震動予測地図

ある断層が動いたときの
周囲の震度分布



評価の経緯

従来の活断層の長期評価(～H17)

● 基盤的調査観測対象の活断層帯(主要活断層帯)を対象

- ✓ 確実度Ⅱ以上、地表の長さ20 km(マグニチュード(M)7.0に相当)以上、平均的なずれの速度※1が0.1 m/千年以上相当が基本的な選定の基準

- ✓ 個々の主要活断層帯ごとに評価

● 課題

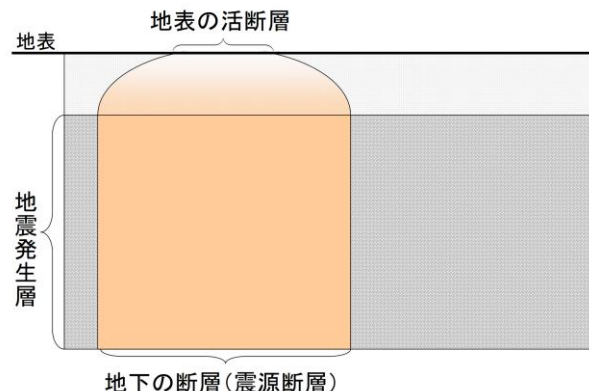
- ✓ 主要活断層帯以外(地表の長さが短い活断層、沿岸海域)で被害地震が発生
- ✓ M7未満の地震でも被害が生じている

例) H16 新潟県中越地震(M6.8)、H19 能登半島地震(M6.9)、H19 新潟県中越沖地震(M6.8)、H26 長野県北部を震源とする地震(M6.7)

114断層帯
※2026年1月時点

※1 平均的なずれの速度について

活断層における長期間にわたる平均的なずれの速さを示し、活断層の過去における活動の程度(活動度)の指標となる。平均的な変位速度が不明な場合は、既存文献等から活動度(A級～C級、松田(1975)※2)を仮定し、平均的な変位速度を推定している。



地表の長さが短い活断層のイメージ

従来の長期評価では
カバーできない地震規模

「活断層の長期評価手法」(暫定版) (H22)

□ 地域評価の導入

□ 評価対象とする活断層の見直し 等

陸域及び沿岸海域に分布し、M6.8以上の地震を引き起こす可能性のある活断層について、対象とする地域ごとに総合的に評価

被害地震を発生させる
活断層をなるべく拾う

「活断層の地域評価」(H25-)

- 九州地域(平成25年2月)
- 関東地域(平成27年4月)
- 中国地域(平成28年7月)
- 四国地域(平成29年12月)

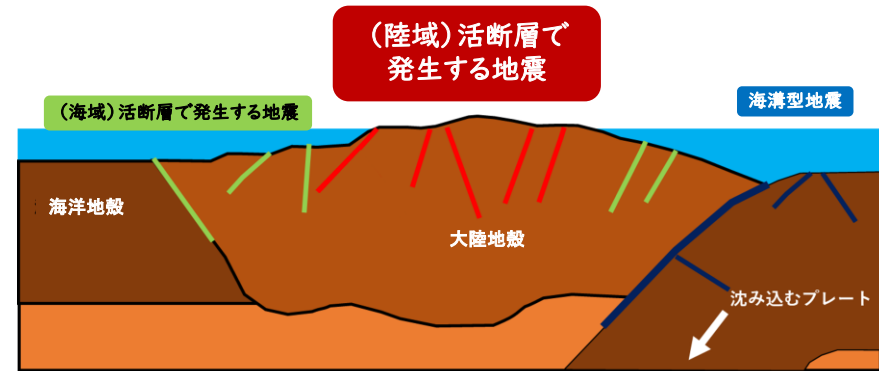
活断層による地域のハザード情報
「XX年に1回程度の頻度で、活断層やそれ以外の陸域の浅い地震に見舞われるおそれがある」ことを示すことができる。

□ 「近畿地域の活断層の長期評価」(令和8年8月)

地域評価の特徴

● 評価する活断層の対象を拡大

- ✓ 地表の断層長さ20 km以上（主文・説明文・特性表）
→ 15 km以上（主文・特性表）を評価
15 km未満を簡便評価（特性表）
- ✓ 平均的な変位速度が0.1 m/千年以上相当 → それに満たない断層も評価
- ✓ 陸域の活断層に加え、**沿岸海域延長部**の活断層も評価 海域のみに分布する活断層は「海域活断層の長期評価」において評価
- ✓ 地表に現れている部分だけでなく、地質や地球物理学的情報に基づき、**地下の断層面**の長さを評価



● 個々の活断層だけでなく、**地域単位**で評価を実施

- ✓ 地質構造や地殻変動、地震活動等の情報も利用
- ✓ 地域に存在する活断層を評価したうえで、地域単位での特徴、地震発生確率を評価

★主要活断層帯の評価との主な違い

※：主要活断層帯以外の断層のうち、評価が既に行われている断層については、主文・説明文・特性表から構成されている。

		主要活断層帯の評価	地域評価
対象 活断層	規模	20 km以上（主文・説明文・特性表）	20 km以上（主文・説明文・特性表）
			15 km以上（主文・特性表）※
			15 km未満（特性表）※
	場所	陸域	陸域・沿岸海域
	範囲	地表に現れている部分のみ	地下の延長部も推定して評価
評価方法		・個別に活断層を評価	・個別に活断層を評価 ・地域単位で活断層を評価

地域評価の評価手順

① 近畿地域内の評価対象活断層の洗い出し

- ・ 専門家による活断層の位置の判読や活動度・既存の研究成果等を参照し、以下のように分類

評価対象活断層

※活動度について
活断層の過去における活動の程度

評価対象としなかった構造（活断層である証拠が十分ではない／活断層の可能性が低い）

② 近畿地域内の区分

- ・ 活断層の特性や地質構造などに基づき、**地域内は3つの区分とした**

③ 既存の活断層の評価改訂・新たな活断層の評価

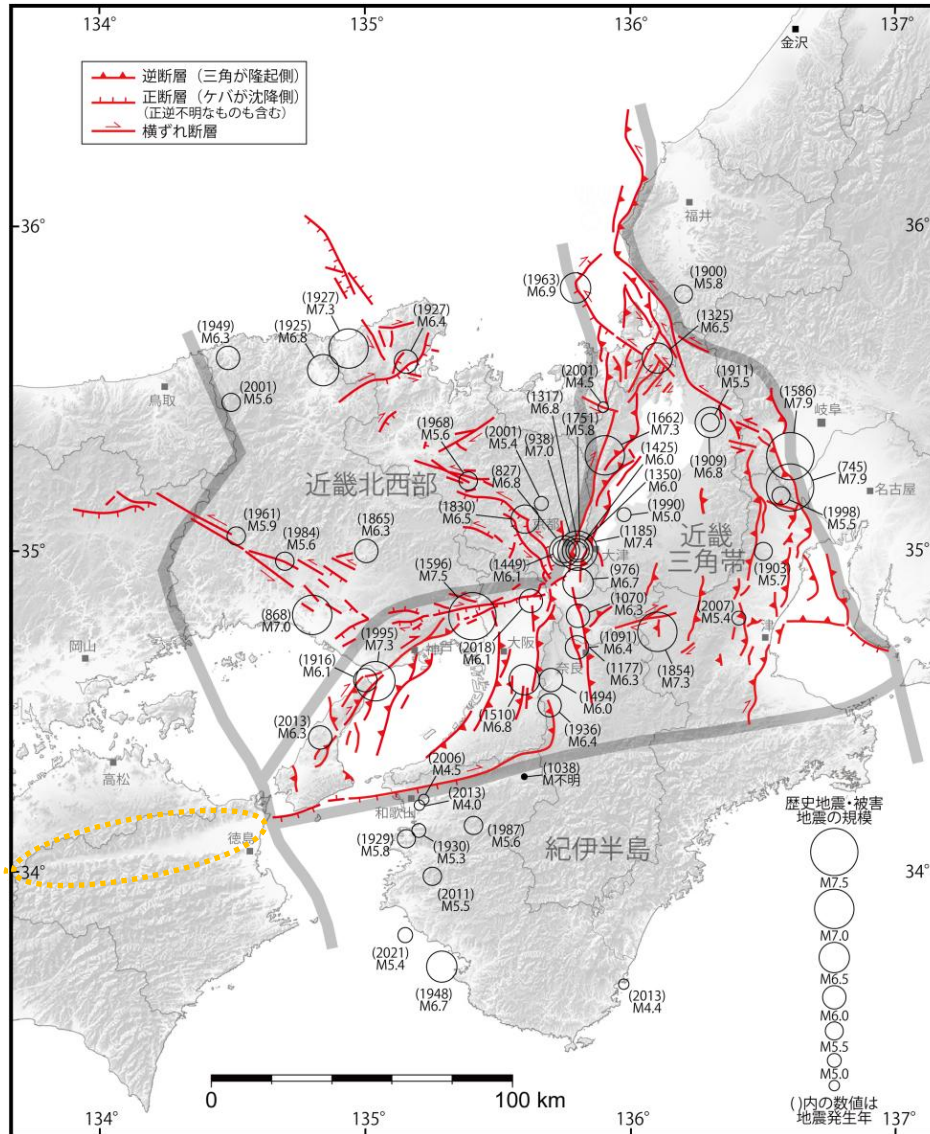
- ・ 既存の主要活断層帯は、前回評価以後、得られた新たな知見を取り入れて評価を見直し
- ・ 新たに評価対象となった活断層の地震発生確率等を評価

④ 近畿地域の活断層で発生する地震の長期評価

- ・ 個別の活断層の評価結果をもとに、近畿地域で「活断層の活動によって今後30年以内にM6.8以上の地震が発生する確率」を計算
- ・ 最近の地震活動から統計的経験則に基づき計算した確率と比較

①近畿地域内の評価対象活断層の洗い出し

評価対象活断層



近畿地域内で、評価対象を主要活断層帯(断層長さ20 km以上)以外の活断層にも広げている

※地表にずれの痕跡を残さない伏在断層や、活動度が低いために断層のずれが地形として保存されにくい活断層を見落としている可能性は否定できない

※評価対象としなかった構造(活断層である証拠が十分ではない／活断層の可能性が低い)については、p. 28参照



中央構造線断層帯の一部だが、近畿地域外であるため近畿地域の活断層の長期評価では扱わない範囲

②近畿地域内の区分



活断層の分布・特徴、地質構造や地震活動の特性を基に、3つの区域に分割

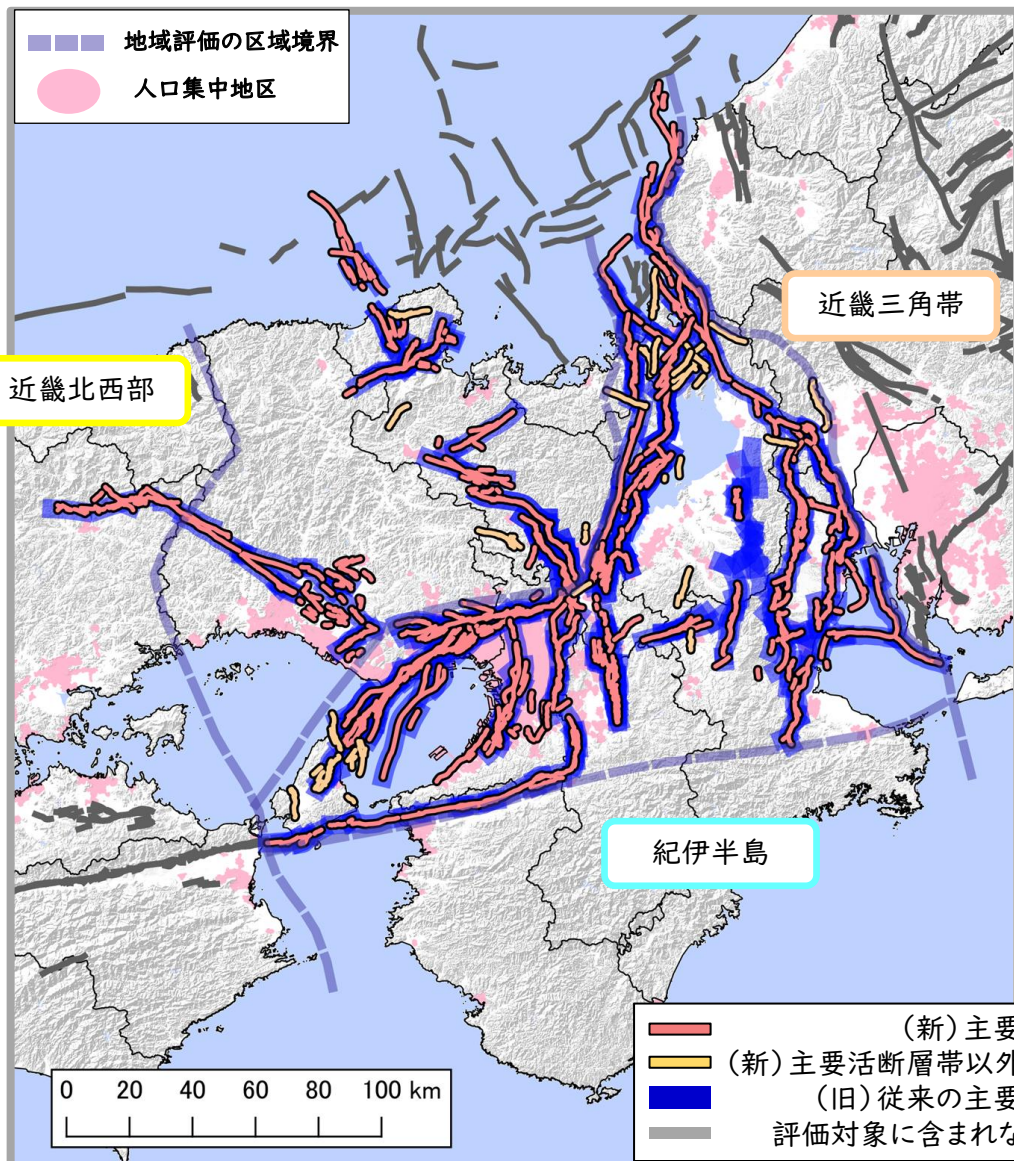
- | | | | |
|----|--------------------|----|-----------------------|
| 1 | 山崎断層帯・那岐山断層帯 | 24 | 琵琶湖西岸断層帯 |
| 2 | 山田断層帯・郷村断層帯 | 25 | 三方断層帯・花折断層帯 |
| 3 | 中山断層 | 26 | 沖島北方沖断層 |
| 4 | 三岳山断層 | 27 | 熊川断層 |
| 5 | 上林川断層・三峠断層・京都西山断層帯 | 28 | 耳川断層 |
| 6 | 西賀茂断層 | 29 | 松屋断層 |
| 7 | 埴生-猪倉断層 | 30 | 野坂断層帯 |
| 8 | 有馬-高槻断層帯 | 31 | 白木-丹生断層 |
| 9 | 六甲・淡路島断層帯 | 32 | 敦賀断層帯 |
| 10 | 志筑断層 | 33 | 駄口断層 |
| 11 | 先山-安乎断層 | 34 | 路原断層 |
| 12 | 飯山寺断層 | 35 | 岩熊断層 |
| 13 | 由良断層 | 36 | 集福寺断層 |
| 14 | 津名冲断層 | 37 | 柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯・浦底-柳ヶ瀬山断層帯 |
| 15 | 大阪湾断層帯 | 38 | 奥川並断層 |
| 16 | 上町断層帯 | 39 | 池田山断層 |
| 17 | 中央構造線断層帯※ | 40 | 今須断層 |
| 18 | 生駒断層帯 | 41 | 鈴鹿山脈東縁断層帯 |
| 19 | 京都盆地-奈良盆地断層帯 | 42 | 養老-桑名-四日市断層帯 |
| 20 | 宇治川断層 | 43 | 布引山地東縁断層帯 |
| 21 | 木津川断層帯 | 44 | 高茶屋断層帯 |
| 22 | 大野木断層 | 45 | 伊勢湾断層帯 |
| 23 | 黄瀬断層 | | |

※紀伊半島・近畿三角帯との境界に位置するため、紀伊半島の活断層帯としても評価を行った

区域は、短期間で変化することの無い、活断層の特徴やこれを形成した要因となる地質・地下構造等の特性を考慮した。このため、境界は明確に分かれるものではなく、また地震活動の明確な境界をなすものでもない。

近畿地域の評価対象の活断層、ずれの向きと種類及び
歴史地震・被害地震の震央

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価



今回改訂した主要活断層帯は
20断層

新たに評価した主要活断層帯以外の活断層は
24断層

※先山-安乎断層・駄口断層・路原断層・集福寺断層は主要活断層帯の一部として評価されていたが、今回新たに活断層として評価し直した

近畿北西部：

主要活断層帯：3断層

他の活断層：4断層

近畿三角帯：

主要活断層帯：18断層

他の活断層：20断層

紀伊半島：

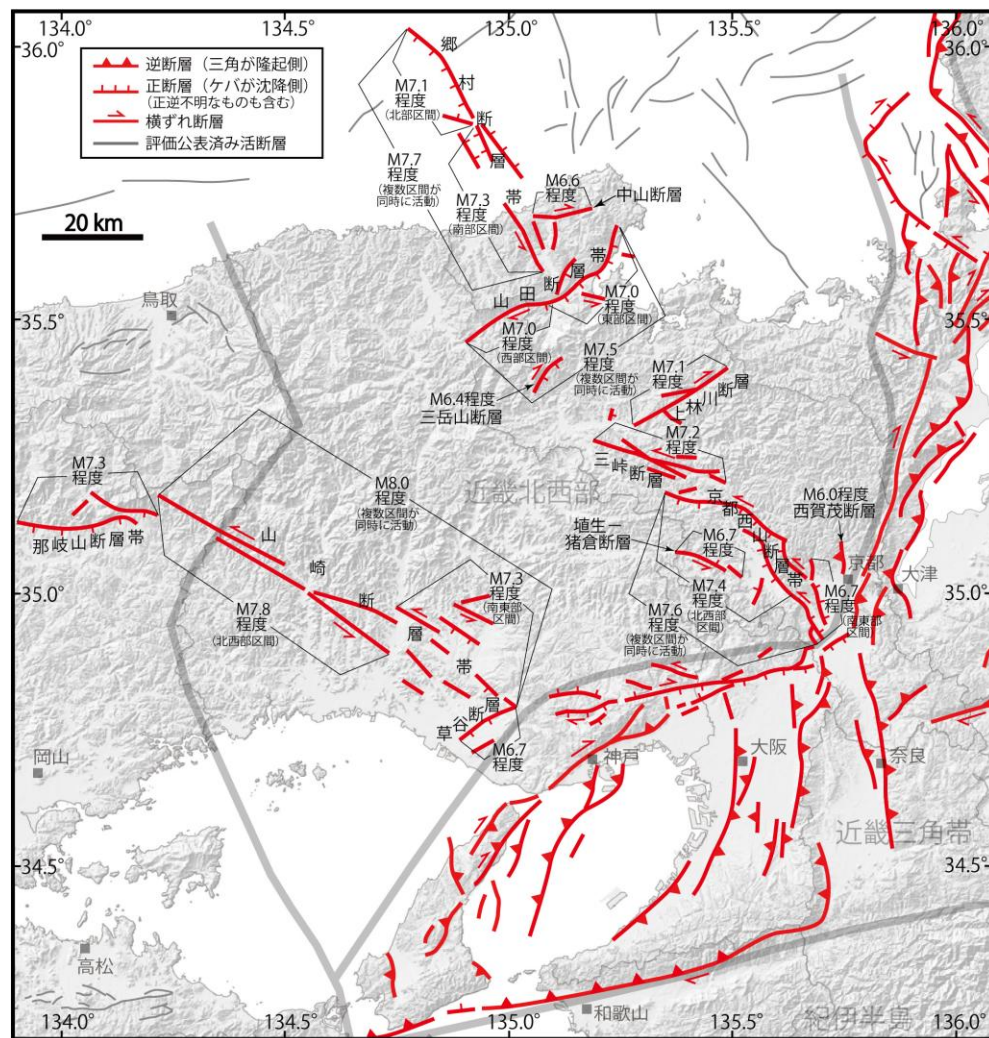
主要活断層帯：1断層

他の活断層：なし

※中央構造線断層帯について

- ・四国地域の活断層の地域評価の時に改訂済みのため、今回改訂した既存評価の主要活断層帯の数には計上していない
- ・紀伊半島・近畿三角帯との境界に位置するため、両区域に属する活断層帯として評価を行った

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価(近畿北西部)



:地域評価の区域境界

主要活断層帯（既存の評価を改訂したもの）

やまさき なぎせん
山崎断層帯・那岐山断層帯

やまだ ごうむら
山田断層帯・郷村断層帯

かんばやしがわ みとけ きょうとにしやま
上林川断層・三峠断層・京都西山断層帯

新たに評価した活断層

なかやま
中山断層

みたけさん
三岳山断層

にしがも
西賀茂断層

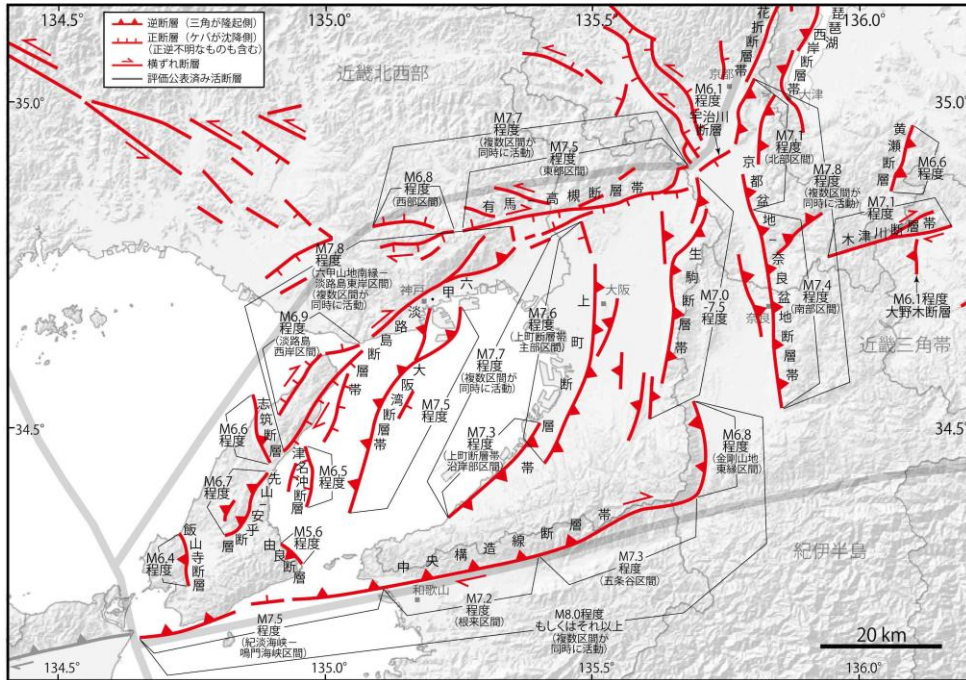
はふ いのくら
埴生一猪倉断層

最近100年間の被害地震
：1927年北丹後地震など

区域の特徴

北西－南東走向で延びる左横ずれ断層や北東－南西走向で延びる右横ずれ断層といった共役な横ずれ断層が主に分布する。また、それらの横ずれ断層のうち多くは、縦ずれ成分を伴う。過去約 100 年間の地震活動は活発であり、被害地震の発生数も多い。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価(近畿三角帯の西部)



：地域評価の区域境界

新たに評価した活断層

しづき
志筑断層
はんさんじ
飯山寺断層
ゆら
由良断層

つなおき
津名沖断層
うじがわ
宇治川断層
おおのぎ
大野木断層

きのせ
黄瀬断層

主要活断層帯(既存の評価を改訂したもの)

ありま たかつき
有馬-高槻断層帯
ろっこう あわじしま
六甲・淡路島断層帯
おおさかわん
大阪湾断層帯
うえまち
上町断層帯

いこま
生駒断層帯
きょうとぼんち ならぼんち
京都盆地-奈良盆地断層帯
きづがわ
木津川断層帯

主要活断層帯(今回評価を改訂していないもの)

ちゅうおうこうぞうせん
中央構造線断層帯

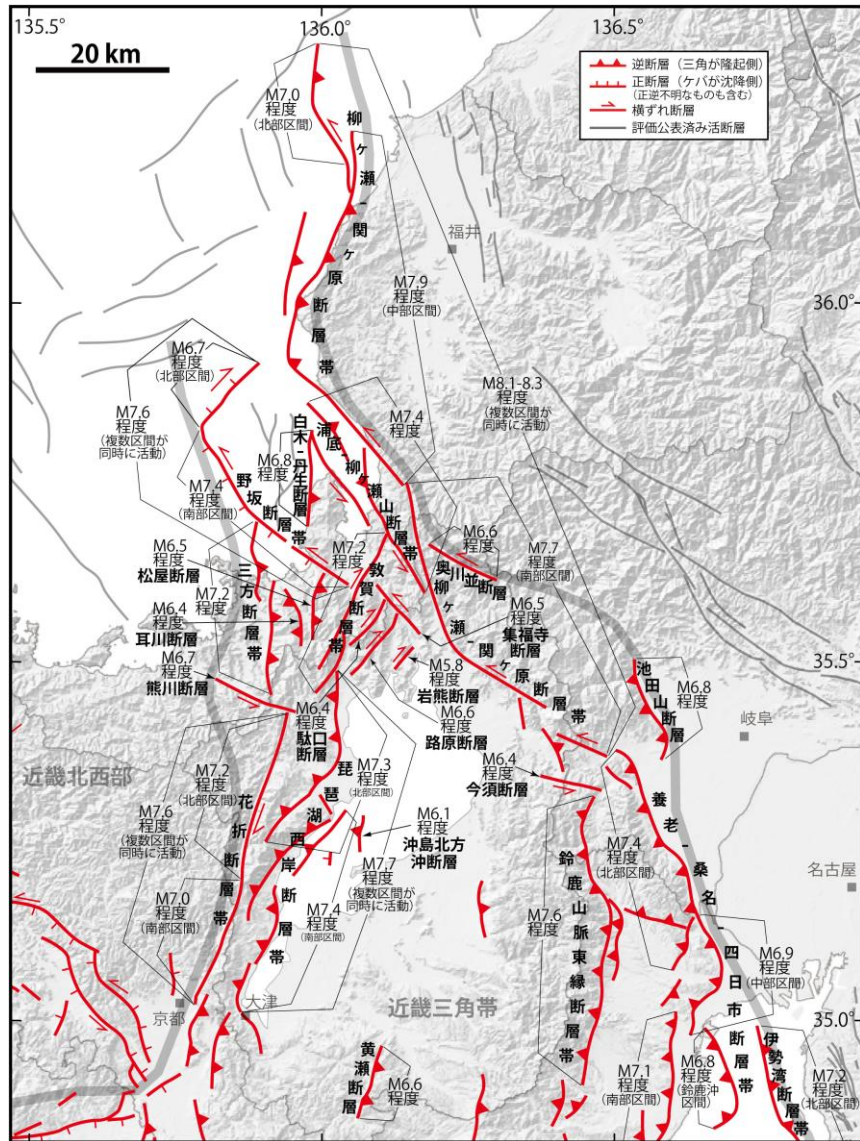
主要活断層の一部として評価されていたが、

単独で新たに評価し直した活断層

せんざん あいが
先山-安乎断層

最近100年間の被害地震
：1995年兵庫県南部地震など

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価(近畿三角帯の北部)



— : 地域評価の区域境界

主要活断層帯(既存の評価を改訂したもの)

びわこせいがん
琵琶湖西岸断層帯

つるが
敦賀断層帯

みかた はなおれ
三方断層帯・花折断層帯

やながせ せきがはら うらぞこ やながせやま
柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯・浦底-柳ヶ瀬山断層帯

のさか
野坂断層帯

新たに評価した活断層

おきしまほっぽうおき
沖島北方沖断層

くまがわ
熊川断層

みみかわ
耳川断層

まつや
松屋断層

しらき にゅう
白木-丹生断層

やのくま
岩熊断層

おくこうなみ
奥川並断層

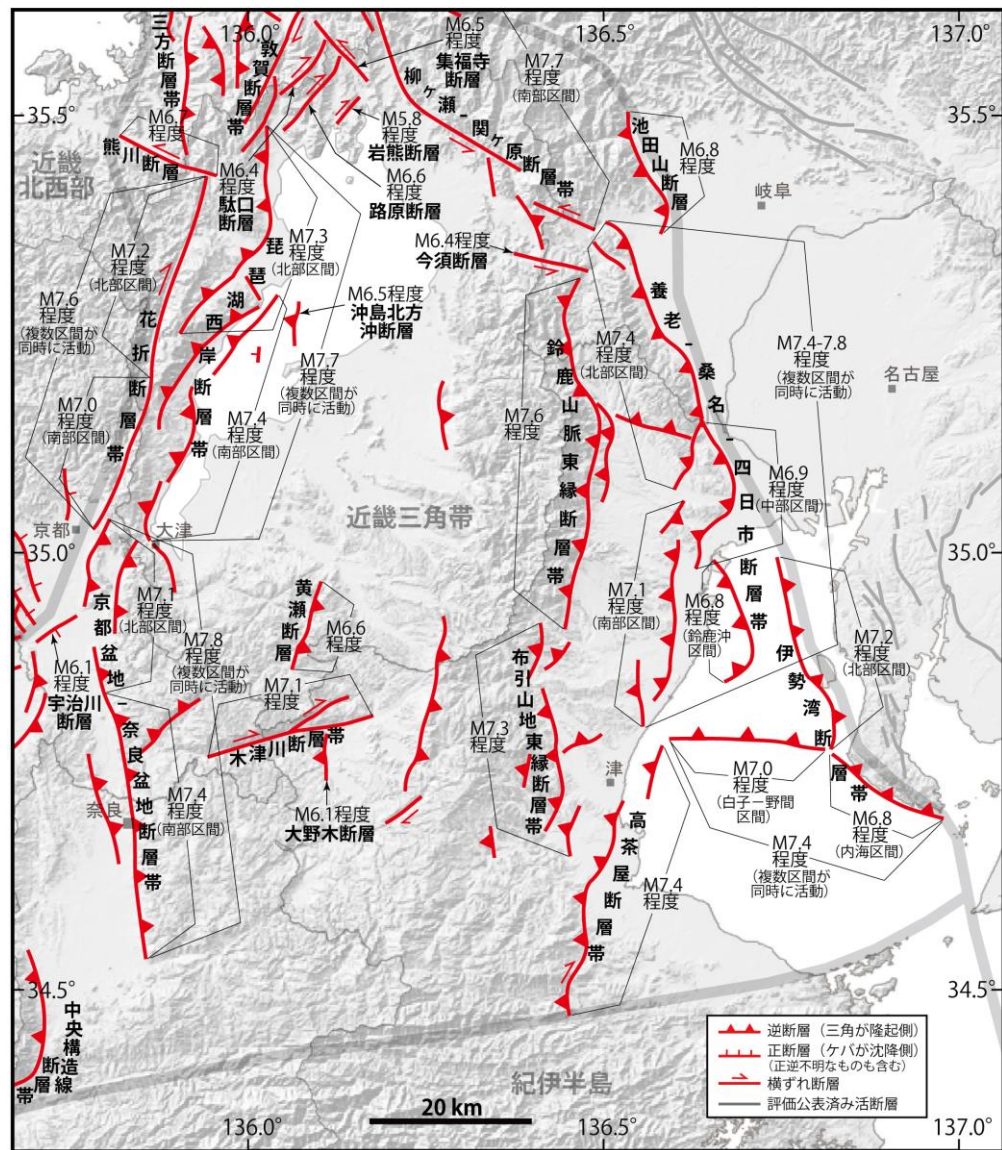
主要活断層の一部として評価されていたが、 単独で新たに評価し直した活断層

だぐち
駄口断層

ちはら
路原断層

しゅうふくじ
集福寺断層

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価(近畿三角帯の東部)



主要活断層帯(既存の評価を改訂したもの)

すずかさんみやくとうえん

鈴鹿山脈東縁断層帯

ようろう くわな よっかいち

養老-桑名-四日市断層帯

ぬのびきさんちとうえん

布引山地東縁断層帯

たかぢやや

高茶屋断層帯

いせわん

伊勢湾断層帯

新たに評価した活断層

いけだやま

池田山断層

います

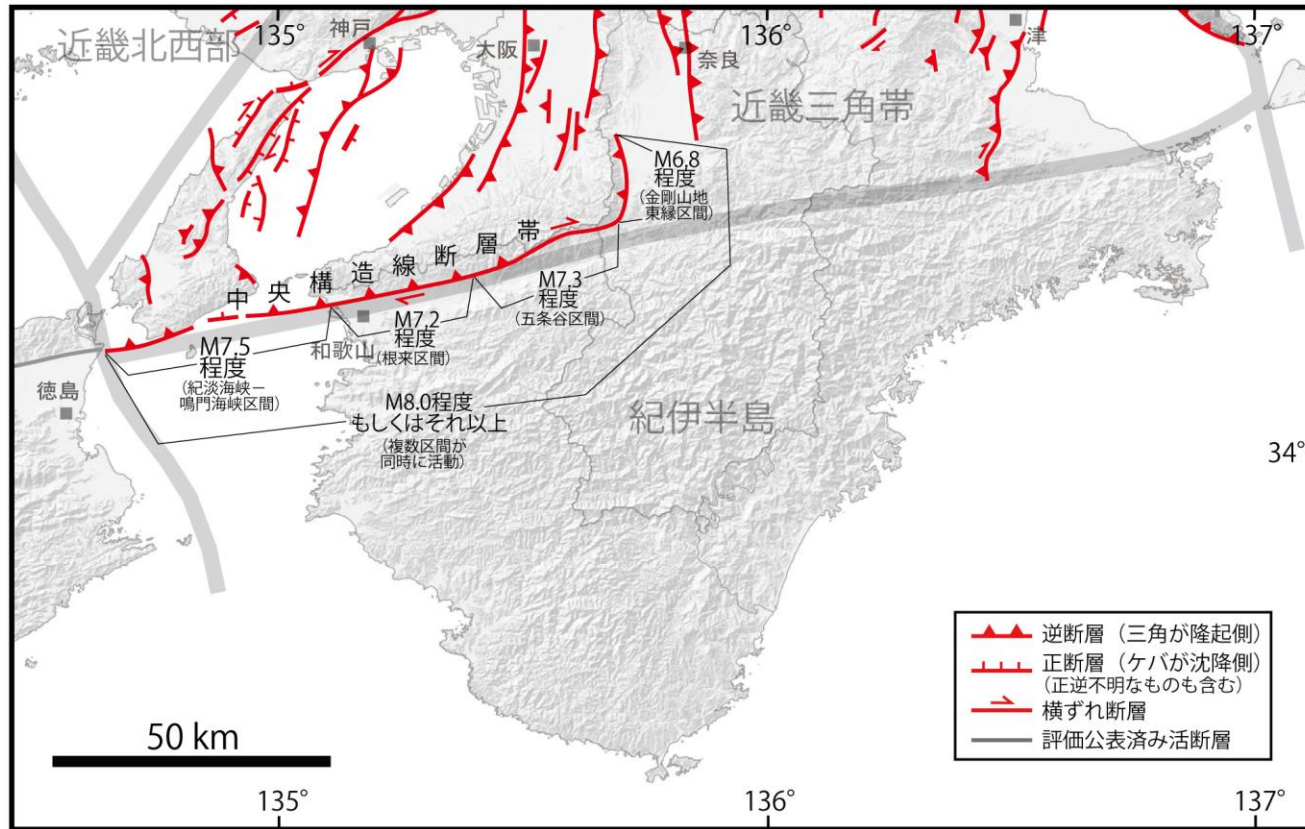
今須断層

区域(近畿三角帯)の特徴

近畿三角帯には、北北東-南南西～南北～北北西-南南東走向の逆断層が主に分布する。それらの断層に加えて、本区域の北部(p.11)では北東-南西走向の右横ずれ断層と北西-南東走向の左横ずれ断層が、本区域西部(p.10)の中国山地東縁に沿う領域では、東西～北東-南南西走向の右横ずれ断層が分布する。また、本区域の東縁は伊吹山地東縁に沿う逆断層と鈴鹿山脈東縁～東部に分布する逆断層帯からなる。本区域の南縁は、紀伊半島(区域)との境界に位置する中央構造線断層帯(p.10)とする。

本区域は、国内でも活断層が集中的に分布しており、それらの活動度も高い。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価(紀伊半島)



— :地域評価の区域境界

主要活断層帯
(今回評価を改訂していないもの)

ちゅうおうこうぞうせん
中央構造線断層帯

区域の特徴

ほぼ東西に延びた帯状の地質構造帯で構成され、近畿三角帯との境界に中央構造線断層帯が分布する。それ以外に確実な活断層は知られていない。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿北西部I)

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動の場合)
山崎断層帯・ 那岐山断層帯	那岐山断層帯	約29 km M7.3程度 Aランク	—
	山崎断層帯主部 北西部区間	約57 km M7.8程度 A*ランク	約85 km M8.0程度
	山崎断層帯主部 南東部区間	約31 km M7.3程度 Zランク	
	草谷断層	約13 km M6.7程度 Zランク	—
山田断層帯・ 郷村断層帯	山田断層帯 東部区間	約21 km M7.0程度 Xランク	約38 km M7.5程度
	山田断層帯 西部区間	約19 km M7.0程度 A*ランク	
	郷村断層帯 北部区間	約23 km M7.1程度 A*ランク	約56 km M7.7程度
	郷村断層帯 南部区間	約32 km M7.3程度 Zランク	

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動の場合)
山崎断層帯 (平成25年7月19日)	那岐山断層帯	約32 km M7.3程度 Aランク	—
	山崎断層帯主部 北西部区間	約51 km M7.7程度 Aランク	約79 km M8.0程度
	山崎断層帯主部 南東部区間	約31 km M7.3程度 Zランク	
	草谷断層	約13 km M6.7程度 Zランク	—
山田断層帯 (平成16年12月8日)	山田断層帯主部	約33 km M7.4程度 Xランク	—
	郷村断層帯	約34km以上 M7.4程度以上 Zランク	—

ランクについて

評価時点は全て2026年1月1日現在。

活断層における今後30年以内の地震発生確率が3%以上を「Sランク」、0.1%–3%未満を「Aランク」、0.1%未満を「Zランク」、不明(過去の地震データが少ないため、確率の評価が困難)を「Xランク」と表記している。地震後経過率(下記参照)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している。

Zランクでも、活断層が存在すること自体、当該地域で大きな地震が発生する可能性を示す。

地震後経過率: 最新活動(地震発生)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が平均活動間隔に達すると1.0となる。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿北西部2)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
中山断層	中山断層	約12 km M6.6程度 Xランク	—
三岳山断層	三岳山断層	約9 km M6.4程度 Xランク	—
上林川断層・ 三峠断層・ 京都西山断層帯	上林川断層	約22 km M7.1程度 Xランク	—
	三峠断層	約28 km M7.2程度 Aランク	—
	京都西山断層帯 北西部区間	約35 km M7.4程度 A*ランク	約45 km M7.6程度
	京都西山断層帯 南東部区間	約14 km M6.7程度 Aランク	
	西賀茂断層	約5 km M6.0程度 Aランク	—
埴生-猪倉断層	埴生-猪倉断層	約14 km M6.7程度 Aランク	—

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
三峠・京都西山断層帯 (平成17年2月9日)	上林川断層	約26 km M7.2程度 Xランク	—
	三峠断層	約26 km M7.2程度 Aランク	—
	京都西山断層帯	約42 km M7.5程度 A*ランク	—

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿三角帯の西部I)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動の場合)
有馬-高槻断層帯	有馬-高槻断層帯 東部区間	約41 km M7.5程度 Zランク	約55 km M7.7程度
	有馬-高槻断層帯 西部区間	約16 km M6.8程度 Xランク	
六甲・淡路島断層帯	六甲・淡路島断層帯 六甲山地南縁- 淡路島東岸区間	約57 km M7.8程度 S*ランク	約57 km M7.8程度
	六甲・淡路島断層帯 淡路島西岸区間	約21 km M7.0程度 Zランク	
志筑断層	志筑断層	約12 km M6.6程度 Xランク	—
先山-安乎断層	先山-安乎断層	約13 km M6.7程度 Zランク	—
飯山寺断層	飯山寺断層	約9 km M6.4程度 Xランク	—
由良断層	由良断層	約3 km M5.6程度 Xランク	—
津名冲断層	津名冲断層	約10 km M6.5程度 Aランク	—

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動の場合)
有馬-高槻断層帯 (平成13年6月13日)	有馬-高槻断層帯	約55 km M7.5±0.5 Zランク	—
六甲・淡路島断層帯 (平成17年1月12日)	六甲・淡路島断層帯主部 六甲山地南縁-淡路島 東岸区間	約71 km M7.9程度 Aランク	約71 km M7.9程度
	六甲・淡路島断層帯主部 淡路島西岸区間	約23 km M7.1程度 Zランク	
六甲・淡路島断層帯 (平成17年1月12日)	先山断層帯	約12 km M6.6程度 Zランク	—

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿三角帯の西部2)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
大阪湾断層帯	大阪湾断層帯	約40 km M7.5程度 Zランク	—
上町断層帯	上町断層帯 主部区間	約43 km M7.6程度 Zランク	約56 km M7.7程度
	上町断層帯 沿岸部区間	約23 km M7.1程度 Xランク	
中央構造線断層帯※	中央構造線断層帯 金剛山地東縁区間	約16 km M6.8程度 Zランク	M8.0程度 もしくはそれ以上
	中央構造線断層帯 五条谷区間	約29 km M7.3程度 Xランク	
	中央構造線断層帯 根来区間	約27 km M7.2程度 Aランク	
	中央構造線断層帯 紀淡海峡-鳴門海峡区間	約42 km M7.5程度 A*ランク	
生駒断層帯	生駒断層帯	約42 km M7.5程度 Zランク	—

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
大阪湾断層帯 (平成17年1月12日)	大阪湾断層帯	約39 km M7.5程度 Zランク	—
上町断層帯 (平成16年3月10日)	上町断層帯	約42 km M7.5程度 S*ランク	—
※中央構造線断層帯は「四国地域の活断層の長期評価」(平成29年12月19日公表)の際に評価を改訂したため、今回は改訂していない。			
生駒断層帯 (平成13年5月15日)	生駒断層帯	約38 km M7.0—7.5程度 Aランク	—

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿三角帯の西部3)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
京都盆地－ 奈良盆地断層帯	京都盆地－ 奈良盆地断層帯 北部区間	約23 km M7.1程度 Aランク	約57 km M7.8程度
	京都盆地－ 奈良盆地断層帯 南部区間	約35 km M7.4程度 S*ランク	
宇治川断層	宇治川断層	約6 km M6.1程度 A*ランク	－
木津川断層帯	木津川断層帯	約22 km M7.1程度 Zランク	－
大野木断層	大野木断層	約6 km M6.1程度 Xランク	－
黄瀬断層	黄瀬断層	約12 km M6.6程度 Xランク	－

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
京都盆地－ 奈良盆地断層帯南部 (奈良盆地東縁断層帯) (平成13年7月11日)	三方・花折断層帯 花折断層帯 南部区間		
	京都盆地－ 奈良盆地断層帯南部 (奈良盆地東縁断層帯)	約35 km M7.4程度 S*ランク	－
木津川断層帯 (平成16年9月8日)		約31 km M7.3程度 Zランク	－

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿三角帯の北部I)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
琵琶湖西岸断層帯	琵琶湖西岸断層帯 北部区間	約29 km M7.3程度 S*ランク	約55 km M7.7程度
	琵琶湖西岸断層帯 南部区間	約35 km M7.4程度 Zランク	
三方断層帯・ 花折断層帯	三方断層帯	約27 km M7.2程度 Zランク	約48 km M7.6程度
	花折断層帯 北部区間	約28 km M7.2程度 Xランク	
	花折断層帯 南部区間	約20 km M7.0程度 Aランク	
沖島北方冲断層	沖島北方冲断層	約6 km M6.1程度 Xランク	—
熊川断層	熊川断層	約13 km M6.7程度 Xランク	—

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
琵琶湖西岸断層帯 (平成21年8月27日)	琵琶湖西岸断層帯 北部区間	約23 km M7.1程度 Sランク	約59 km M7.8程度
	琵琶湖西岸断層帯 南部区間	約38 km M7.5程度 Zランク	
三方・花折断層帯 (平成15年3月12日)	三方断層帯	約26 km M7.2程度 Zランク	—
	花折断層帯 北部区間	約26 km M7.2程度 Xランク	—
	花折断層帯 中部区間	約20 km M7.0程度 — ※	—
	花折断層帯 南部区間	約15 km M6.8程度 — ※	M7.3程度 A*ランク ※

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

※花折断層帯の中部区間と南部区間は二つを合わせた区間（中南部）
として地震の発生確率が評価されていた。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿三角帯の北部2)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
耳川断層	耳川断層	約9 km M6.4程度 Aランク	—
松屋断層	松屋断層	約10 km M6.5程度 Xランク	—
野坂断層帯	野坂断層帯 北部区間	約13 km M6.7程度 Xランク	約46 km M7.6程度
	野坂断層帯 南部区間	約33 km M7.4程度 Zランク	
白木-丹生断層	白木-丹生断層	約15 km M6.8程度 A*ランク	—
敦賀断層帯	敦賀断層帯	約27 km M7.2程度 Zランク	—
駄口断層	駄口断層	約9 km M6.4程度 Zランク	—
路原断層	路原断層	約12 km M6.6程度 Xランク	—

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
野坂・集福寺断層帯 (平成15年6月11日)			
	野坂断層帯	約31 km M7.3程度 Zランク	—
湖北山地断層帯 (平成15年6月11日)	湖北山地断層帯 北西部	約25 km M7.2程度 Zランク	—
	湖北山地断層帯 南東部	約16 km M6.8程度 Zランク	—

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿三角帯の北部3)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
岩熊断層	岩熊断層	約4 km M5.8程度 Xランク	—
集福寺断層	集福寺断層	約10 km M6.5程度 Xランク	—
柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯・ 浦底-柳ヶ瀬山断層帯	柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯 北部区間	約19 km M7.0程度 Aランク	約127 km M8.1-8.3程度
	柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯 中部区間	約62 km M7.8程度 Zランク	
	柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯 南部区間	約52 km M7.7程度 Zランク	
	浦底-柳ヶ瀬山断層帯	約35 km M7.4程度 S*ランク	
	奥川並断層	約12 km M6.6程度 Xランク	

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
野坂・集福寺断層帯 (平成15年6月11日)	集福寺断層	約10 km M6.5程度 Xランク	—
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯 (平成16年1月14日)	柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯主部 北部区間	約48 km M7.6程度 Zランク	約100 km M8.2程度
	柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯主部 中部区間	約12 km M6.6程度 Xランク	
	柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯主部 南部区間	約45 km M7.6程度 Xランク	
	浦底-柳ヶ瀬山断層帯	約25 km M7.2程度 Xランク	

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿三角帯の東部I)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
池田山断層	池田山断層	約16 km M6.8程度 S*ランク	—
今須断層	今須断層	約9 km M6.4程度 Xランク	—
鈴鹿山脈東縁断層帯	鈴鹿山脈東縁断層帯	約45 km M7.6程度 Zランク	—
養老-桑名- 四日市断層帯	養老-桑名-四日市断層帯 北部区間	約35 km M7.4程度 S*ランク	約64km M7.4-7.8程度
	養老-桑名-四日市断層帯 中部区間	約18 km M6.9程度 S*ランク	
	養老-桑名-四日市断層帯 南部区間	約24 km M7.1程度 Aランク	
	養老-桑名-四日市断層帯 鈴鹿沖区間	約16 km M6.8程度 Aランク	

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
鈴鹿東縁断層帯 (平成17年3月9日)	鈴鹿東縁断層帯	約34-47 km M7.5程度 Zランク	—
鈴鹿西縁断層帯 (平成16年9月8日)	鈴鹿西縁断層帯	約44 km M7.6程度 Aランク	—
養老-桑名- 四日市断層帯 (平成13年11月14日)	養老-桑名- 四日市断層帯	約60 km M8程度 Aランク	

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

③既存の活断層帯の改訂・新たな活断層の評価|新旧評価の比較(近畿三角帯の東部2)

新しい評価			
活断層のくくり	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
布引山地東縁断層帯	布引山地東縁断層帯	約30 km M7.3程度 A*ランク	—
高茶屋断層帯	高茶屋断層帯	約36 km M7.4程度 S*ランク	—
伊勢湾断層帯	伊勢湾断層帯北部	約26 km M7.2程度 Zランク	—
	伊勢湾断層帯南部 内海区間	約16 km M6.8程度 Zランク	約36 km M7.4程度
	伊勢湾断層帯南部 白子-野間区間	約20 km M7.0程度 S*ランク	

改訂前の評価			
活断層のくくり (公表日)	評価単位区間	長さ 地震の規模 ランク	長さ 地震の規模 (連動)
頓宮断層 (平成16年9月8日)	頓宮断層	約31 km M7.3程度 A*ランク	—
布引山地東縁断層帯 (平成16年4月14日)	布引山地東縁断層帯 西部	約33 km M7.4程度 A*ランク	—
	布引山地東縁断層帯 東部	約48 km M7.6程度 Zランク	—
	伊勢湾断層帯主部 北部区間	約25 km M7.2程度 Zランク	約42 km M7.5程度
伊勢湾断層帯 (平成14年5月8日)	伊勢湾断層帯主部 南部区間	約17 km M6.9程度 Zランク	
	白子-野間断層	約21 km M7.0程度 Aランク	

赤字は主要活断層帯。評価単位区間の区切り方は新旧で必ずしも一致しない。

④近畿地域の活断層で発生する地震の長期評価|手法

地域内の活断層によるM6.8以上の地震発生確率(地域確率)

□ 手法A) 区域内の評価対象活断層の発生確率の集合から地域確率を求める

- 個別の活断層での発生確率を計算する際は、平均活動間隔、最新活動時期の幅を考慮(p.33参照)
- 発生確率が不明な活断層 → 平均活動間隔Rを仮定
 - 平均変位速度S(m/千年)と1回変位量D(m)から $R=D/S$ で算出
 - 平均変位速度:「新編日本の活断層」等に表示された活動度(A級~C級)に応じて仮定(評価文 付表2)
- 地表の証拠からは活動の痕跡を認めにくい地震を考慮(p.34参照)

□ 手法B) 区域内の最近の地震活動から統計的経験則に基づく手法により地域確率を求める

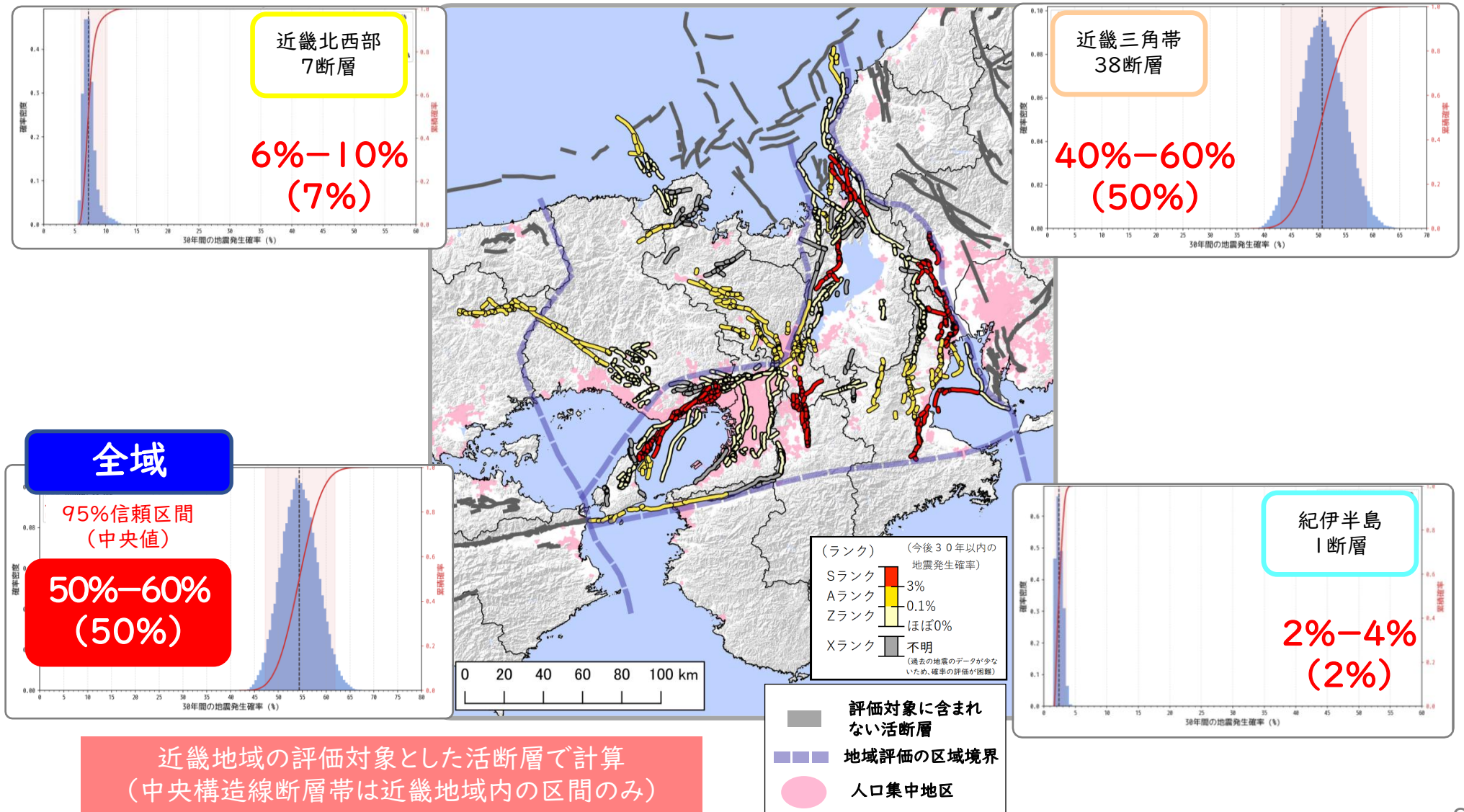
- 近代以降(1919年~)の地震観測結果を基にした統計的経験則(G-R式)に基づく手法により、M6.8以上の地震が発生する確率を計算



2つの手法による地域確率を比較・考察し、
一方を各区域・地域全体の確率として採用する

④近畿地域の活断層で発生する地震の長期評価|手法A

手法A) 区域内の評価対象活断層の発生確率の集合から地域確率を求める



④近畿地域の活断層で発生する地震の長期評価|手法B

手法B) 区域内の最近の地震活動から統計的経験則により地域確率を求める

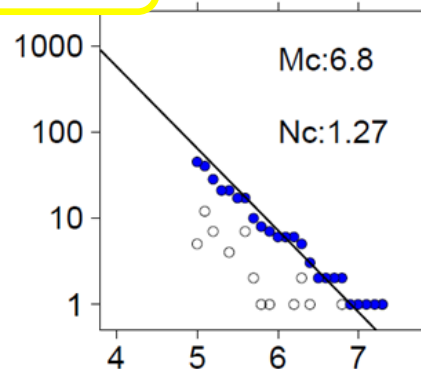
1919.1-2023.3 (104年間) 深さ25 km以浅で発生した5.0以上の地震の規模別度数

※手法Bを用いて地震の発生確率を評価する際には、—— で囲まれた範囲の地震を考慮した。

1919 01 01 00:00 -- 2023 03 31 24:00

近畿北西部

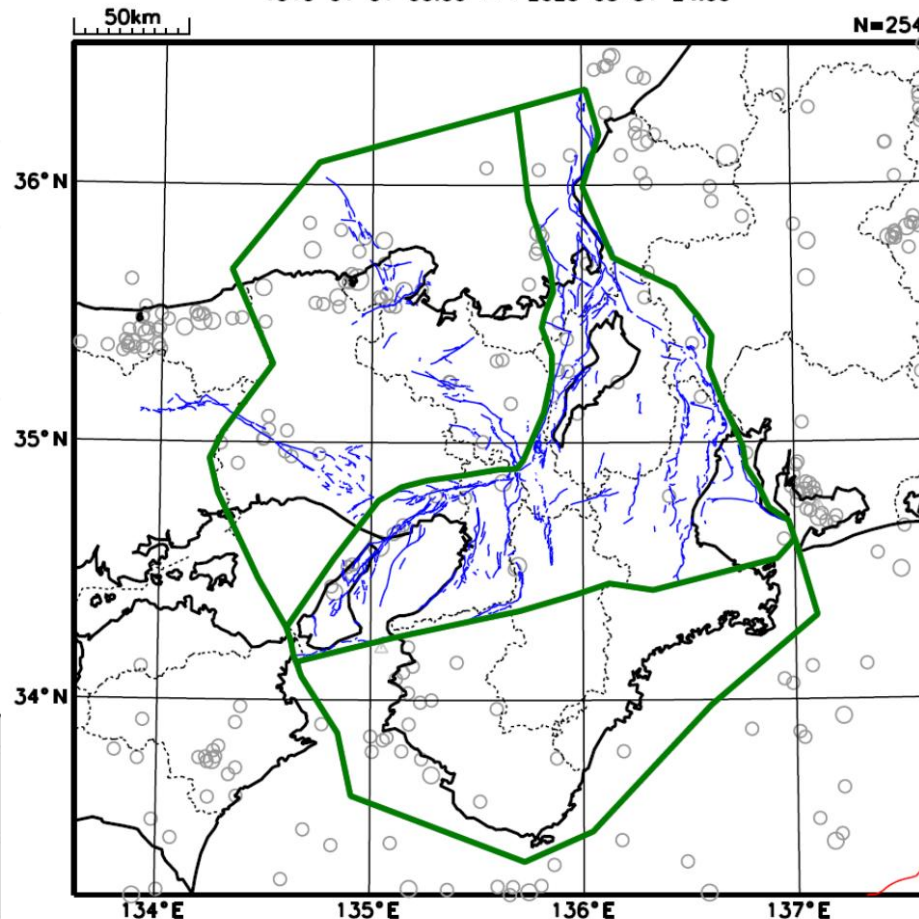
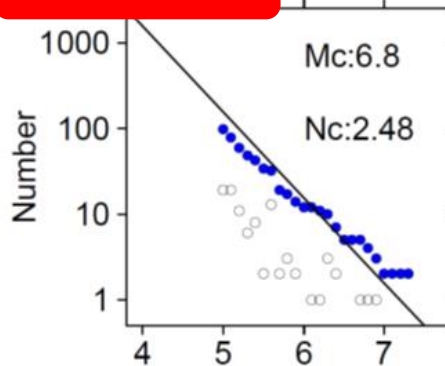
30%



全域

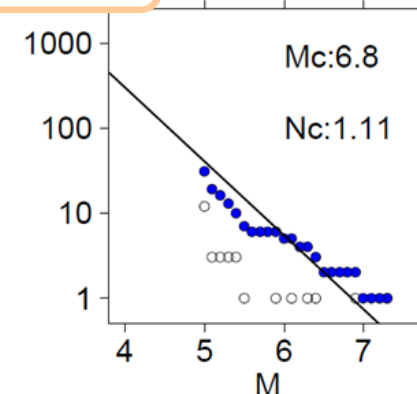
M6.8以上の地震の発生確率

50%



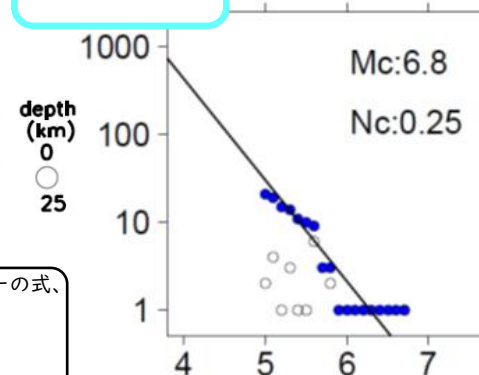
近畿三角帯

30%



紀伊半島

7%

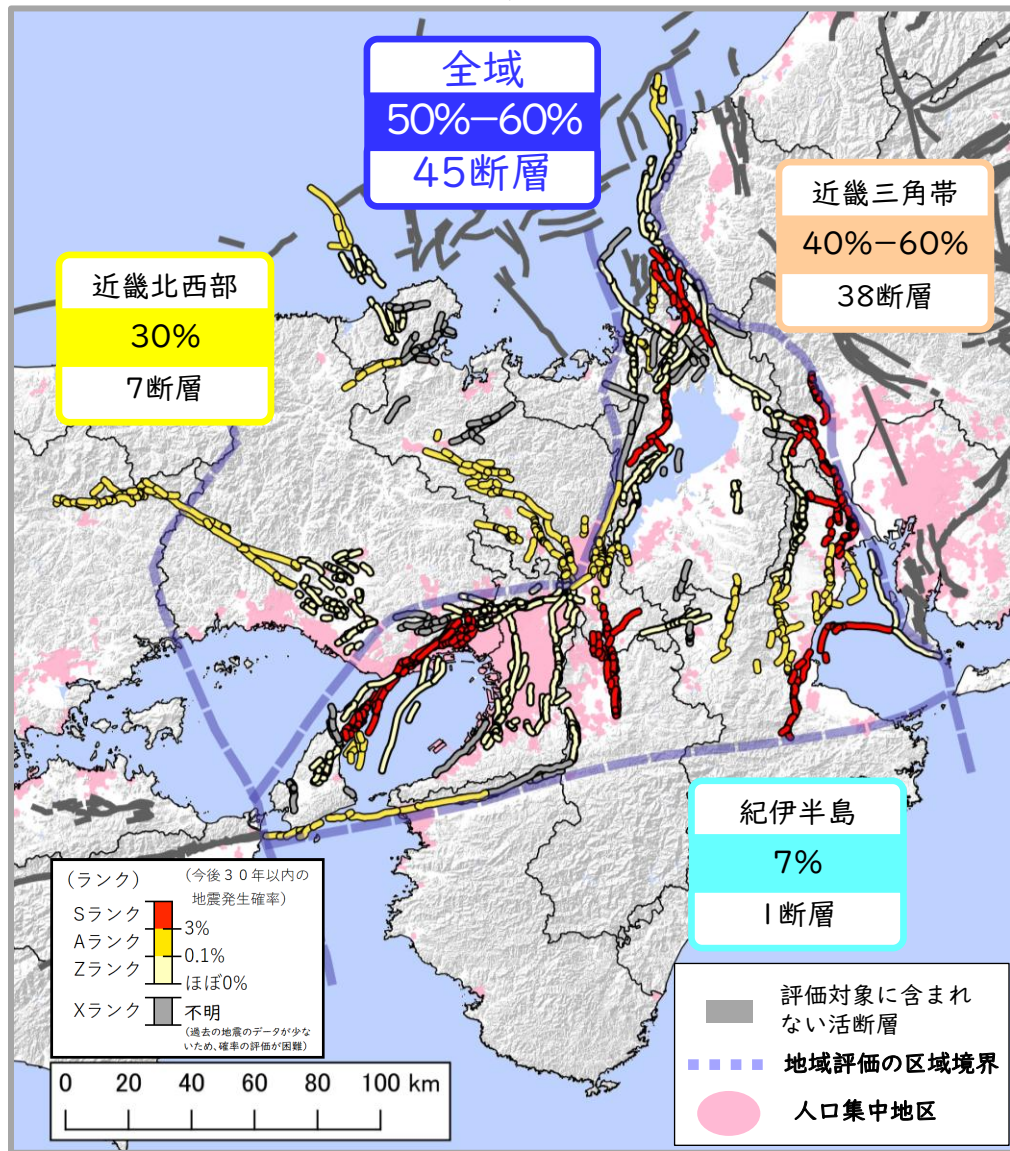


手法Bとして、ここでは、地震の規模(マグニチュード)と規模別度数の経験式(グーテンベルク-リヒターの式、「G-R式」)に基づく方法を採用する。具体的な手順は次の通りである。

- (1) 全期間T(年間)の震源カタログを用いて規模別頻度分布を求め、G-R式にフィッティングする。
- (2) 得られたG-R式を用いて、ターゲットとするマグニチュードMcを超える地震数Ncを求める。
- (3) 地震1個あたりの年数(活動間隔)Tr(年間/個)を、 $Tr = T/Nc$ で計算する。
- (4) ポアソン過程のモデル $P(\Delta T) = 1 - \exp(-\Delta T/Tr)$ に基づいて30年確率P(30)を求める。

④近畿地域の活断層で発生する地震の長期評価|結果

地域内でM6.8以上の地震が30年以内に発生する確率



近畿地域は、評価対象活断層で発生した1995年兵庫県南部地震や1927年北丹後地震をはじめ、被害を及ぼすような陸域の浅い地震活動が活発な地域である。

近畿北西部

- 主要活断層帯が複数存在する
- 最近約100年間の地震活動は活発であり、被害地震の発生数も多い。被害地震は1927年北丹後地震(M7.3)などがある

近畿三角帯

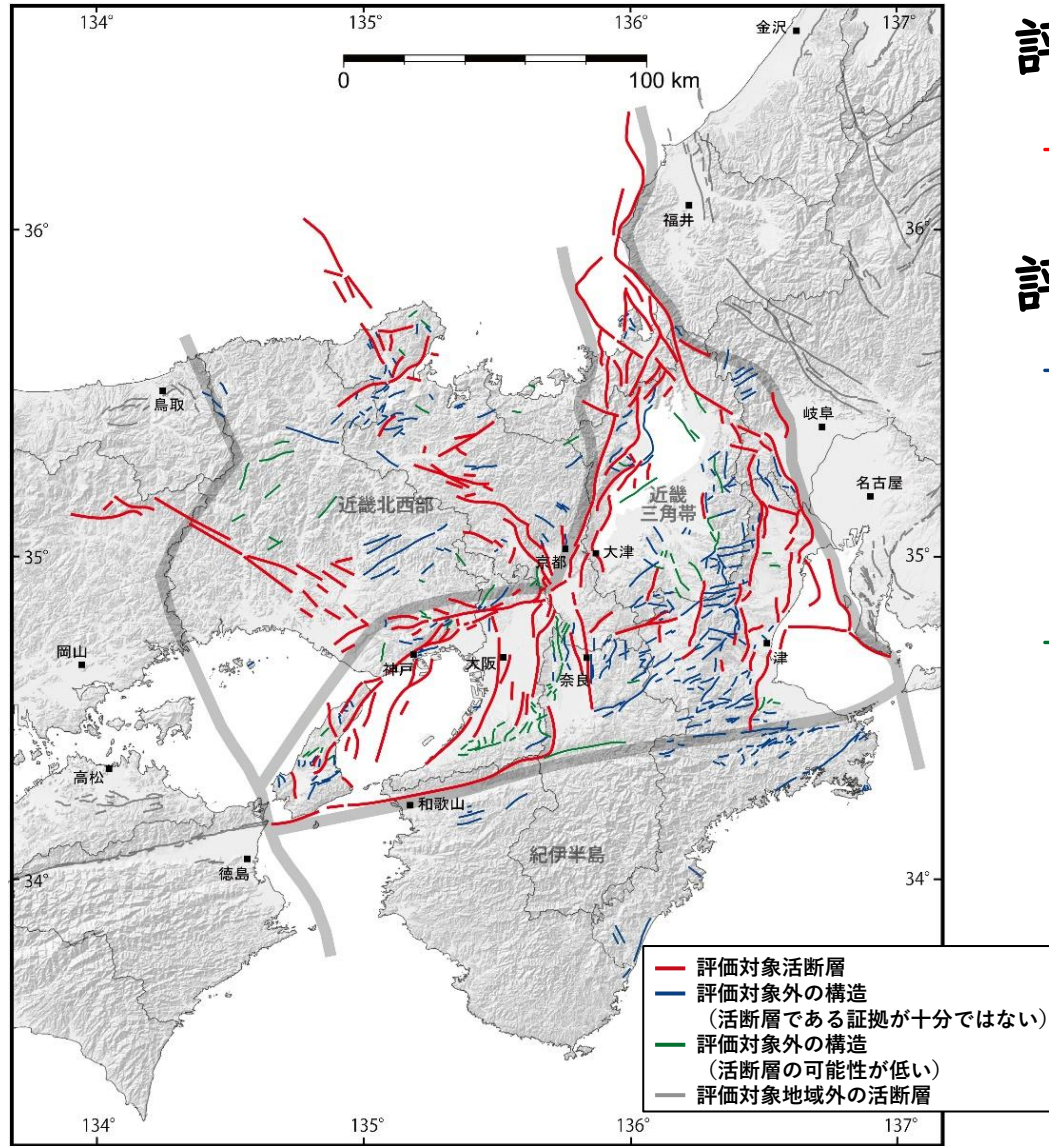
- 国内でも活断層が集中的に分布しており、それらの活動度も高い
- 被害地震は1995年兵庫県南部地震(M7.3)などがある

紀伊半島

- 中央構造線断層帯以外に確実な活断層は知られていない
- 既知の活断層を起源とする地震活動は低調

※近畿地域全域及び近畿三角帯については、今後30年以内にM6.8以上の地震が発生する確率として、手法A(p.25)による評価結果を採用する。一方、近畿北西部及び紀伊半島については、手法Aによる評価結果は過小評価となっている可能性が高いことから、手法Aではなく、手法B(p.26)による評価結果を採用する。

①近畿地域内の評価対象活断層の洗い出し



— :地域評価の区域境界

評価対象活断層

— 評価対象活断層

評価対象としなかった構造

- 活断層の可能性が指摘されているものの、少なくとも現時点で活断層としての証拠が揃っていないことから評価対象から外した構造
- 活断層の可能性が低いと判断し、評価対象から外した構造

今後に向けて

近畿地域の活断層で発生するM6.8以上の地震の長期評価を行った。
ただし、以下のような課題が残されている

評価の対象とした活断層でも、評価に必要なデータが十分ではない

- ✓活動履歴が不明、活動年代が絞り込めていないものが多く、**評価単位区間の連動性やその発生確率**についても十分に評価できていない。
- ✓活断層の**活動性や平均的なずれの速度について不明**なものが存在する。
特に、新たに評価した活断層については不明なものが多い。

評価の対象となるべき活断層を網羅的に把握できていない可能性

- ✓**沿岸海域の活断層について**、評価の対象としたのは一部（主に陸域の主要活断層帯の延長部）のみ。また、得られている情報は十分ではない。
- ✓断層の長さが10 km程度以上の活断層でも、**伏在活断層や低活動度の活断層**を見落としている可能性。

近畿地域の特性として

- ✓活動時期が重なるものがあり、隣接する活断層や区間と同時または短期間に活動が集中した可能性があるが、データが不足し十分な検討ができていない。（近畿三角帯は特に活断層が密集）
- ✓日本海沿岸に分布する活断層との関係。

評価の信頼度向上のために取り組むべきこと

- ✓ 活動履歴の精度向上・新たなデータの取得（古地震・歴史・考古資料調査）
- ✓ 沿岸海域の活断層・伏在活断層等の調査の推進
- ✓ 活断層で発生する多様な地震や地表に痕跡を認めにくい地震について考慮した評価手法の検討・改良

參考資料

熊本地震を契機とした地震発生確率のランクの導入

■ 熊本地震発生前の長期評価概要

評価対象	布田川断層帯(布田川区間)
地震の規模	M7.0程度
ずれの量	右ずれを主体として全体で2m程度
30年以内の地震発生確率	ほぼ0% - 0.9% [BPT]
地震後経過率	0.08 - 0.9

熊本地震の発生

■ 熊本地震発生で分かったこと

一方、文部科学省が2016年熊本地震の後に、被災地で実施したアンケート調査によると、約7割の人が、地域に活断層のあることを認知していなかったと答え、さらに、認知している人の約半数は、活断層があることは知っていたが大きな地震が発生するとは考えていなかったと回答している[28, 29]。この結果は、都市部では地震発生の可能性を認知して耐震化がある程度進んでいたが、人口過疎地域では認知も進まず耐震化を含めた防災対策も遅れていたことを示唆している[30]。宇土市でも、住宅の耐震化率が51%（2016年度）と低かった[23]。これらの事実は、地震本部の調査研究の成果が、被災地の住民の防災リテラシー（災害に立ち向かうために必要な能力[31]）の向上には限定的にしか役立っていなかったことを示している。

平田（2017）より一部抜粋

熊本地震後、長期評価について以下のような指摘

- ✓ 防災を担う自治体担当者や一般国民に、正しく危険性を伝えられていない
- ✓ あたかも降水確率を見るかのように、「起こらない確率」が高く見えてしまい、かえって安心情報になっている

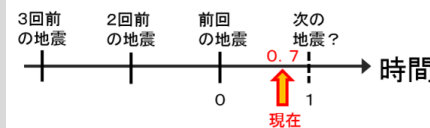
熊本地震の教訓を踏まえ、国民が活断層のリスクを正しく理解し、最終的には適切な防災・減災行動につながるように、より分かりやすい表記に見直す必要がある。

地震発生可能性を表すランクについて

- Sランク(高い)：30年以内の地震発生確率が3%以上
- Aランク(やや高い)：30年以内の地震発生確率が0.1-3%
- Zランク：30年以内の地震発生確率が0.1%未満
- Xランク：地震発生確率が不明

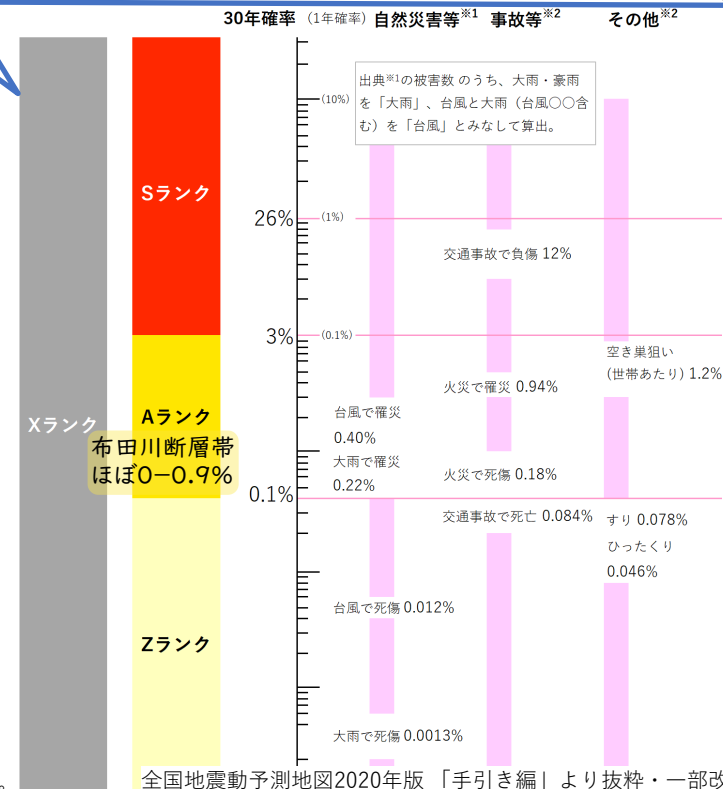
(過去の地震 データが少ないため、確率の評価が困難)

地震後経過率※が0.7以上である活断層は、ランクに*を付記する。



※ 地震後経過率とは、現時点の地震発生の切迫度を示す数字です。1に近づくと、次の地震がいつ起きてもおかしくない状態と言えます。

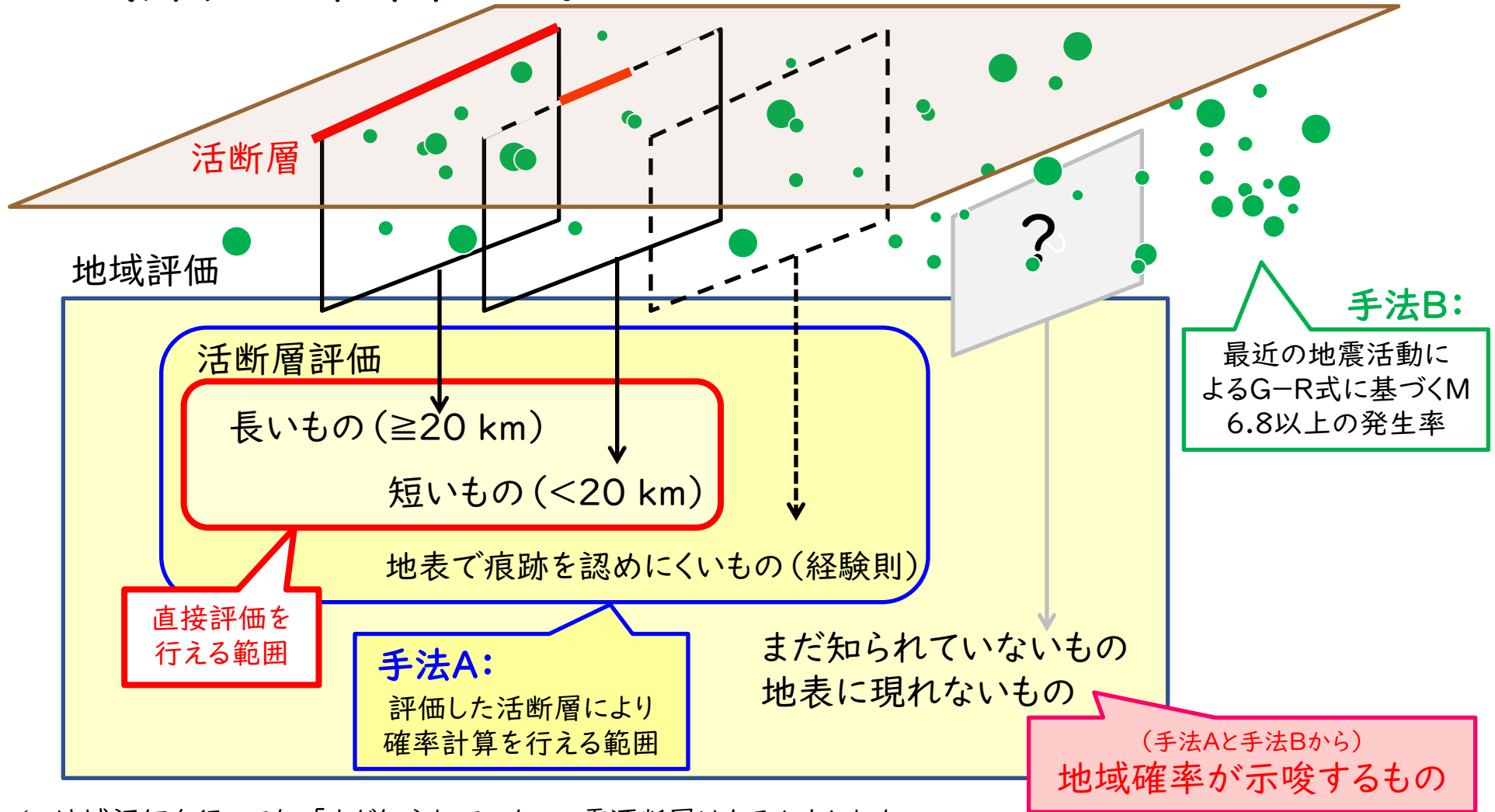
新たな試み



※1 日本の自然災害の発生確率は「消防庁の災害年報」に基づく1999～2018年の20年間の値から計算。

※2 事故等は「令和元年警察白書」・「令和元年版消防白書」・「令和元年の刑法犯に関する統計資料」から計算。

地域評価の確率値が示すもの

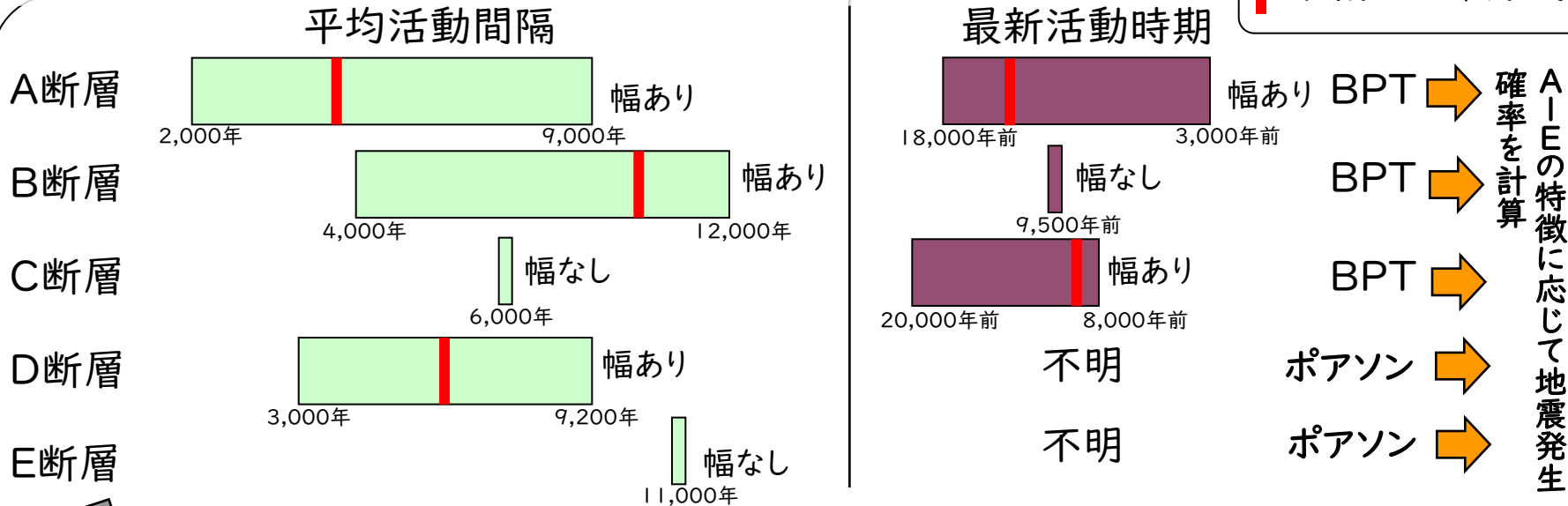


- ✓ 地域評価を行っても、「まだ知られていない」震源断層はあるかもしれない。
 - ✓ 同じ区域であれば、未知の震源断層は既知のものと同じ特性である可能性がある。
 - ✓ 最近の地震活動によるG-R式に基づく発生率には、区域内の既知・未知を含む震源断層が動く可能性が含まれている。
- ⇒ 現在の地域確率は、区域内の未知の震源断層の存在 (多寡)とその活動の可能性を含んでいる。

個別の活断層の発生確率の幅の取扱い

(参考) モンテカルロ法による、地震発生確率値の算出方法

：乱数により年代を与える



A-Eについて地域確率を求める

$\Delta\%$ (1回目)

1回目

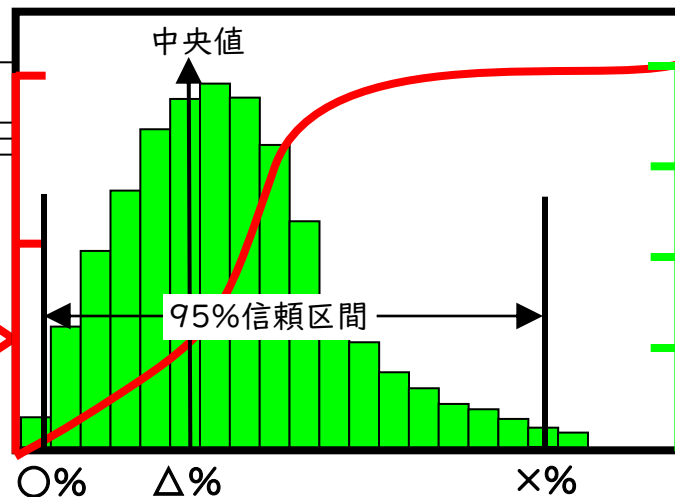
2回目

3回目

10万通りのシナリオ

累積頻度分布
(合計 1)

地域確率 (30年間の地震発生確率) の範囲
(最小~最大)



10万通りのシナリオの
地域確率の頻度分布

(付録4-2, 付図4)

地表の証拠からは活動の痕跡を認めにくい地震の考慮

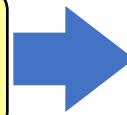
課題

2004 年新潟県中越地震 (M6.8 最大震度7)

→ 地表地震断層が認められた小平尾地点でのトレンチ調査の結果

地震に伴う変位量は最大でも20 cm

トレンチ調査結果のみから中越地震をイベントとして把握できない？



「地表地質調査で痕跡を認めにくい地震」が過小評価されている可能性

対応

「地表の証拠からは活動の痕跡を認めにくい地震」が単位区間で発生する可能性を考慮



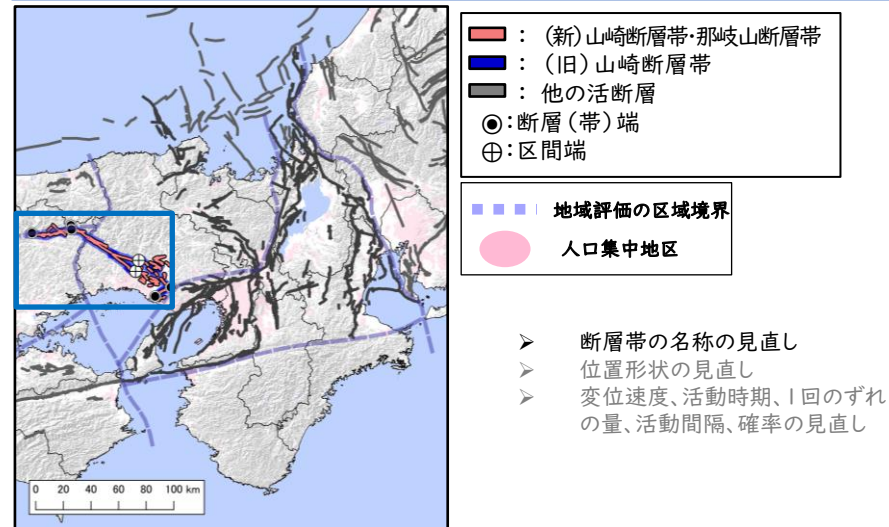
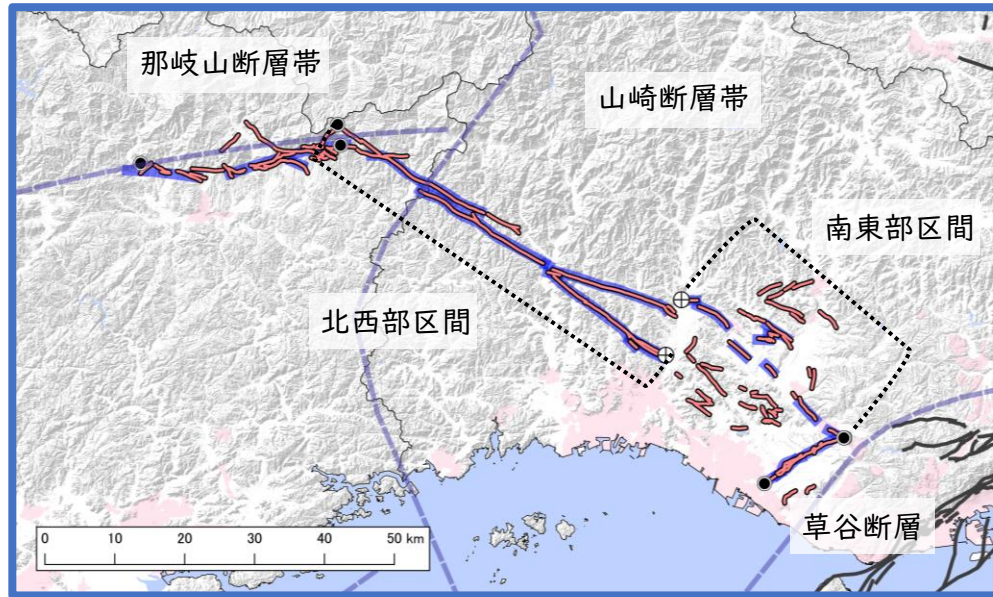
主要活断層帯において過去に発生したM6.8以上の地震で、明瞭な地表地震断層を伴う場合とそうでない場合の出現傾向 (2:1) を参照

地表の証拠からは活動の痕跡を認めにくい地震の発生確率モデル

- ✓ 対象となる「単位区間」で得られている平均活動間隔の2倍の間隔で発生しているとみなし、ポアソン過程により地震発生確率を求める。
- ✓ 地震規模は、最大で地表の活断層長から想定される地震と同一規模、最小でM6.8とする。
(「活断層の長期評価手法」報告書(暫定版)p.58)

山崎断層帯・那岐山断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 山崎断層帯の長期評価(一部改訂)(平成25年7月19日公表)



- 断層帯の名称の見直し
- 位置形状の見直し
- 変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

○断層帯の名称の見直し

- ✓ 山崎断層帯 → 山崎断層帯・那岐山断層帯として評価
- ✓ 構成断層の位置形状・活動様式・活動間隔などの違いという観点から山崎断層帯・那岐山断層帯に二分
- ✓ ただし、その内容は従来の評価から大幅に改訂されたわけではない。

※各断層帯・区間共にランクの変化はない。

山崎断層帯

北西部区間 **Aランク** (0.1%–1%)
→ **A*ランク** (0.2%–2%)

南東部区間 **Zランク** (ほぼ0%–0.01%)
→ **Zランク** (ほぼ0%–0.005%)

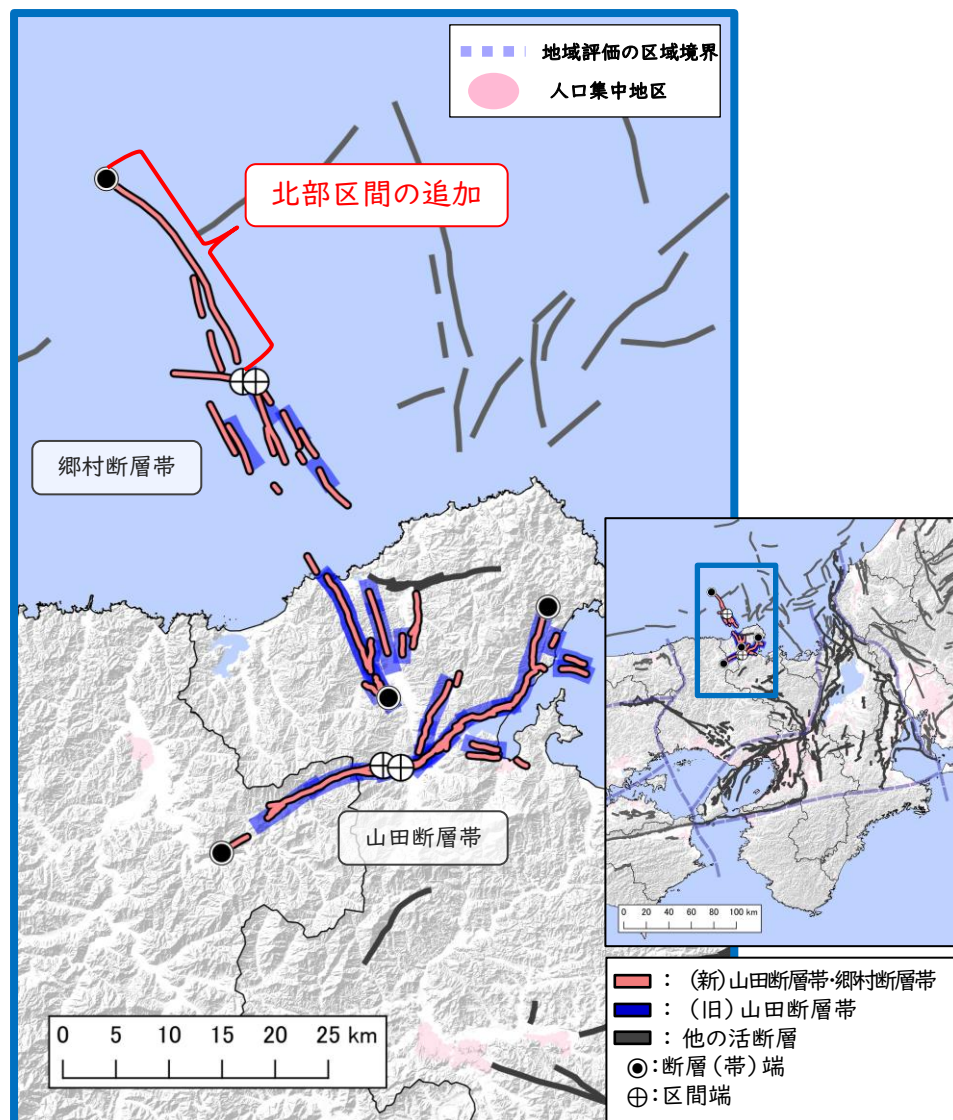
草谷断層 **Zランク** (ほぼ0%)
→ **Zランク** (ほぼ0%)

那岐山断層帯 **Aランク** (0.06%–0.1%)
→ **Aランク** (0.06%–0.1%)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

やまだ 山田断層帯・郷村断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価「山田断層帯の評価」(平成16年12月8日公表)



○断層帯の名称の見直し

- ✓ 山田断層帯 → 山田断層帯・郷村断層帯に名称変更
- ✓ 構成断層の位置形状、地下構造、活動様式、活動間隔などの観点から、断層帯を山田断層帯・郷村断層帯に二分

○位置形状の見直し

山田断層帯:

- ✓ 最新活動時期の違いから東部区間・西部区間に分割

郷村断層帯:

- ✓ 最新活動時期の違いから南部区間・北部区間に分割
- ✓ 北端は地震予知総合研究振興会(2012)の結果を採用
→ 全体の長さ: 約34 km以上 → 約56 km (M7.4程度以上)

→ M7.7程度)

※34 km: 海上保安庁水路部(1994)における調査範囲の北縁を北端とした

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

山田断層帯:

- ✓ 西部区間 平均活動間隔:
不明 → 9,500-19,000年程度
Xランク → A*ランク (0.04%-2%)
地震後経過率: 不明 → 0.6-1.2

- ✓ 東部区間は不明のまま: Xランク → Xランク

郷村断層帯:

- ✓ 北部区間について新たに追加
A*ランク (ほぼ0%-2%)
地震後経過率 0.003-1.4

- ✓ 南部区間大きな変更なし Zランク → Zランク (ほぼ0%)
最新活動時期: 1927年北丹後地震

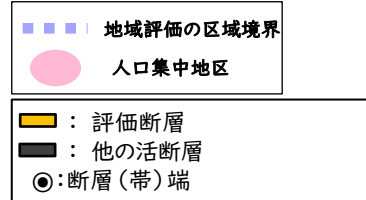
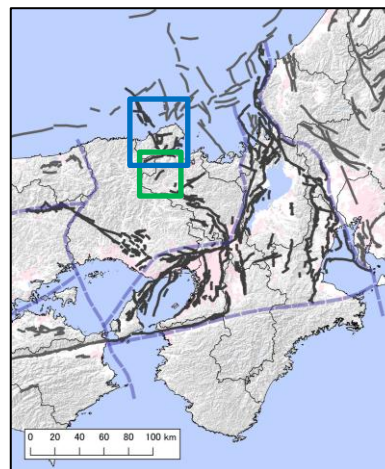
郷村断層帯南部区間を中心に地表地震断層が生じた

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

中山断層の長期評価・三岳山断層の長期評価

新規評価

新規評価



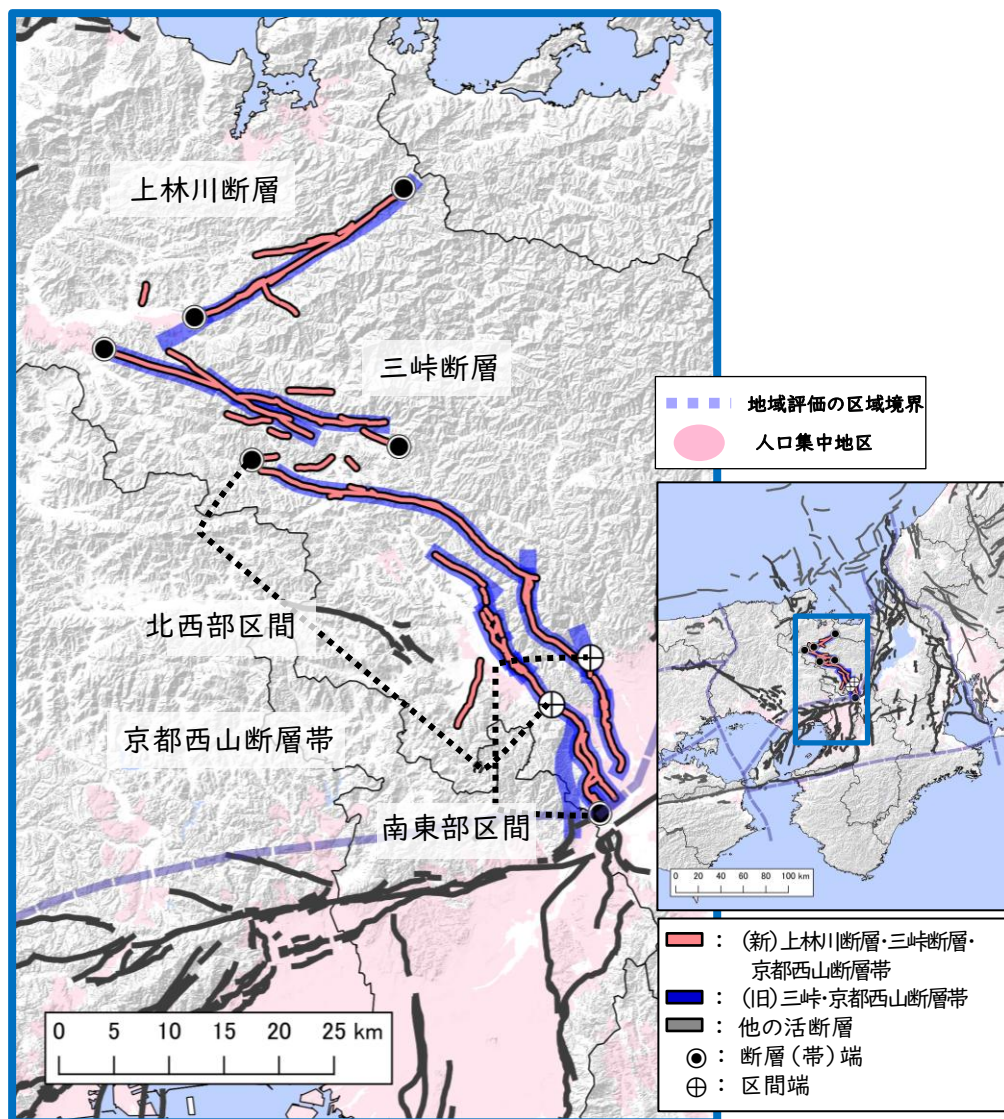
- 「活断層」として新たに評価(約12 km)
- 山田断層帯・郷村断層帯から独立した断層として評価
- Xランク

- 「活断層」として新たに評価(約9 km)
- Xランク

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

上林川断層・三峠断層・京都西山断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 三峠・京都西山断層帯の評価(平成25年7月19日公表)



○断層帯の名称の見直し

- ✓ 構成断層の位置形状・地下構造・活動様式などの違いという観点から、断層帯を上林川断層・三峠断層・京都西山断層帯に三分
- ✓ 名称を上林川断層・三峠断層・京都西山断層帯に

○位置形状の見直し

- ✓ 上林川断層: 約26 km → 約22 km
- ✓ 三峠断層: 約26 km → 約28 km
- ✓ 京都西山断層帯: (全長) 約42 km → 約45 km
(北西部区間: 約35 km、南東部区間: 約14 km)
構成断層の変位の向きの違いや位置形状、地下構造などを考慮し、北西部区間・南東部区間に分割

※ランクの変更はなし

- ✓ 上林川断層: ~~X~~ランク
- ✓ 三峠断層: **Aランク** (0.4%–0.6%)
→ **Aランク** (0.3%–0.4%)
(平均活動間隔) 7,000–9,300年程度
- ✓ 京都西山断層帯:
A*ランク (ほぼ0%–0.8%) ※現評価から大きな変更なし
→ 北西部区間 **A*ランク** (ほぼ0%–0.7%)
(最新活動時期) 約2千4百年前後、2世紀以前
(平均活動間隔) 3,600–5,600年程度
南東部区間(最新活動時期は不明) **Aランク** (0.6%)
(平均活動間隔) 4,700年程度

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

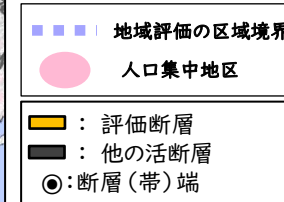
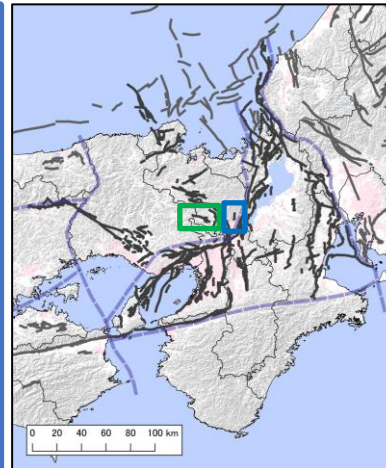
にしがも 西賀茂断層の長期評価・はぶ いのくら 埴生-猪倉断層の長期評価

新規評価

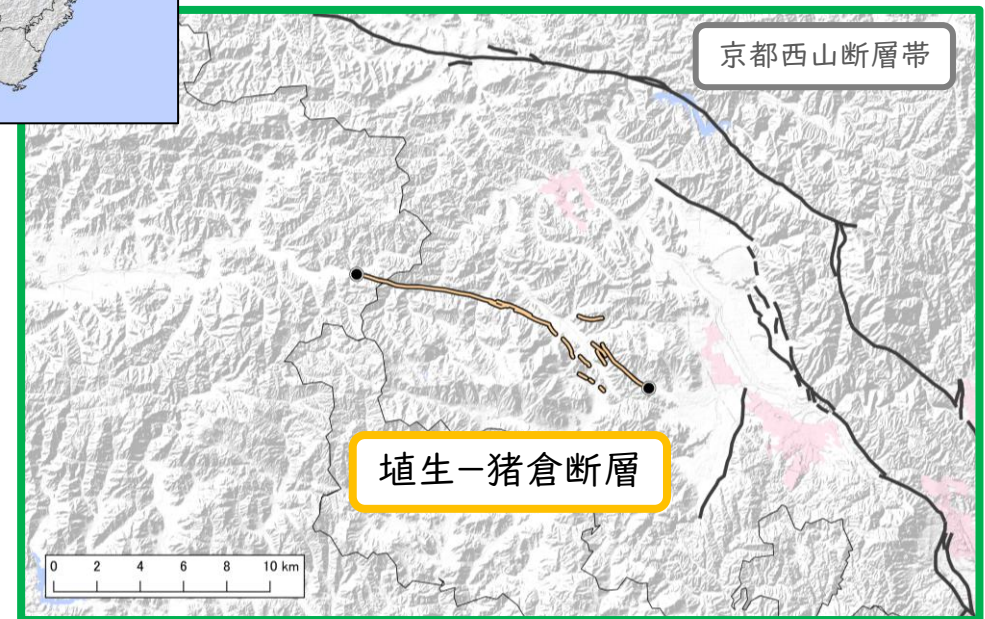
新規評価



- 「**活断層**」として新たに評価(約5 km)
- **Aランク** (0.3%)



※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

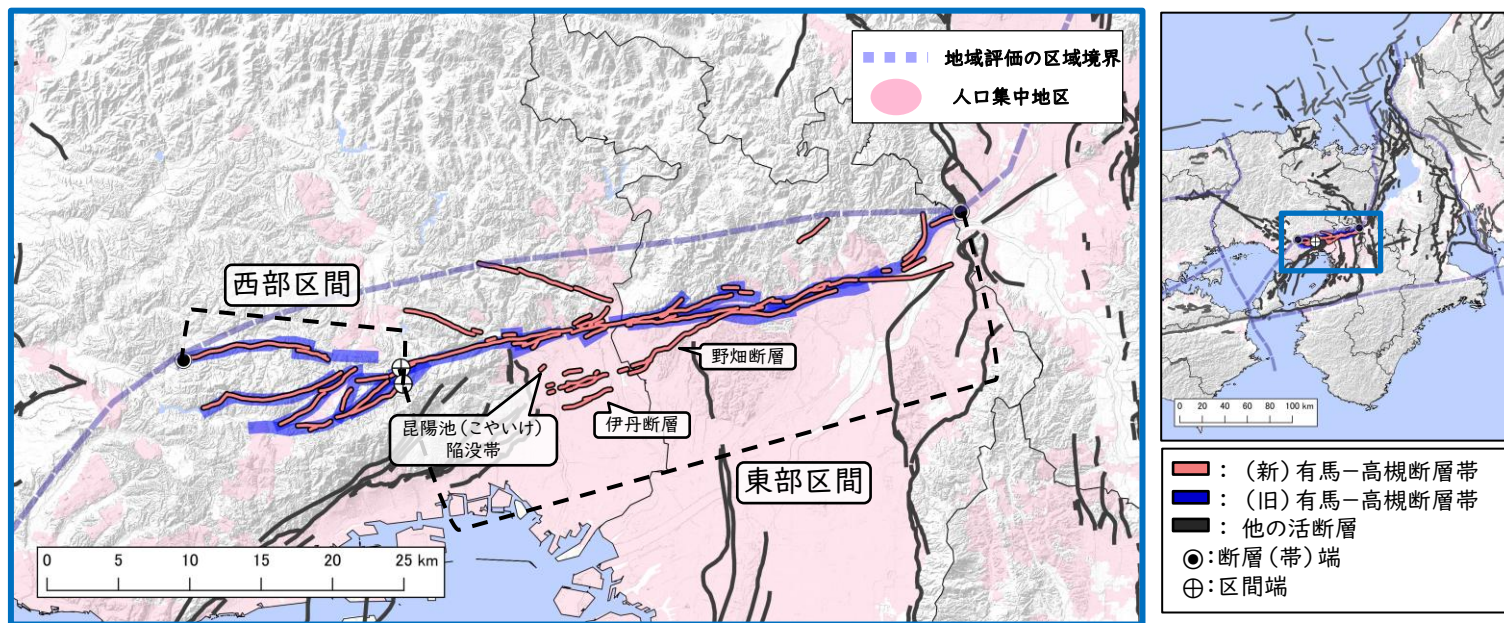


- 「**活断層**」として新たに評価(約14 km)
- 走向やずれの向き、松田(1990)の基準により、埴生断層、猪倉断層を一括りで評価
- **Aランク** (0.4%-1%)

ありま たかつき

有馬－高槻断層帯の長期評価（一部改訂）

改訂前の評価 「有馬－高槻断層帯の評価」（平成13年6月13日公表）



○位置形状の見直し

- ✓ 構成する活断層の変位地形の明瞭さの違いや分布形状、活動性の違いに基づき東部区間・西部区間に分割
- ✓ 断層の連続性及び地質構造を考慮した結果、野畑断層、伊丹断層、昆陽池(こやいけ)陥没帯を六甲・淡路島断層帯から付け替え
- ✓ 全体の長さは55 kmで変わらず(M7.7 程度)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

✓ 東部区間

最新活動時期：西暦1596年慶長(文禄)伏見地震

平均活動間隔：1,000–2,000年程度(間接法と直接法のハイブリッド) → 1,000–2,500年(間接法と直接法のハイブリッド)

Zランク(ほぼ0%–0.04%)のまま

1回の変位量が3 mから3–4 mに変更

✓ 西部区間

最新活動時期：不明

平均活動間隔：不明

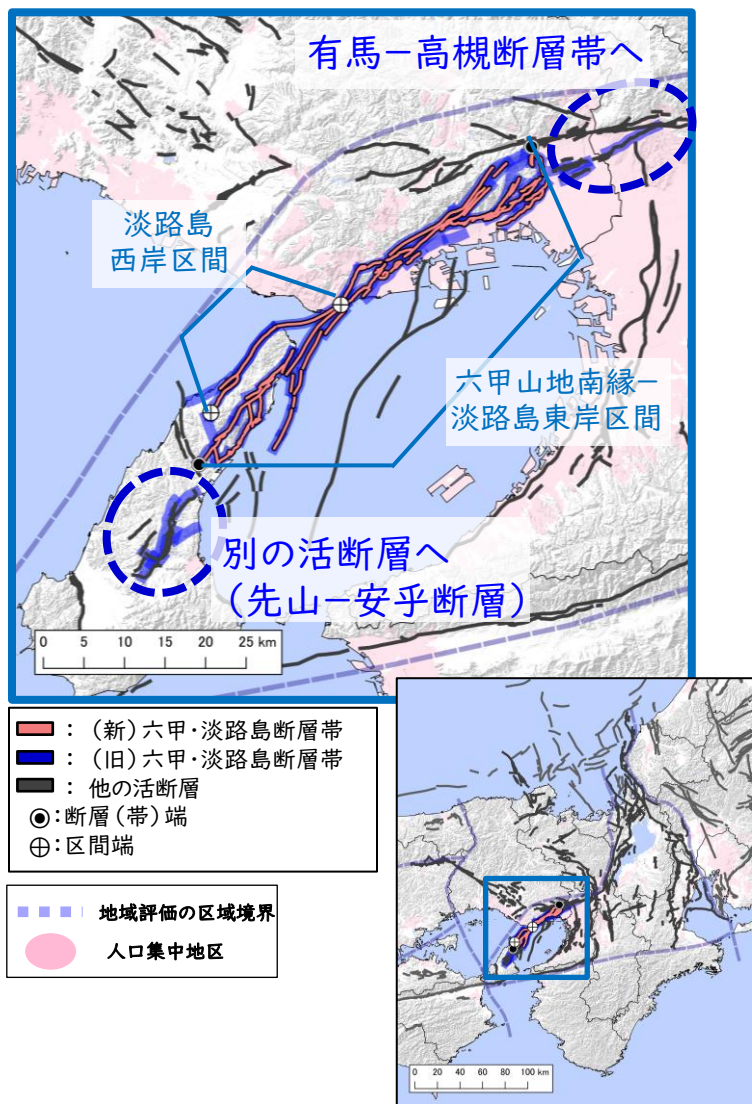
Xランク

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

ろっこう あわじしま

六甲・淡路島断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 「六甲・淡路島断層帯の評価」(平成17年1月12日公表)



○位置形状の見直し

- ✓ 先山断層は別の活断層として評価(先山-安乎断層)
- ✓ 野畑断層、昆陽池(こやいけ)陥没帯、伊丹断層は、断層の連続性及び地質構造を考慮し、有馬-高槻断層帯の一部として評価

全体及び六甲山地南縁-淡路島東岸区間の長さについて
57 km (M7.8 程度)と評価

(旧評価では、約71 km (M7.9程度))

- ✓ 淡路島西岸区間は21 kmに

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

- ✓ 六甲山地南縁-淡路島東岸区間:

最新活動時期: 16世紀→15世紀以降16世紀以前

平均活動間隔: 900-2,800年程度→800-2,800年程度

Aランク (ほぼ0%-1%) → **S*ランク** (ほぼ0%-7%)

- ✓ 淡路島西岸区間: これまでと同様に**Zランク**

最新活動時期: 1995年兵庫県南部地震

淡路島西岸区間を中心に地表地震断層が生じた

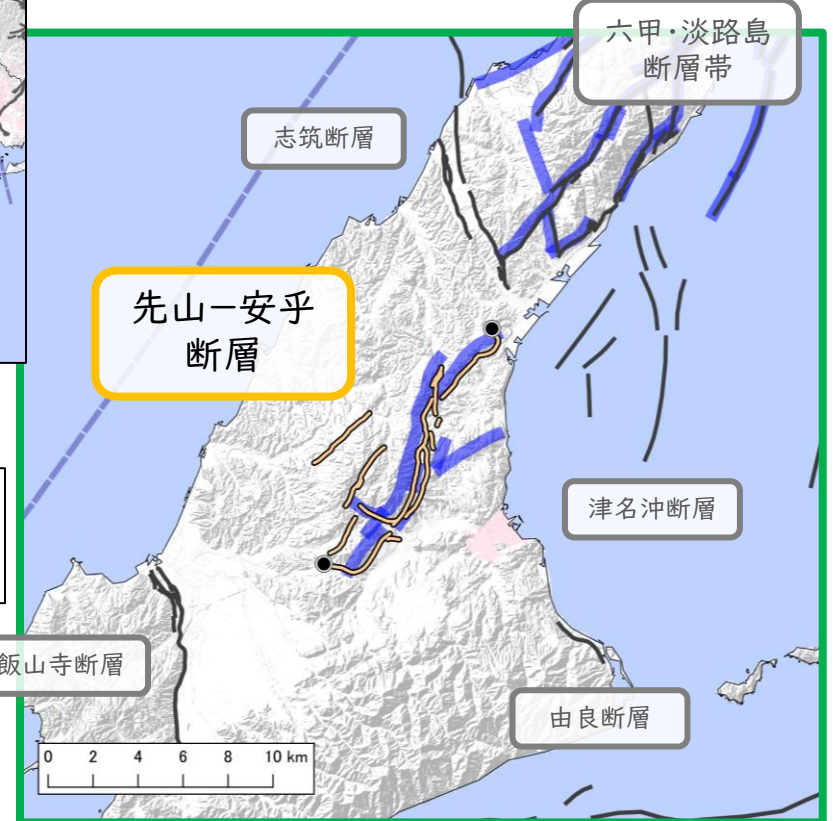
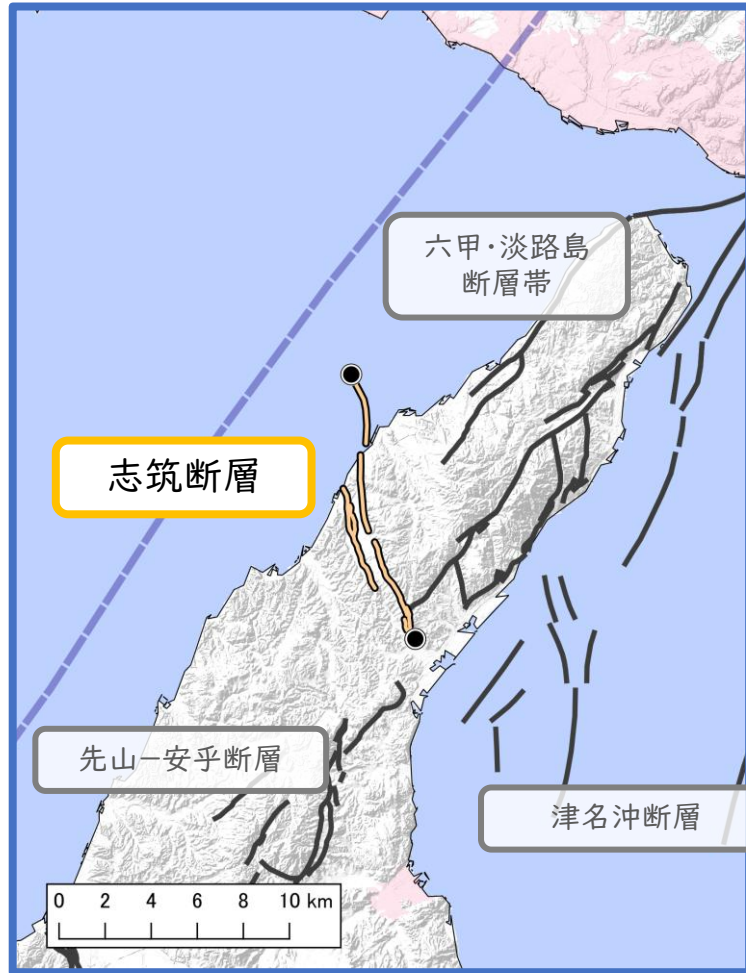
※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

しづき 志筑断層の長期評価・せんざん あいが 先山-安乎断層の長期評価

新規評価

六甲・淡路島断層帯から独立した断層として評価

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p_{14})が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している



- 「活断層」として新たに評価(約12 km)
- 変位様式の違いにより、六甲・淡路島断層帯(主に右横ずれ断層)とは別断層として評価
- Xランク

- 「活断層」として新たに評価(約13 km)
- 先山-安乎断層と六甲・淡路島断層帯との間を志筑断層が横切ることから、六甲・淡路島断層帯とは別断層として評価
- Zランク(ほぼ0%)

はんさんじ

ゆら

飯山寺断層の長期評価・由良断層の長期評価

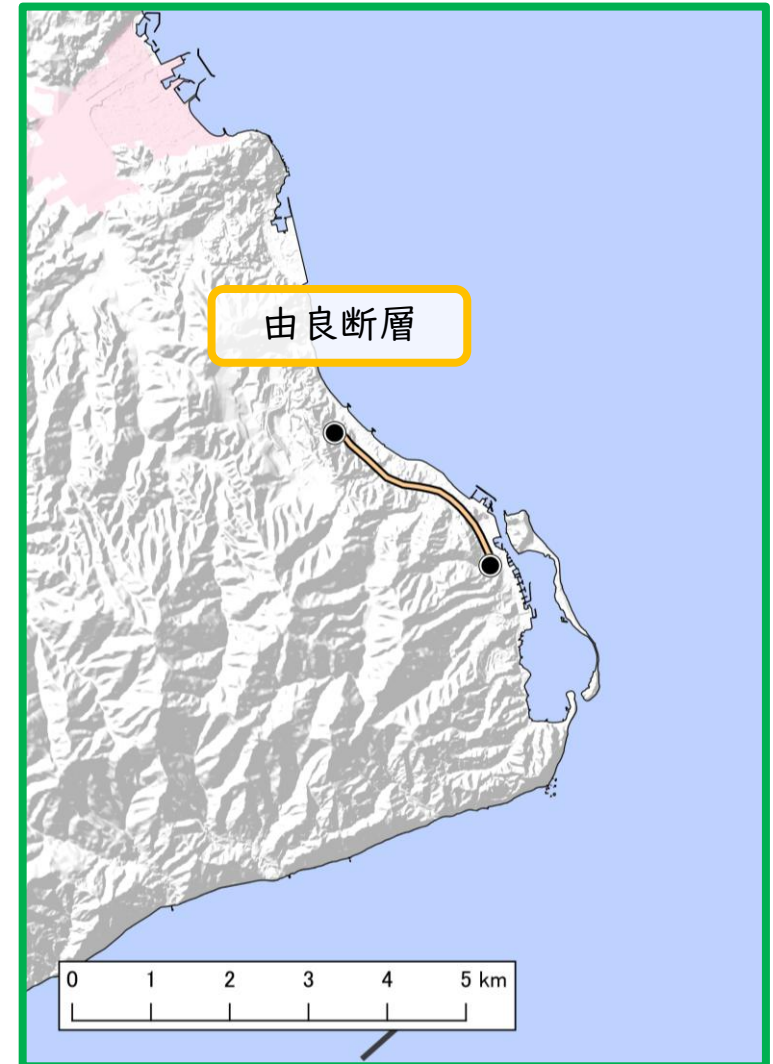
新規評価

新規評価

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している



- 「活断層」として新たに評価(約9 km)
- Xランク



- 「活断層」として新たに評価(約3 km)
- Xランク

つな お き

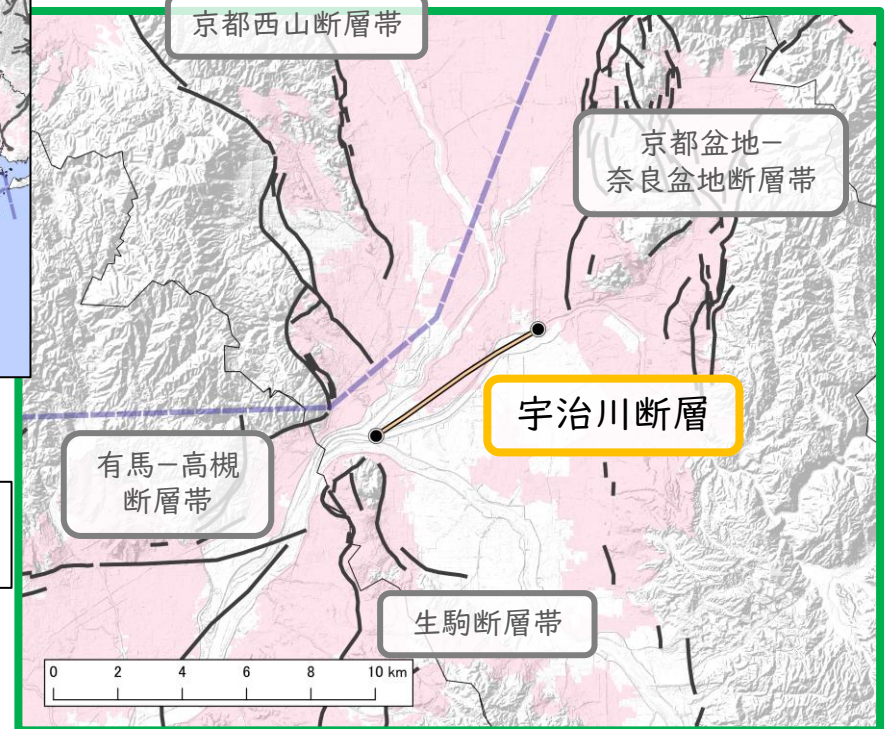
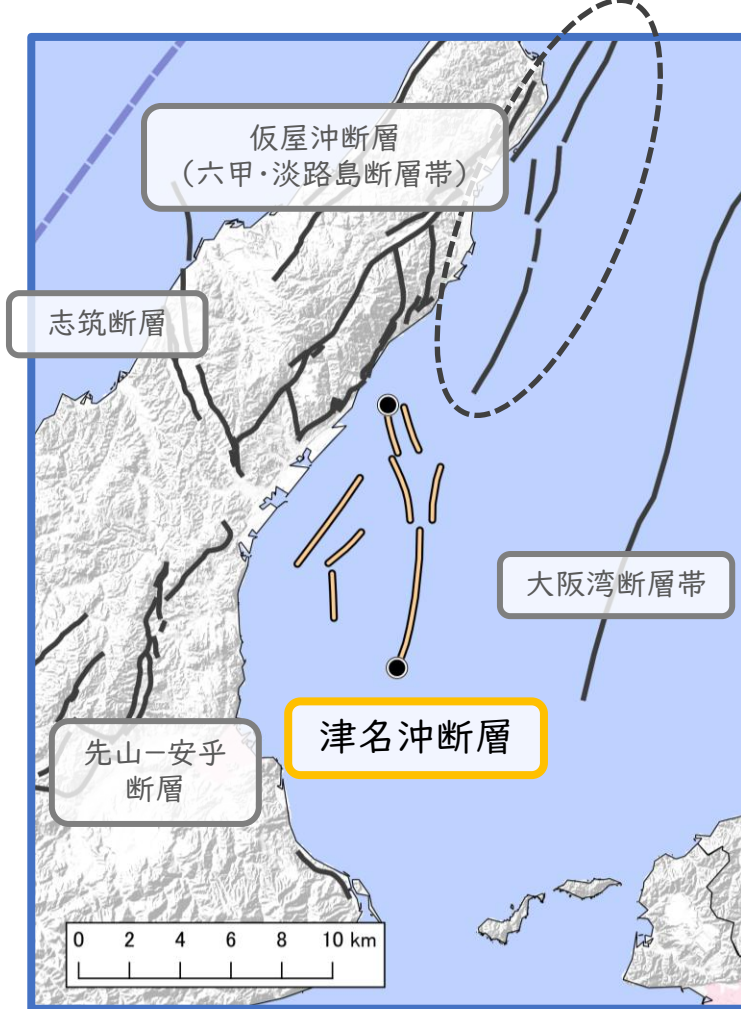
う じ が わ

津名沖断層の長期評価・宇治川断層の長期評価

新規評価

新規評価

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の
算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である
活断層については、ランクに「*」を付記している

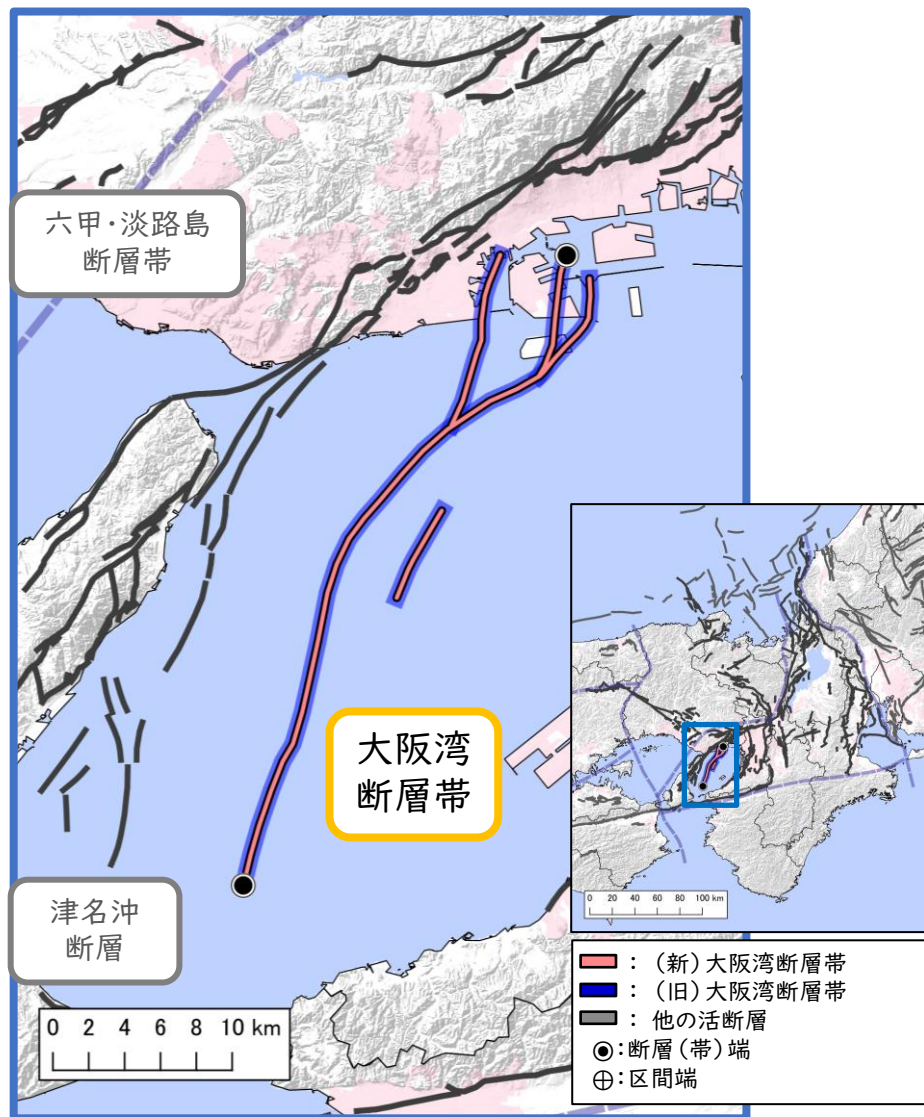


- 「**活断層**」として新たに評価(約10 km)
- 仮屋沖断層(西側隆起)と異なる東側隆起の変位を示すことから六甲・淡路島断層帯とは別断層として評価
- **Aランク** (0.6%~1%)

- 「**活断層**」として新たに評価(約6 km)
- 有馬-高槻断層帯とは近接して分布+走向も似ている以下の2点から別の起震断層とした
 - ・活動度や活動間隔なども大きく異なるとされている
京都市地域活断層調査委員会(2004)
 - ・有馬-高槻断層帯とは構造的に連続しないと考えられる
赤松ほか(2007);堤・飯尾(2019)
- **A*ランク** (ほぼ0%~1%)

大阪湾断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 「大阪湾断層帯の評価」(平成17年1月12日公表)



○新規知見

- ・ Itoh and Takemura (2018)
大阪湾で実施された音波探査及びボーリングの結果を統合的に解釈し、音響基盤面や海成粘土層の深度分布を推定
ただし、引用に伴う変更なし

○位置形状

- ・ 全体の長さは約40 km (M7.5程度)

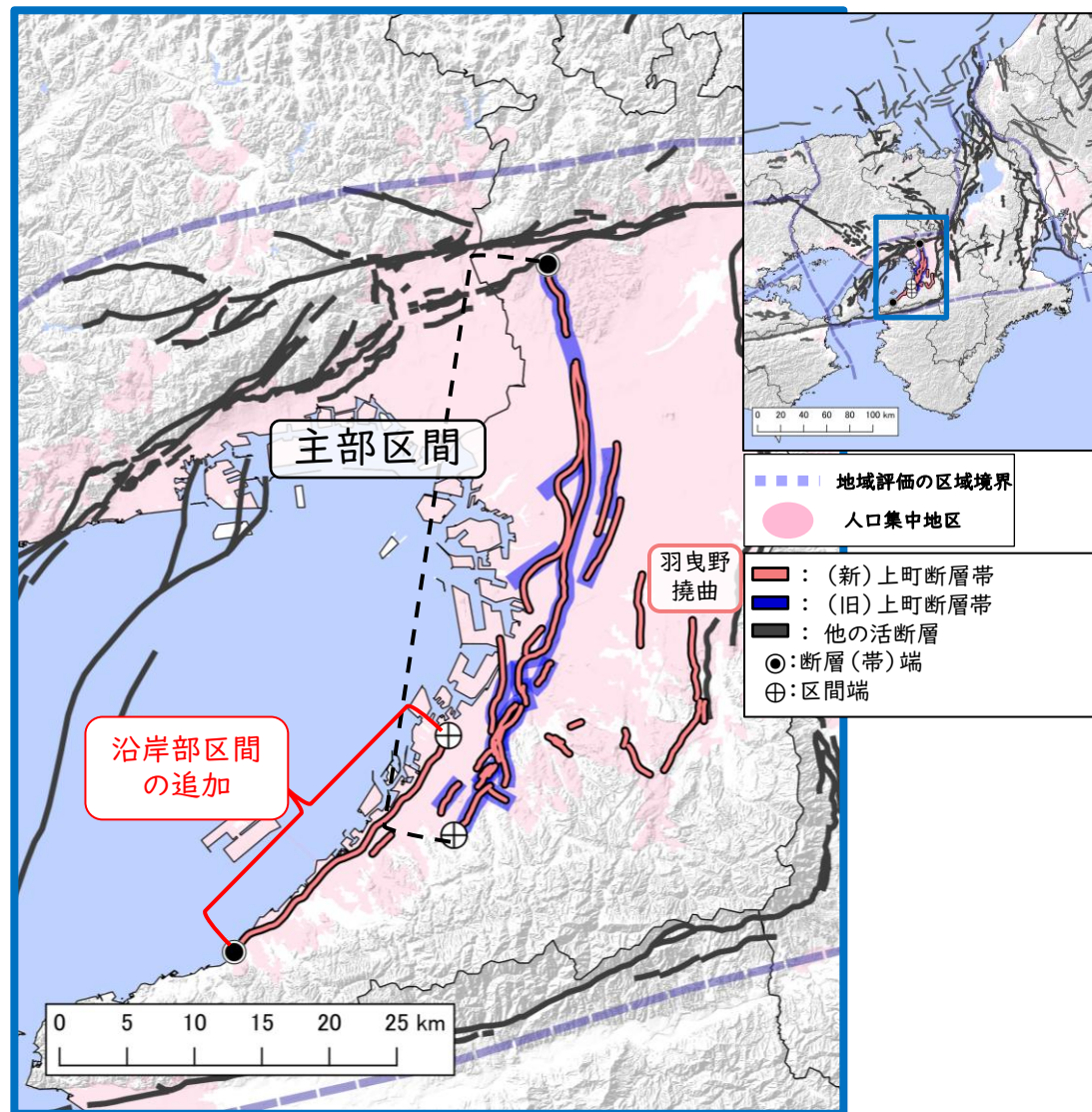
○地震発生確率

- ・ Zランクのまま(ほぼ0%— 0.008%)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

上町断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価「上町断層帯の評価」(平成16年3月10日公表)



○位置形状の見直し

主部区間:

- ✓ 羽曳野撓曲(はびきのとうきょく)等、構成する断層に追加(松田(1990)の基準、地下形状等から)

沿岸部区間:

- ✓ 沿岸部区間は新規知見(近藤ほか(2015)、都市圏活断層図(杉戸ほか(2020))等)により追加

全体の長さ: 約42 km以上 → 約56 kmに(M7.5程度 → M7.7程度)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

主部区間:

- ✓ 最新活動時期:
約2万8千年前以後、約9千年前以前
→ 約2千7百年前以後、11世紀以前

- ✓ 平均活動間隔:
8,000年程度(間接法)
→ 6,400-8,700年程度(直接法)

→ S*ランク(2%-3%) → Zランク(ほぼ0% - 0.003%)

沿岸部区間:

- ✓ 最新活動時期: 約2千4百年前以後、17世紀初頭以前

- ✓ 平均活動間隔: 不明 → Xランク
(1回のずれの量 2.5 m程度(上下成分)、
平均的なずれの速度: 不明)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

いこま

生駒断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 生駒断層帯の評価(平成13年5月15日公表)

○位置形状の見直し

- ✓ 全体の長さ: 約38 km → 約42 km
- ✓ 傾斜: 東傾斜50-60°(現評価: 低角30-40°)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

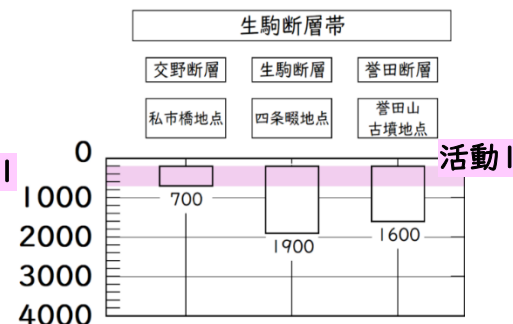
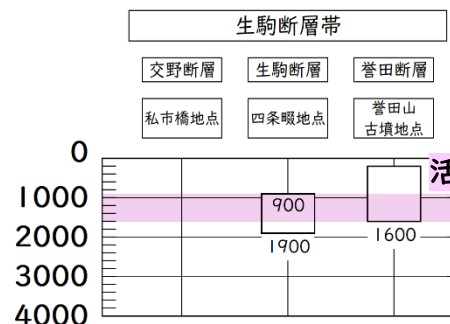
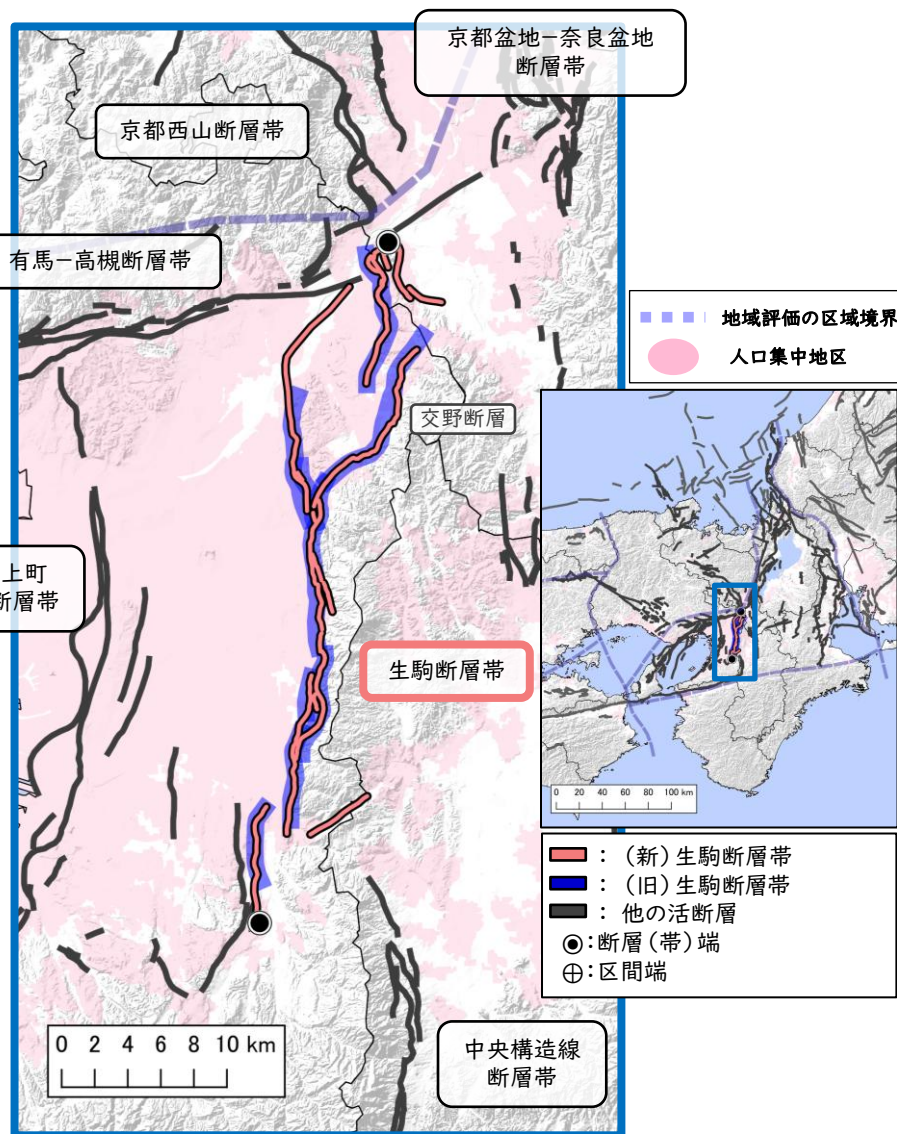
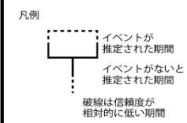
- ✓ 平均活動間隔は変更なし(3千-6千年)
- ✓ 最新活動時期は、交野(かたの)断層による河道地形の変位(東郷ほか, 2002)を採用し、14世紀以降に変更(旧評価では、西暦400年頃から西暦1000年頃)
- ✓ これに伴い確率のランクは **Aランク** (ほぼ0%-0.2%) から **Zランク** (ほぼ0%) へ

旧評価

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2001)

改訂後評価

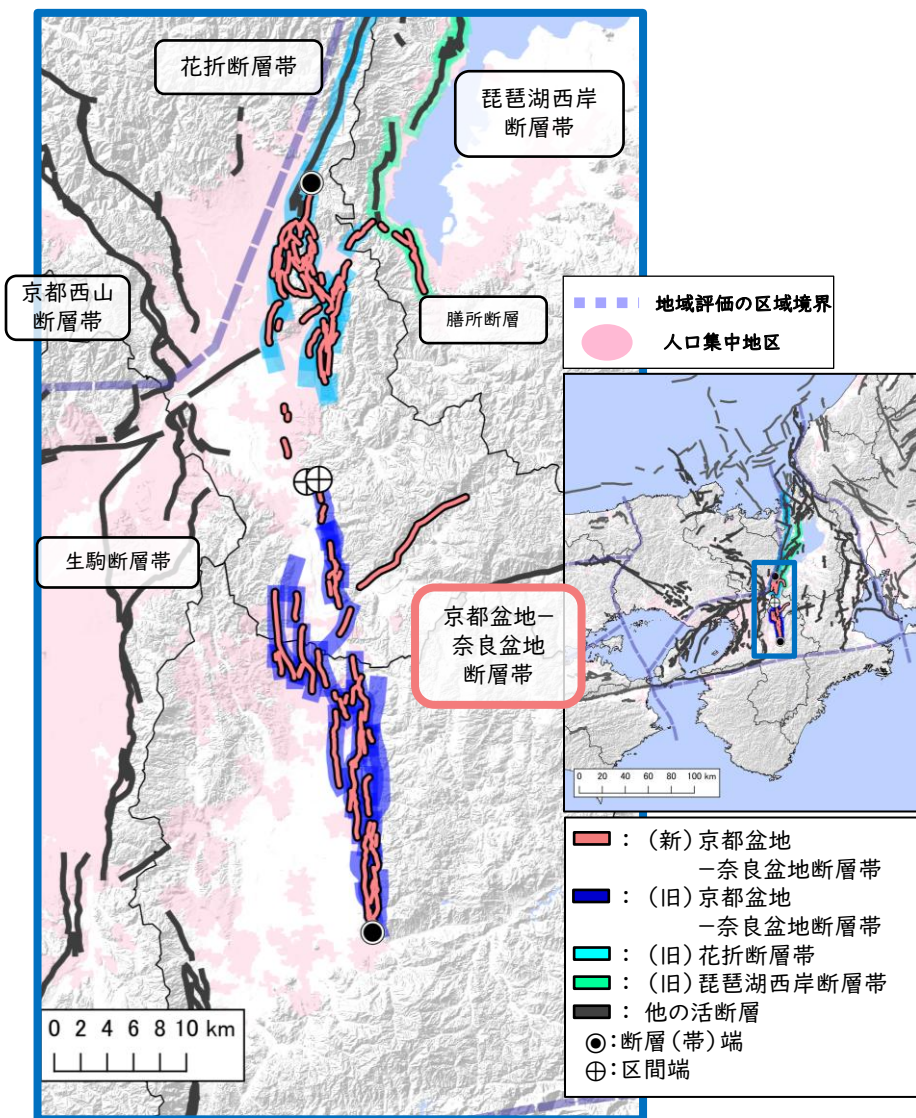
地震調査研究推進本部地震調査委員会(2026)



※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

京都盆地-奈良盆地断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 京都盆地-奈良盆地断層帯南部(奈良盆地東縁断層帯)の評価(平成13年7月11日公表)



○断層帯の名称の見直し

- ✓ 京都盆地-奈良盆地断層帯南部(奈良盆地東縁断層帯) → 京都盆地-奈良盆地断層帯

○位置形状の見直し

花折断層帯の旧北中部の変位様式が右横ずれ主体であることに
対し、旧南部は東側隆起の逆断層

- ✓ 旧花折断層帯南部区間を追加
- ✓ 琵琶湖西岸断層帯から膳所(ぜぜ)断層を追加
琵琶湖西岸断層帯全体に対して膳所断層の走向や変位速度がやや異なることに加え、
周辺の地形から考えて桃山断層や黄檗断層群の副次的な断層と考えることが適切

全体の長さ:

約35 km → 約57 km (M7.4程度 → M7.8程度)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

- ✓ 北部区間(旧花折断層帯南部区間):
平均活動間隔: 約4,200-6,500年程度
→ 3,300-3,800年程度

最新活動時期:

約2千8百年前以後、6世紀(約1千4百年前)以前
→ 不明

A*ランク (ほぼ0%-0.6%) → **Aランク** (0.7%-1%)

- ✓ 南部区間(旧京都盆地-奈良盆地断層帯南部):
最新活動時期 約1万1千年前以後、約1千2百年前以前
→ 約4千5百年前以後、約1千2百年前以前(8世紀以前)
平均活動間隔: 約5,000年 → 3,000-6,000年程度

S*ランク (ほぼ0%-6%) で変わらず

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

木津川断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 「木津川断層帯の評価」(平成16年9月8日公表)

○位置形状の見直し

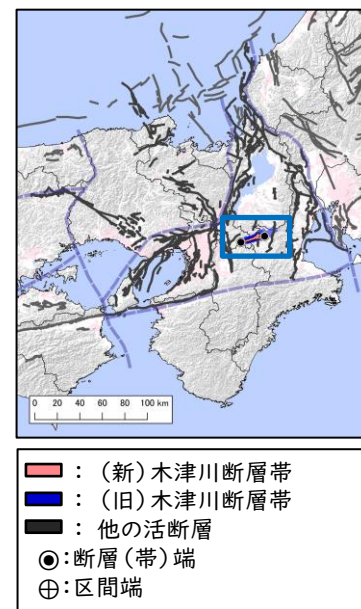
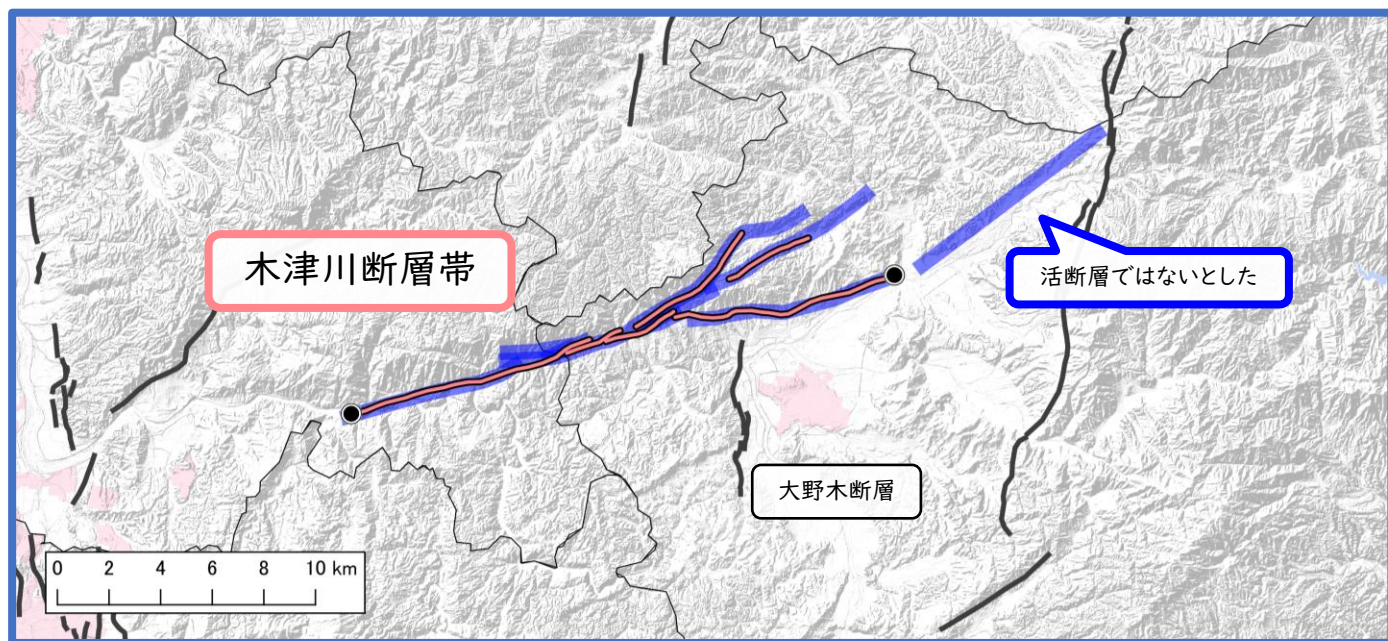
- ✓ 東端付近については活断層ではないとの評価を採用

全体の長さ: 約31 km → 約22 km (M7.3程度 → M7.1程度)

※活断層詳細デジタルマップ 新編(今泉ほか編, 2018)や都市圏活断層図「上野」(堤ほか, 2021)では東端付近は活断層ではないとされている

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

- ✓ 最新活動時期: 1854年(嘉永7年・安政元年)の伊賀上野地震
- ✓ 平均活動間隔: 約4,000–25,000年(間接法) → 約3,700–22,000年(間接法) **Zランク**(ほぼ0%)のまま
- ✓ 1回のずれの量: 2.5 m程度(上下成分) → 2m程度(2.2 m)(上下成分)



※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

おおのぎ

きのせ

大野木断層の長期評価・黄瀬断層の長期評価

新規評価

新規評価

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している



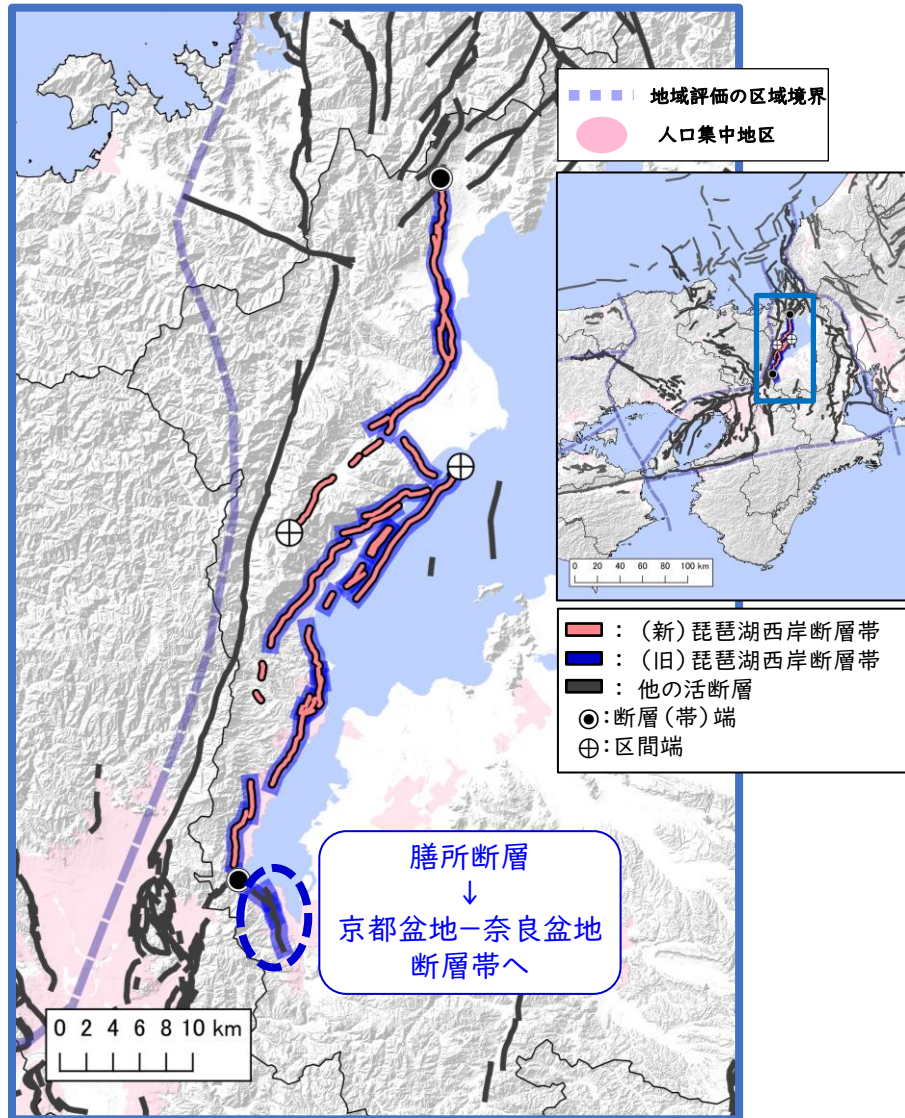
- 「活断層」として新たに評価(約6 km)
- 木津川断層帯とは直交し一連の構造とは考えにくいことから、個別に評価を行った
- Xランク



- 「活断層」として新たに評価(約12 km)
- Xランク

琵琶湖西岸断層帯の長期評価(第二版)

改訂前の評価「琵琶湖西岸断層帯の評価」(平成21年8月27日)



○位置形状の見直し

北部区間:

- ✓ 南に断層が延長
約23 km → 約29 km (M7.1程度 → M7.3程度)

南部区間:

- ✓ 膳所(ぜぜ)断層が京都盆地-奈良盆地断層帯へ
約38 km → 約35 km (M7.5程度 → M7.4程度)

琵琶湖西岸断層帯全体に対して膳所断層の走向や変位速度がやや異なることに加え、周辺の地形から考えて桃山断層や黄檗断層群の副次的な断層と考えることが適切

全体の長さ: 約59 km → 約55 km (M7.8程度 → M7.7程度)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

北部区間:

- ✓ 平均活動間隔: 約1,000-2,800年(間接法)
→ 約1,500-2,900年(間接法)
- ✓ 最新活動時期: 約2千8百年前以後、約2千4百年前以前
→ 約2千7百年前以後、約2千4百年前以前
Sランク(1%-3%、ポアソン) → **S*ランク**(3%-14%、BPT)

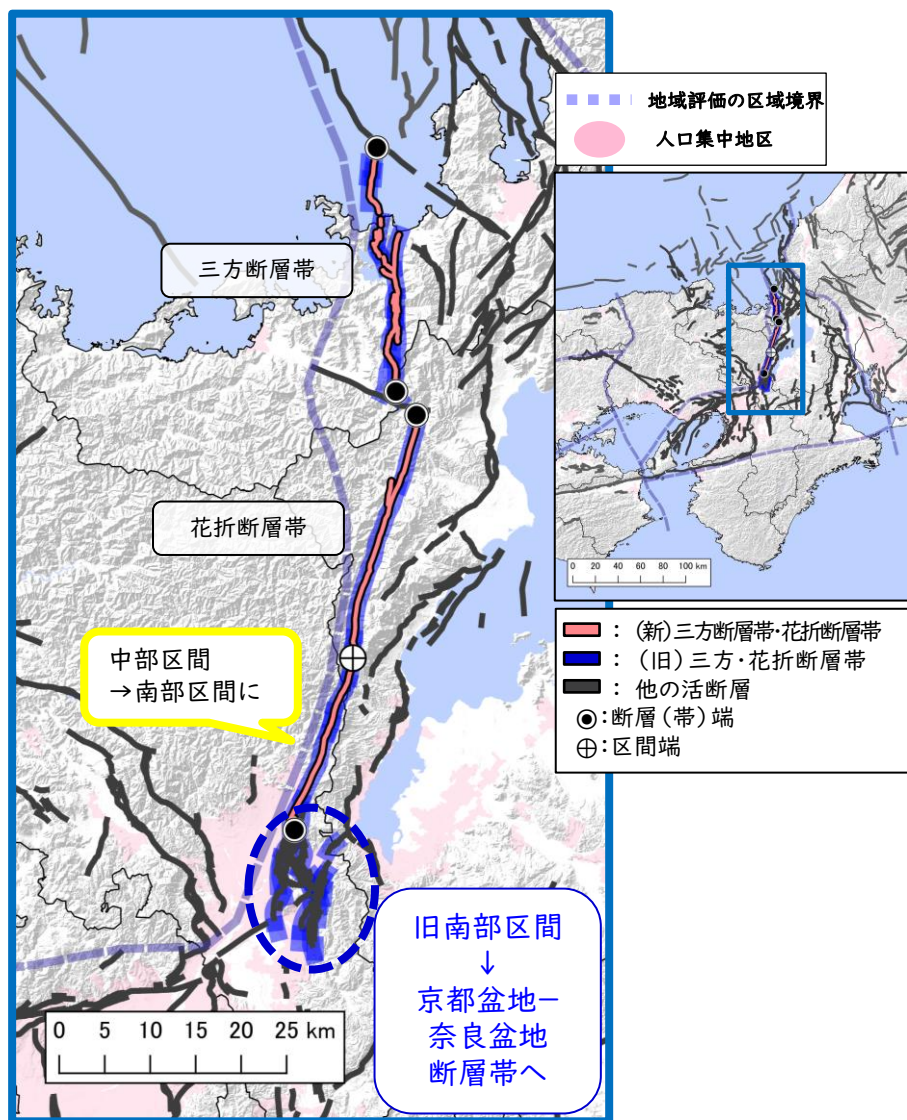
南部区間:

- ✓ 平均活動間隔: 4,500-6,000年程度(直接法)
→ 4,500-5,700年程度(直接法)
- ✓ 最新活動時期: 1185年(元暦2年)の地震で変わらず
Zランク(ほぼ0%)で変わらず

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

みかた はなおれ 三方断層帯・花折断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 「三方・花折断層帯の評価」(平成15年3月12日公表)



○断層帯の名称の見直し

- ✓ 三方・花折断層帯 → 三方断層帯・花折断層帯に名称変更

○位置形状の見直し

花折断層帯:

- ✓ 北部・中部・南部の3区間 → 北部・南部の2区間
 - ✓ 旧南部区間を京都盆地-奈良盆地断層帯の一部に
- 全体の長さ: 約58 km → 約48 km (M7.8程度 → M7.6程度)

※旧花折断層帯の北中部の変位様式が右横ずれ主体であることに対し、南部は東側隆起の逆断層であることに加え、断層の連続性からも京都盆地-奈良盆地断層帯の一部を構成する断層として評価することが適切とした。

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

三方断層帯:(最新活動時期:1662年)

- ✓ 平均活動間隔: 3,800-6,300年程度
→ 2,000-5,000年程度
- ✓ 地震後経過率: 0.05-0.08 → 0.07-0.2
Zランク (ほぼ0%) のまま

花折断層帯:

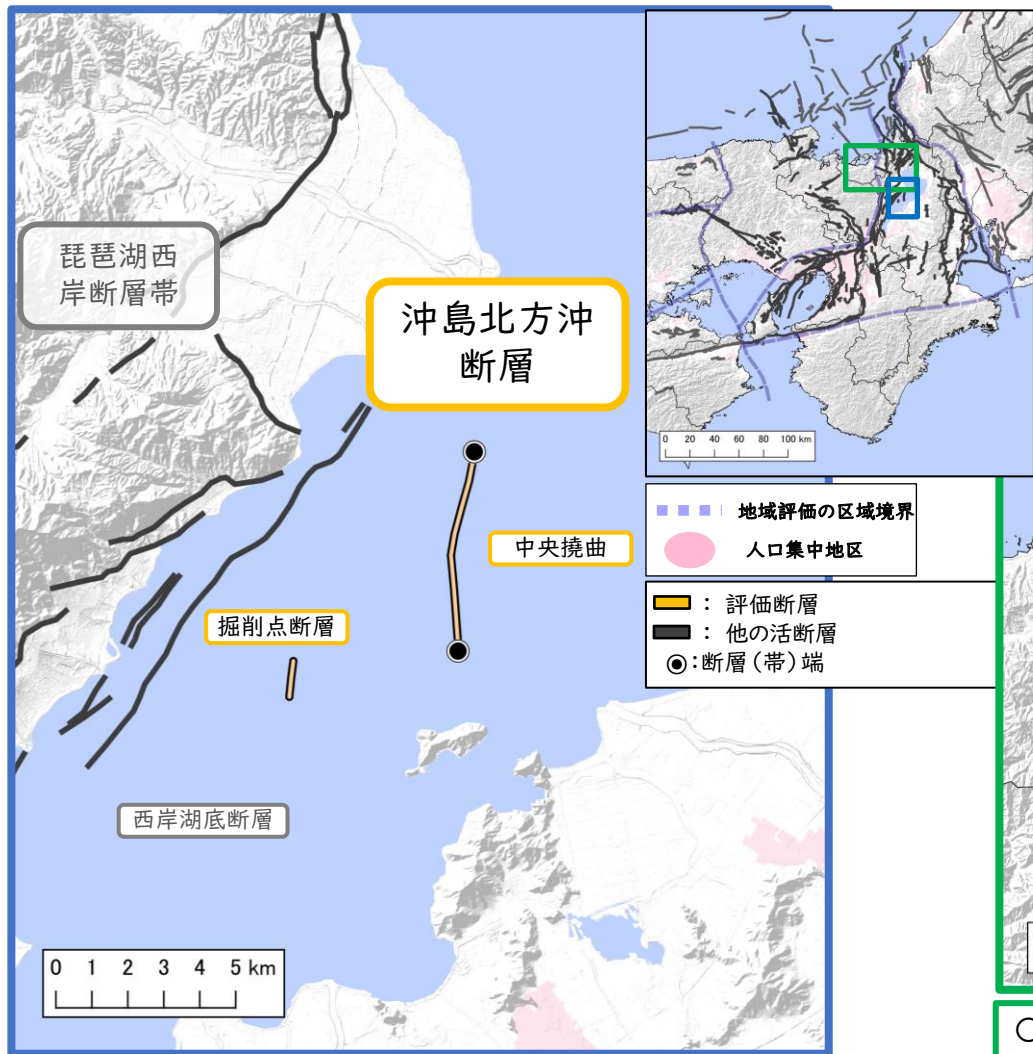
- ✓ 北部区間に大きな変更なし Xランクのまま
- ✓ 南部区間(旧中南部区間)
最新活動時期: 約2千8百年前以後、6世紀(1千4百年前)以前
→ 約2千7百年前以後、1世紀以前
Aランク (ほぼ0%-0.6%) → Aランク (ほぼ0%-0.3%)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

沖島北方沖断層の長期評価・熊川断層の長期評価

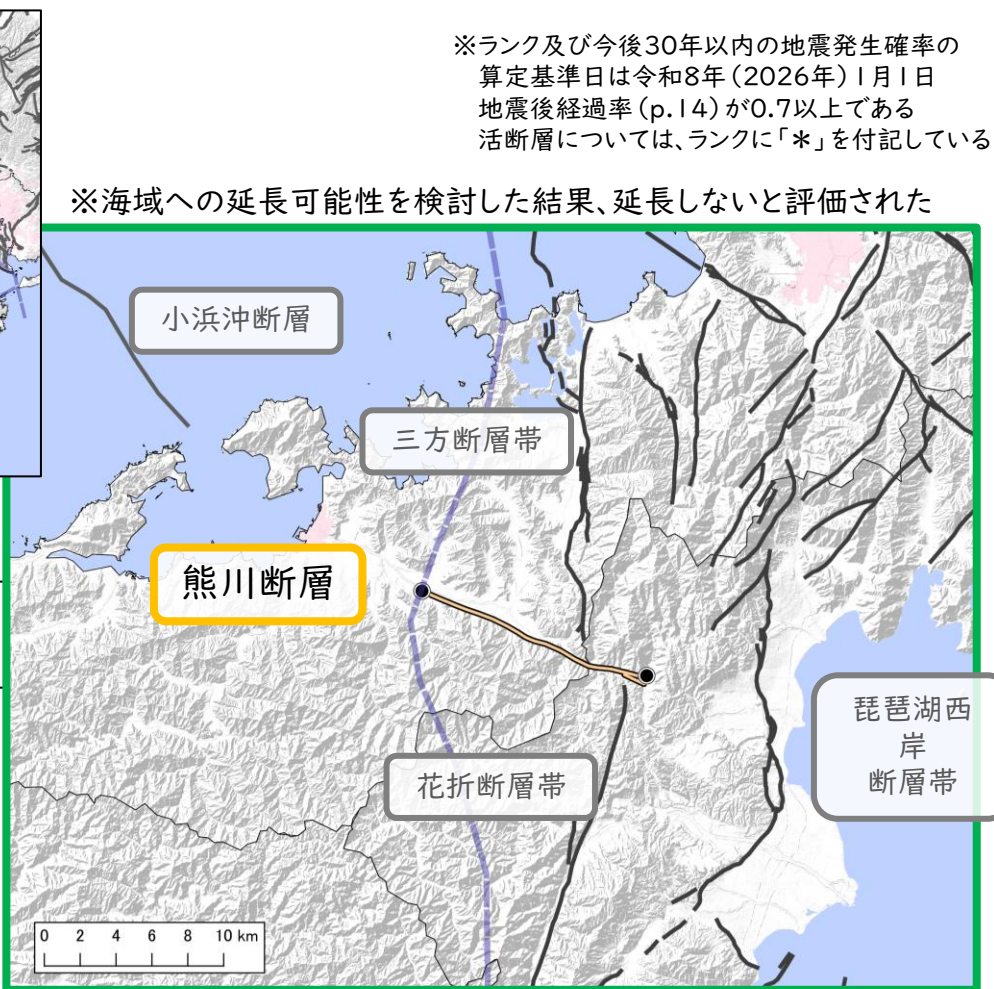
新規評価

新規評価



○「**活断層**」として新たに評価(約6 km)

○ Xランク



※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

※海域への延長可能性を検討した結果、延長しないと評価された

○「**活断層**」として新たに評価(約13 km)

○三方、花折両断層帯とはほぼ直交しており、これらとは別の起震断層と考えられることから、両断層帯とは別に評価。

○ Xランク

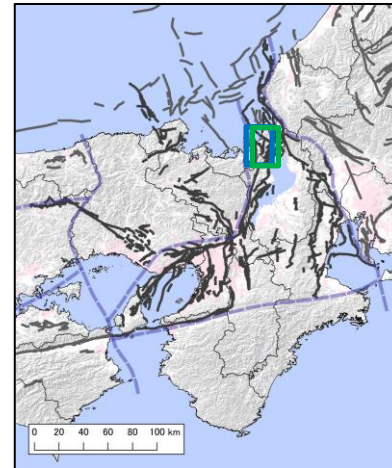
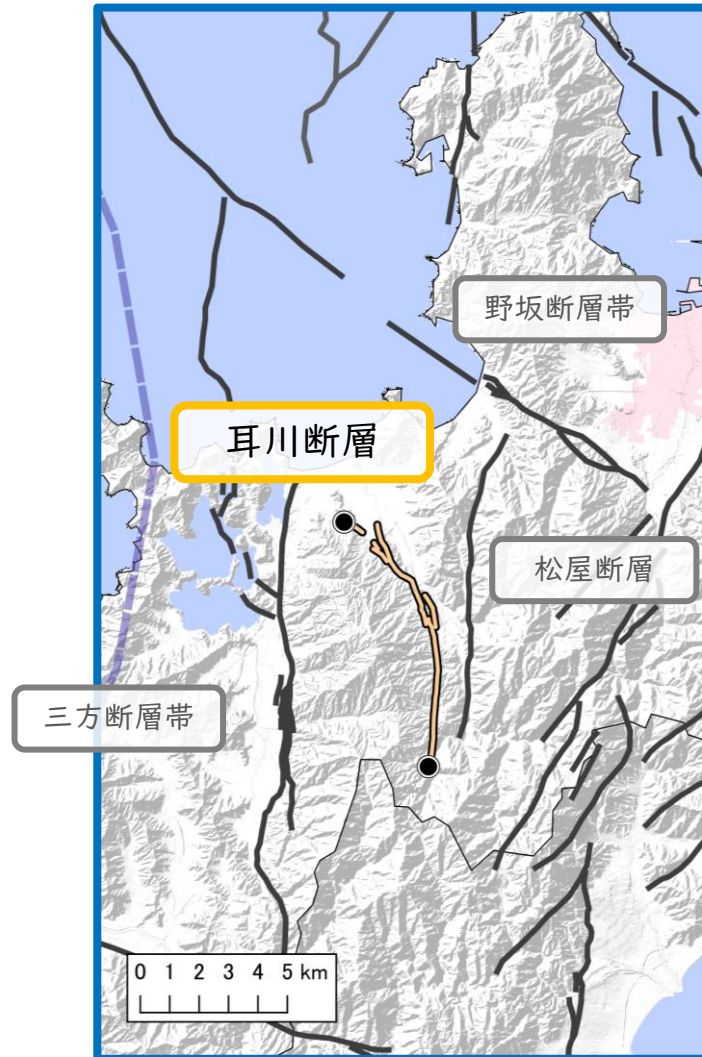
みみかわ

まつや

耳川断層の長期評価・松屋断層の長期評価

新規評価

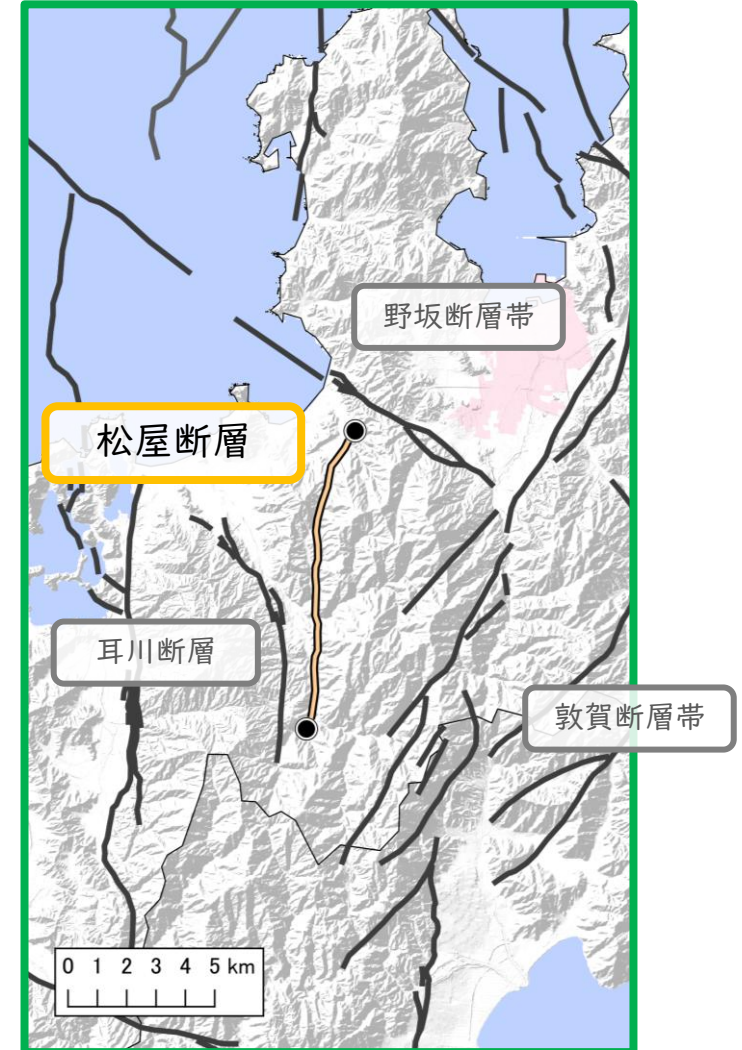
新規評価



■ 地域評価の区域境界
● 人口集中地区

■ : 評価断層
■ : 他の活断層
● : 断層(帯)端

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

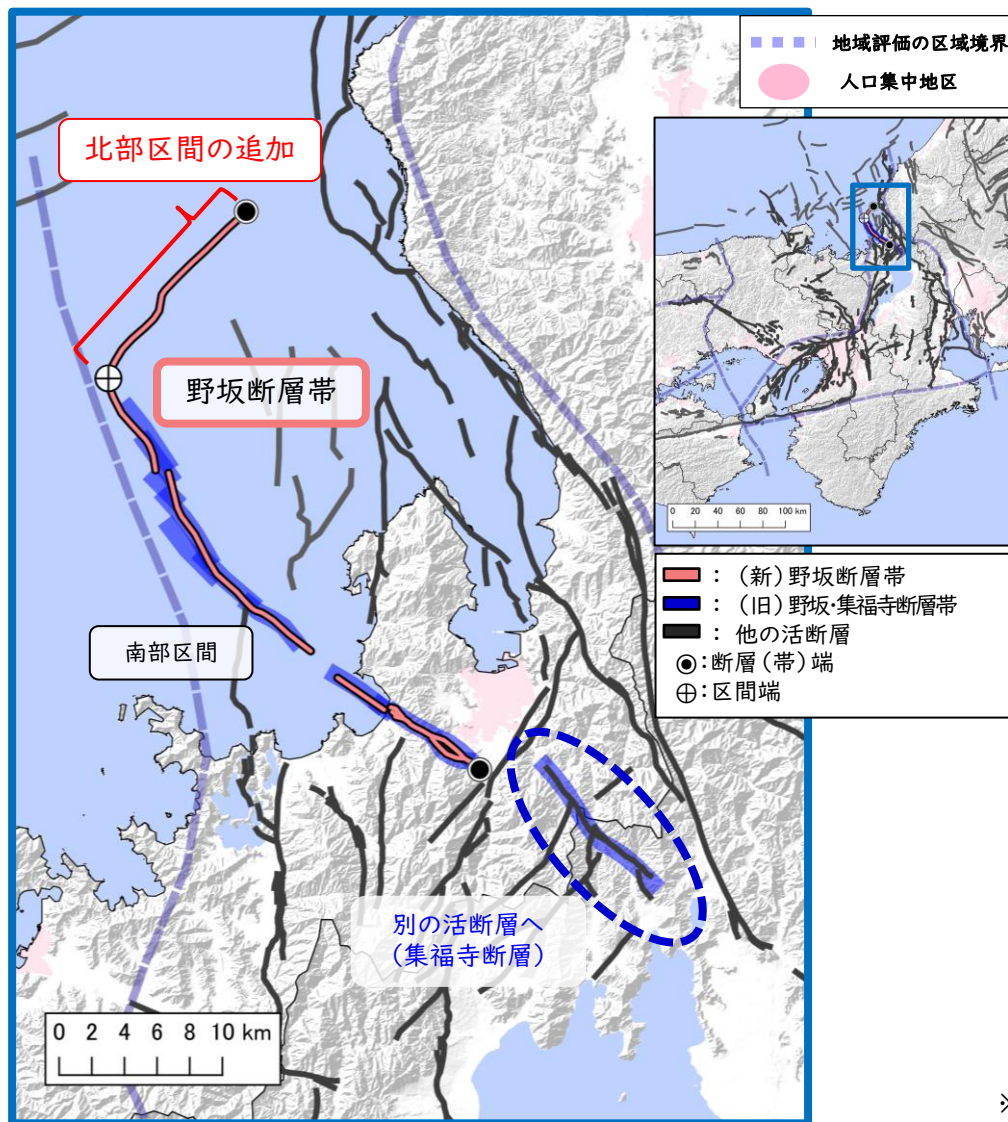


- 「**活断層**」として新たに評価(約9 km)
- **Aランク** (0.3%-0.6%)

- 「**活断層**」として新たに評価(約10 km)
- **Xランク**

のさか 野坂断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価「野坂・集福寺断層帯」(平成15年6月11日公表)



○断層帯の名称の見直し

野坂・集福寺断層帯→野坂断層帯に名称変更

○位置形状の見直し

集福寺断層は個別の活断層として別に評価

野坂断層帯:

- ✓ 構成断層の分布形態や活動様式の違いから南部・北部に分割
- ✓ 北部区間は新規知見(日本原子力発電(2010)等)により追加

全体の長さ: 約31 km → 約46 km (M7.3程度 → M7.6程度)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

南部区間(旧野坂断層帯):

- ✓ 平均活動間隔: 約5,600–7,600年
もしくはこれらよりも短い間隔
→ 1,500–3,600年程度
(杉山ほか(2014)等、海域の知見も考慮)

- ✓ 最新活動時期: 15–17世紀のまま

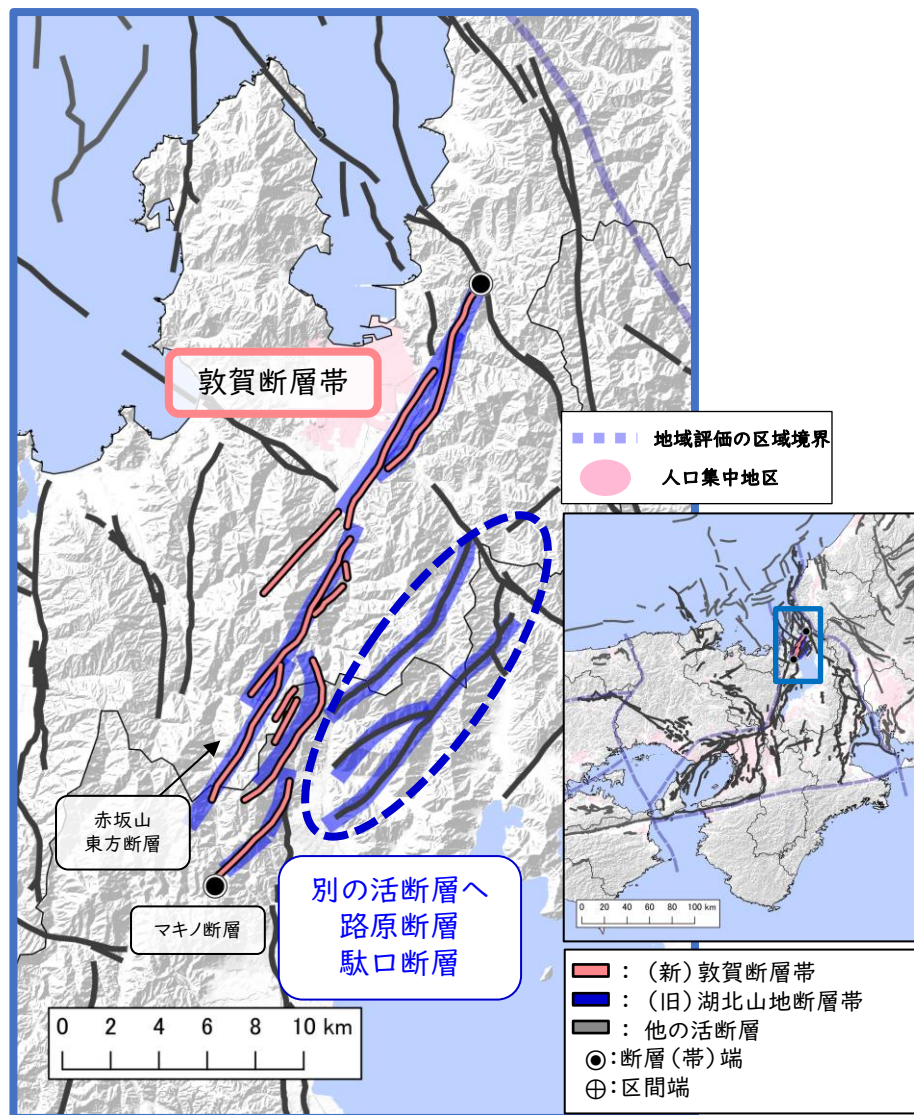
Zランクのまま(ほぼ0%もしくはそれ以上 → ほぼ0%–0.02%)

北部区間: Xランク

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

つるが 敦賀断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価「湖北山地断層帯の評価」(平成15年6月11日公表)



○断層帯の名称の見直し

- ✓ 湖北山地断層帯北西部※ → 敦賀断層帯に名称変更
 - ✓ 湖北山地断層帯南東部 → 路原断層・駄口断層として個別に評価
- ※旧南東部の赤坂山東方断層・マキノ断層は敦賀断層帯に追加

○位置形状の見直し

- ✓ 旧湖北山地断層帯南東部区間から、赤坂山東方断層・マキノ断層を追加
- 全体の長さ: 約25 km → 約27 km (M7.2程度のまま)

※活動様式や周辺の断層との地下構造の関係、周辺の重力異常などの検討に基づき、湖北山地断層帯を敦賀断層帯、駄口断層、路原断層に三分して評価し、赤坂山東方断層及びマキノ断層を敦賀断層帯に含めることとした。

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

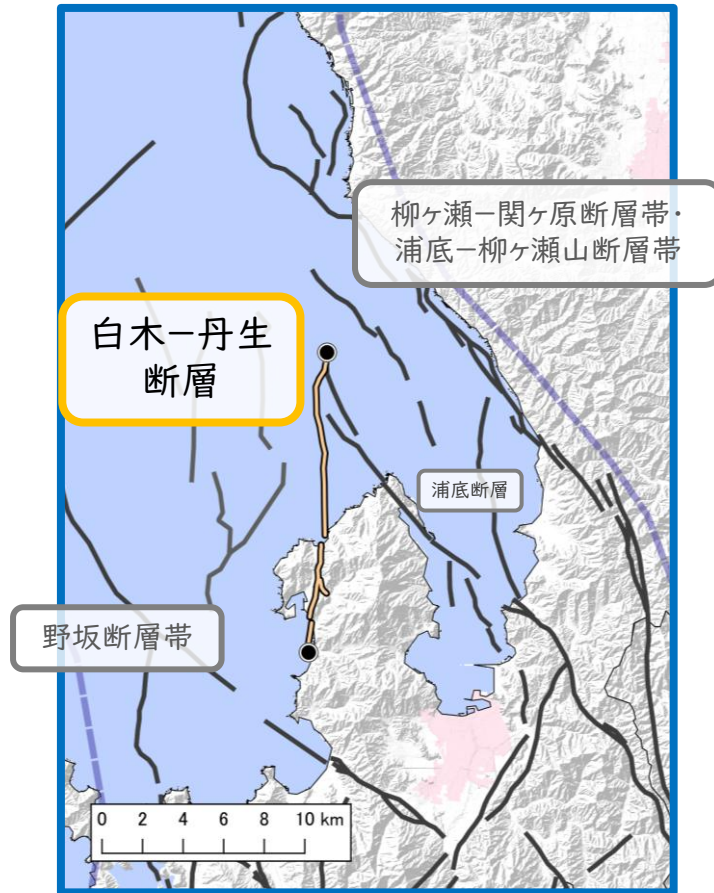
- ✓ 確率に関わる部分に変更なし
- 最新活動時期: 11-14世紀
平均活動間隔: 3,000-4,000年程度
Zランク (ほぼ0%)
- ✓ 1回のずれの量: 約2 m (右横ずれ成分)
→ 約3 m (右横ずれ成分)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

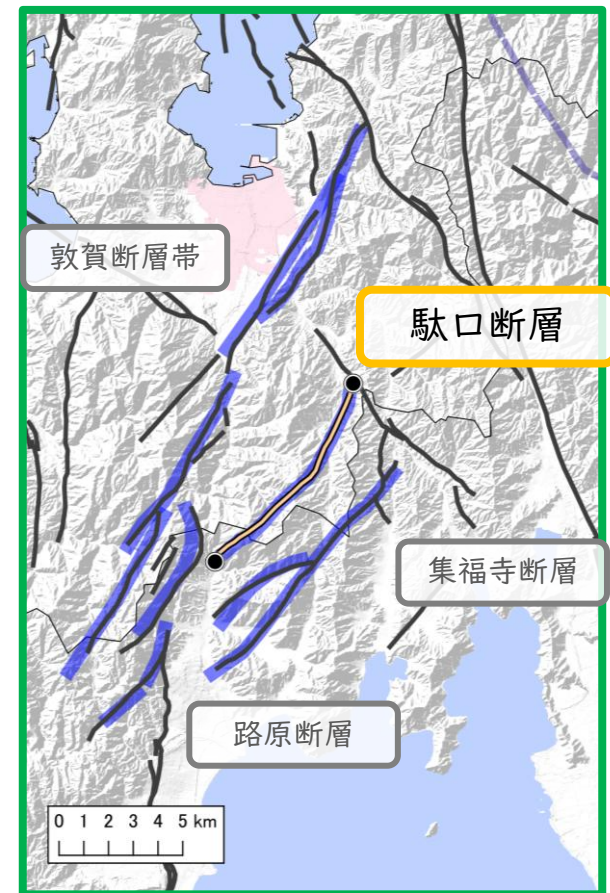
しらき にゅう だぐち 白木-丹生断層の長期評価・駄口断層の長期評価

新規評価

改訂前の評価「湖北山地断層帯の評価」(平成15年6月11日公表)



※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している



- 「**活断層**」として新たに評価(約15 km)
- 浦底-内池見断層と白木-丹生断層については、走向が大きく異なること、両断層が接近している区間に海上音波探査で両断層がつながる構造が認められないことから同時活動を考慮しない(原子力安全・保安院, 2010)。
- **A*ランク** (0.07%~2%)

- 「**活断層**」として新たに評価(約9 km)
- 敦賀断層帯とは、過去の活動履歴に違いがあることに加え、周辺の地下構造や重力異常などを検討した結果、それぞれ別個の起震断層となりうることから、湖北山地断層帯を本断層と敦賀断層帯、路原断層に三分し、それぞれ評価することとした。
- **Zランク** (ほぼ0%)

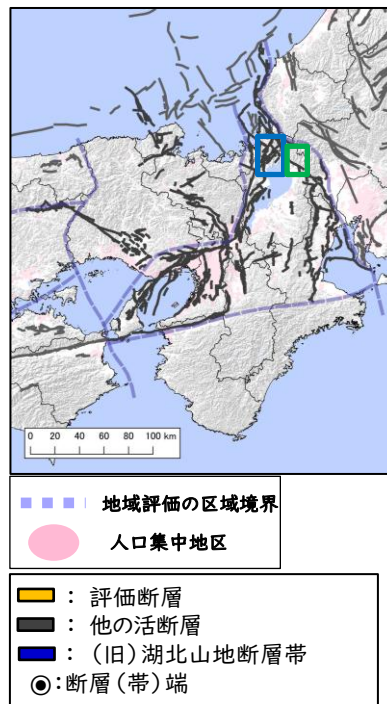
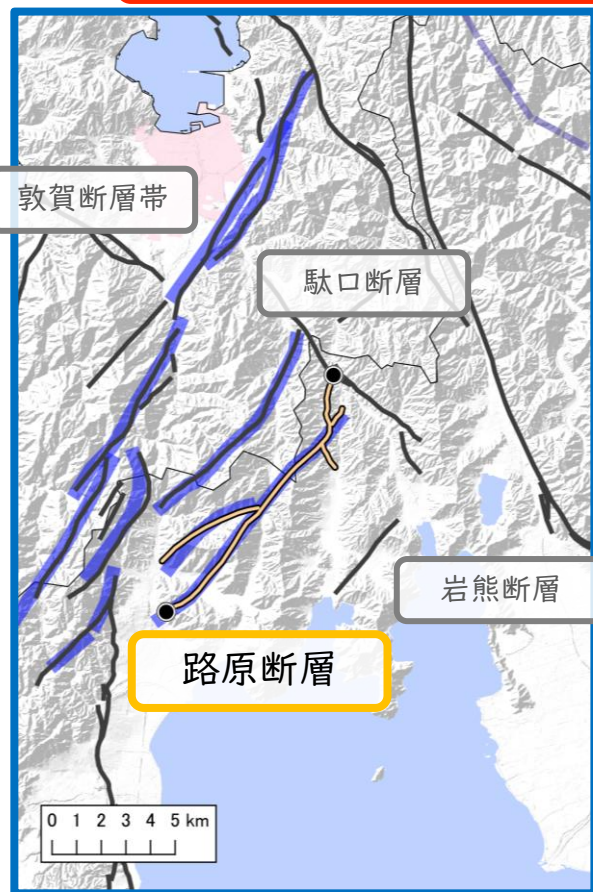
ちはら

やのくま

路原断層の長期評価・岩熊断層の長期評価

改訂前の評価「湖北山地断層帯の評価」
(平成15年6月11日公表)

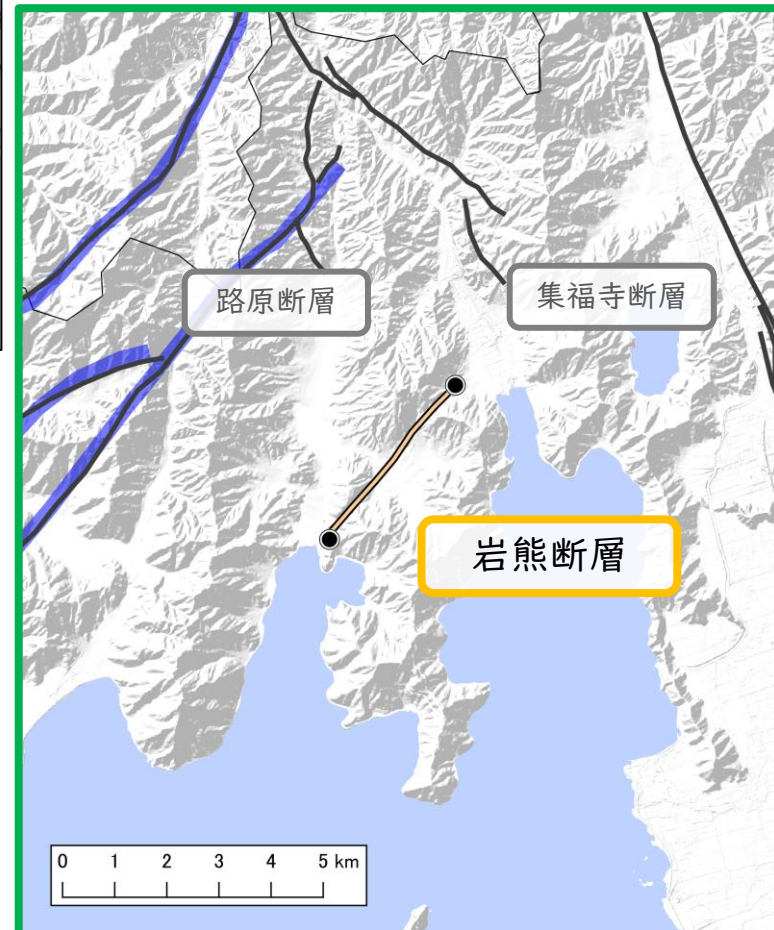
新規評価



- 「活断層」として新たに評価(約12 km)
- 敦賀断層帯とは、周辺の地下構造や重力異常などを検討した結果、それぞれ別個の起震断層となりうることから、湖北山地断層帯を本断層と敦賀断層帯、駄口断層に三分し、それぞれ評価することとした。

○ Xランク

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している



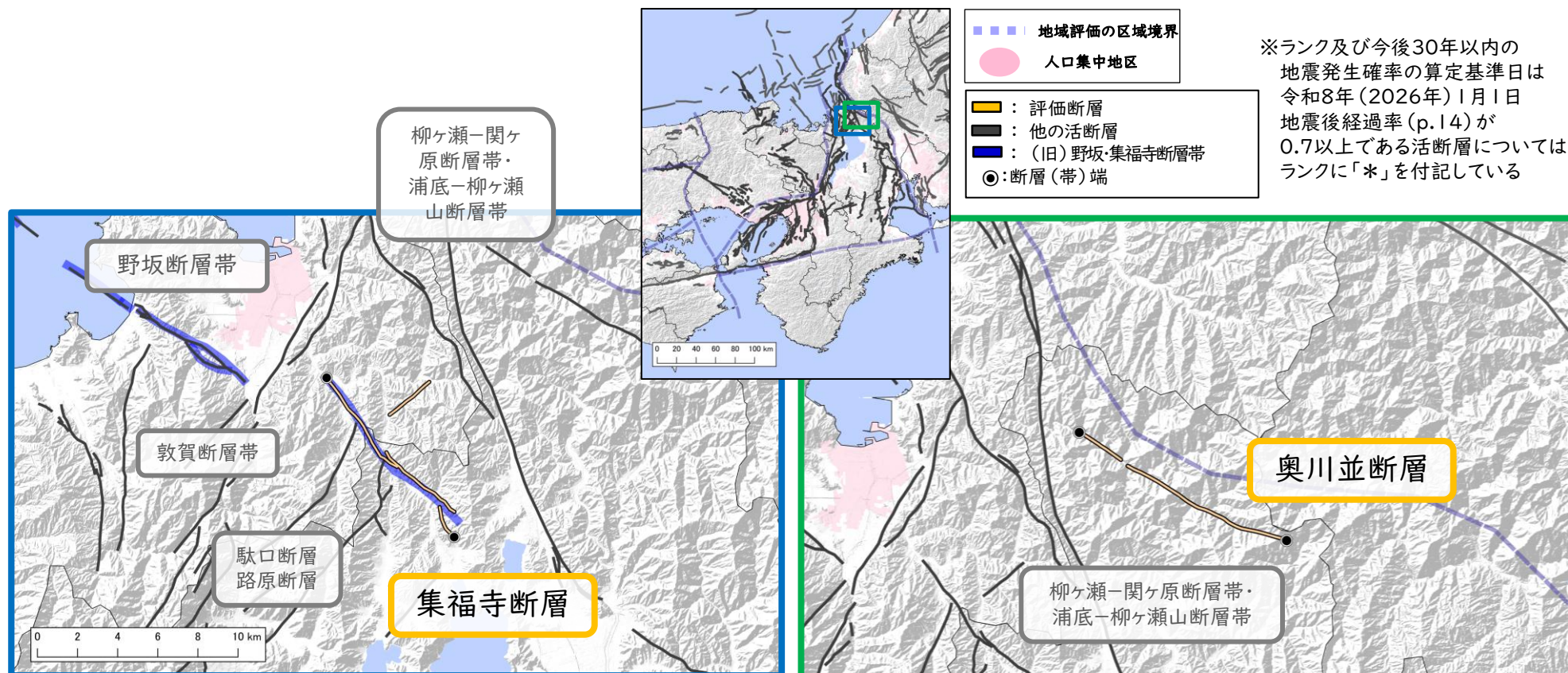
- 「活断層」として新たに評価(約4 km)

○ Xランク

しゅうふくじ おくこうなみ 集福寺断層の長期評価・奥川並断層の長期評価

改訂前の評価 「野坂・集福寺断層帯」(平成15年6月11日公表)

新規評価



※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

○「**活断層**」として新たに評価(約10 km)

○野坂断層帯の南端と、その南東に分布する集福寺断層の北端は約4 km離れており、この間には北東-南西方向に敦賀断層帯が延びている。野坂断層帯と集福寺断層の間に走向の異なる断層が横切っているため、両者をそれぞれ独立の起震断層として評価。

○ Xランク

○「**活断層**」として新たに評価(約12 km)

○隣接する柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯とは、活動時期が合わない、走向が異なるため、別断層として評価。

○ Xランク

やながせ せきがはら うらぞこ やながせやま 柳ヶ瀬－関ヶ原断層帯・浦底－柳ヶ瀬山断層帯の長期評価（一部改訂）

改訂前の評価「柳ヶ瀬－関ヶ原断層帯の評価」（平成16年1月14日公表）

○断層帯の名称の見直し

- ✓ 柳ヶ瀬－関ヶ原断層帯・浦底－柳ヶ瀬山断層帯として評価

○位置形状の見直し

柳ヶ瀬－関ヶ原断層帯：

- ✓ 旧評価では、最新活動の時期の不一致から、中部・南部区間を分割していた。吉岡ほか（2011）や関西電力株式会社（2015）の知見から、最新活動時期が対比可能に

（旧）中部区間＋（旧）南部区間→（新）南部区間

- ✓ 杉山ほか（2013）等の知見から、北部区間を追加

全体の長さ：約100 km → 約127 km（M8.2程度以上 → 最大M8.3程度）

浦底－柳ヶ瀬山断層帯：

- ✓ 甲楽城（かぶらぎ）冲断層やウツロギ峠北方断層等のトレースを追加（杉山ほか（2012）等）

全体の長さ：約25 km → 約35 km（M7.2程度 → M7.4程度）

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

柳ヶ瀬－関ヶ原断層帯：

（北部）Aランク：0.4%－0.6%（新たに追加した区間）

（旧北部 → 中部）Zランク（ほぼ0%）のまま

（旧中部・旧南部 → 南部）

平均活動間隔：（旧中部・旧南部）不明 → （南部）6,100－6,700年程度

最新活動時期：（旧中部）約7千2百年前後、約7千年前以前

（旧南部）4千9百年前後、15世紀以前

→（南部）11世紀以後、15世紀以前

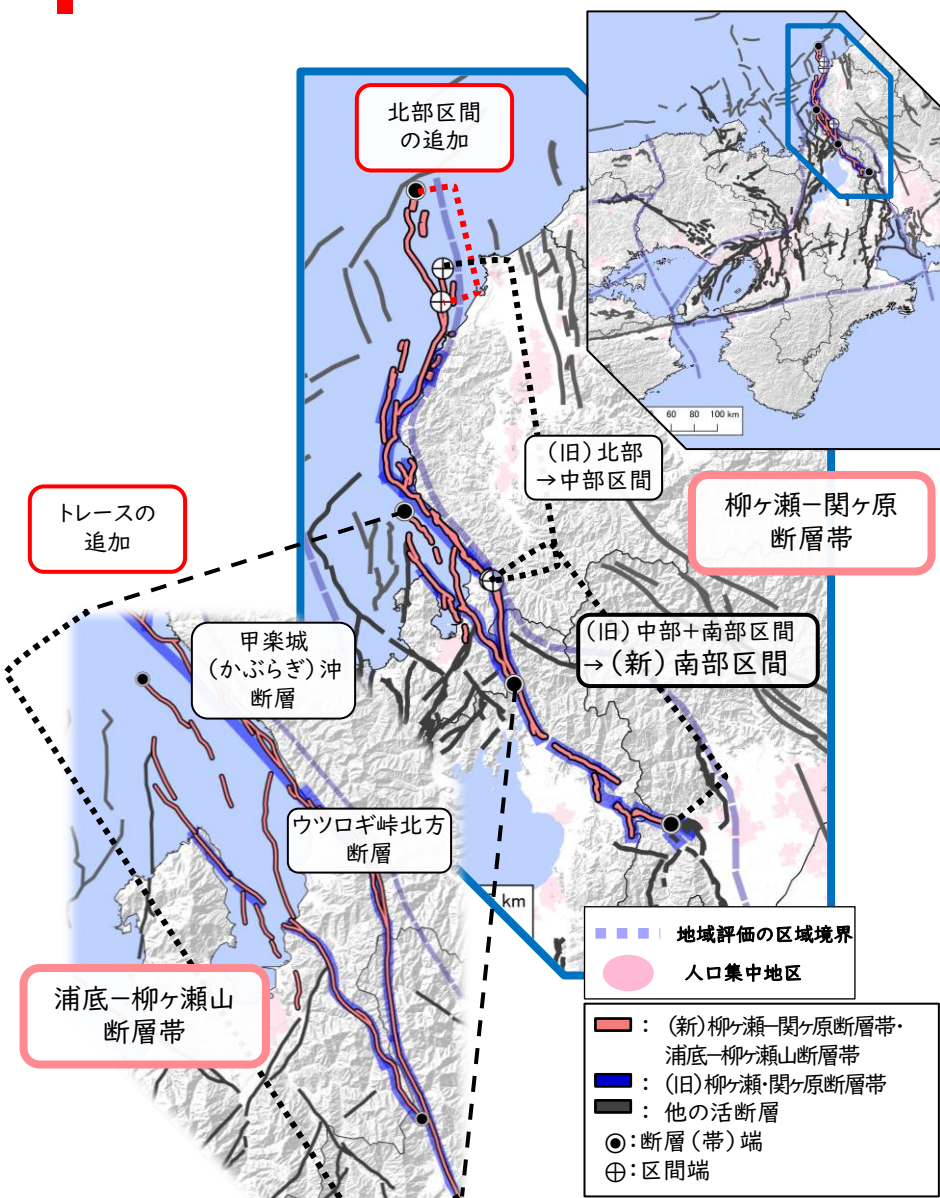
（南部）Xランク → Zランク（ほぼ0%）

- ✓ 浦底－柳ヶ瀬山断層帯：Xランク → S*ランク（ほぼ0%－18%）

平均活動間隔：不明 → 1,300－5,900年程度

「約7千2百年前後に2回の活動」と「約4千6百年前後、7世紀以前に1回」から

最新活動時期：不明→約4千6百年前後、7世紀以前



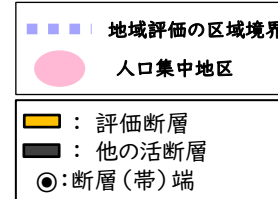
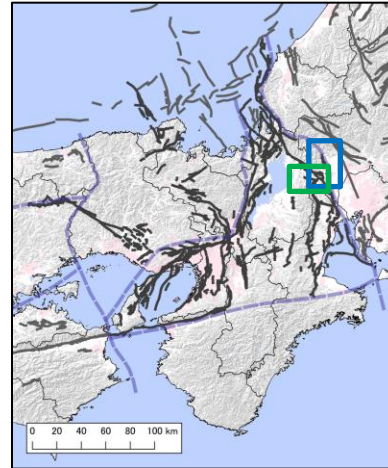
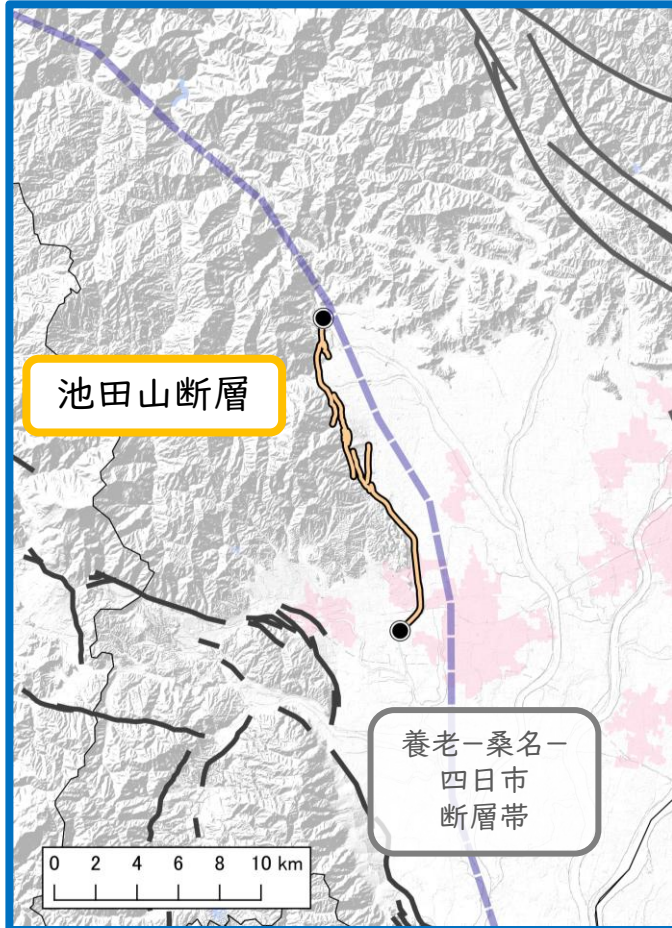
いけだやま

池田山断層の長期評価・今須断層の長期評価

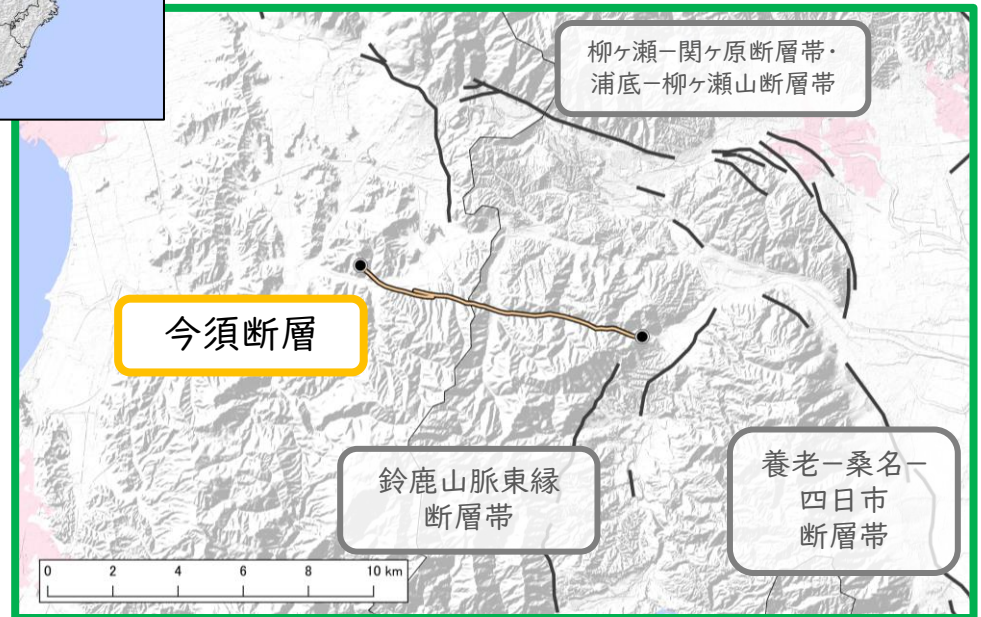
います

新規評価

新規評価



※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

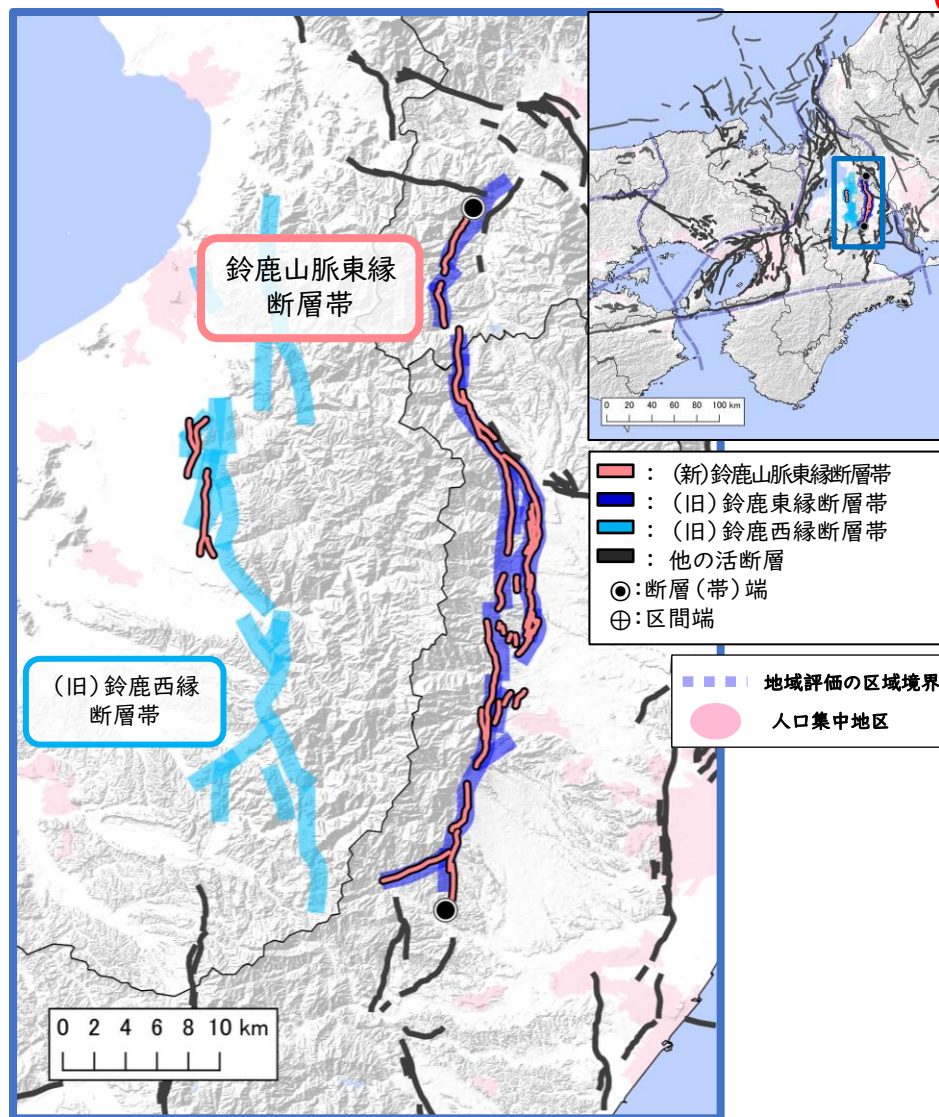


- 「**活断層**」として新たに評価(約16 km)
養老-桑名-四日市断層帯とは別断層として評価
・最新活動時期の違い
・重力異常図にて両者を分ける構造が見られる
- **S*ランク** (0.3%—12%以上)

- 「**活断層**」として新たに評価(約9 km)
- 隣接する柳ヶ瀬-関ヶ原断層帯、鈴鹿山脈東縁断層帯とは、走向・活動様式が違うため、別断層として評価
- **Xランク**

鈴鹿山脈東縁断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 「鈴鹿東縁断層帯の評価」(平成17年3月9日公表)
「鈴鹿西縁断層帯の評価」(平成16年9月8日公表)



○断層帯の名称の見直し ※旧鈴鹿西縁断層帯から常安寺(じょうあんじ)断層を副次的な断層として追加
✓ 鈴鹿東縁断層帯+鈴鹿西縁断層帯
→ (新)鈴鹿山脈東縁断層帯

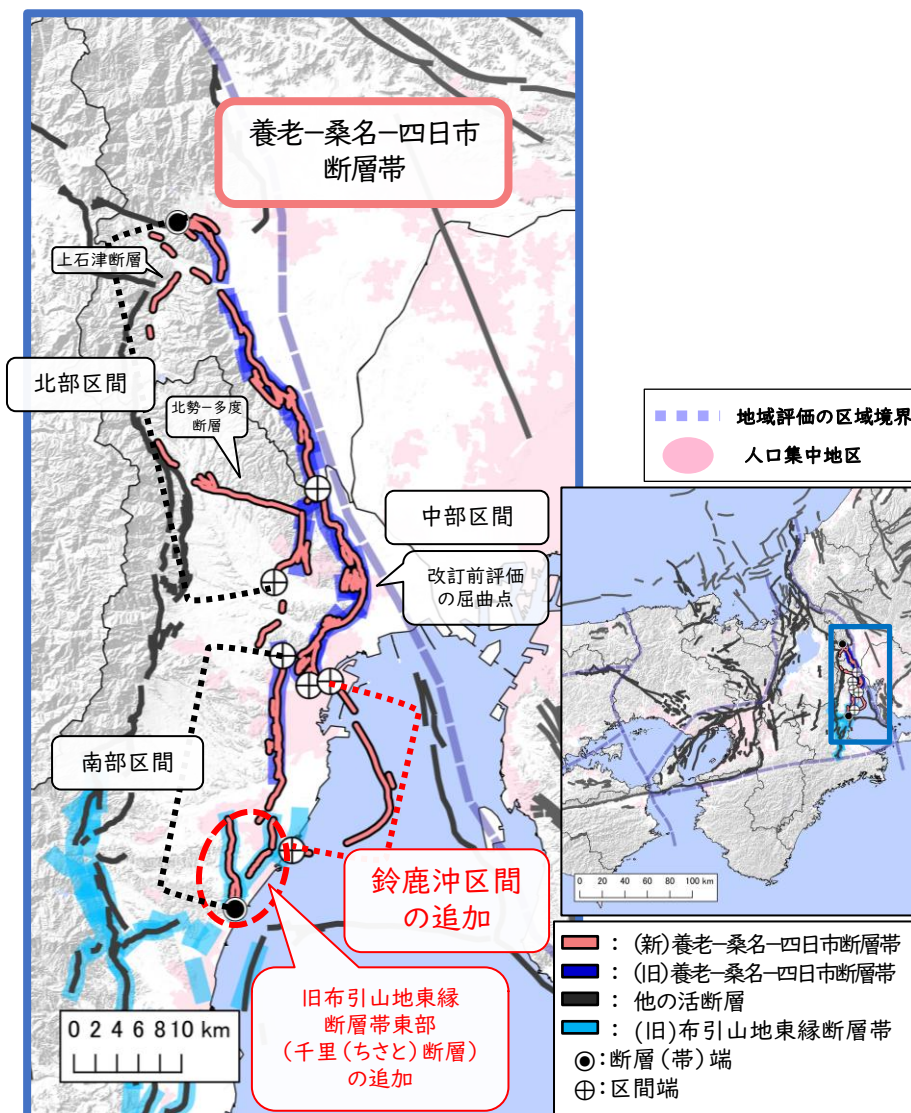
○位置形状の見直し
✓ 旧鈴鹿西縁断層帯の他の構成断層は、既往文献においてほとんどが推定活断層であり断層変位を示す地形はほとんど認められない、さらに一部は近年の活断層図には示されていないため、削除
✓ 全体の長さ:34-47 km → 約45 km
(M7.4-7.6程度 → M7.6程度)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し
✓ 平均活動間隔:6,500-12,000年程度で変わらず
✓ 最新活動時期:約3千5百-2千8百年前
→ 約3千5百-2千9百年前
Zランク(ほぼ0%-0.07%)で変わらず
(参考)旧鈴鹿西縁断層帯の改訂前の評価
平均活動間隔:18,000-36,000年程度
最新活動時期:不明
Aランク(0.08%-0.2%)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

ようろう くわな よっかいち 養老—桑名—四日市断層帯の長期評価（一部改訂）

改訂前の評価 「養老—桑名—四日市断層帯の評価」（平成13年11月14日公表）



○位置形状の見直し

- ✓ 旧布引山地東縁断層帯東部から、千里（ちさと）断層を追加
- ✓ 鈴鹿沖区間の追加
→ 全体の長さ：約60 km → 約64 km（M8程度 → M7.8程度）
※改訂前の評価では、マグニチュードは1回のずれの量（約6m）から計算
改訂前の評価での全体の長さは、屈曲点に沿った長さ
- ✓ 区間の追加（北部、中部、南部、鈴鹿沖）
北部、中部、南部については、活動度の違いなどにより分割された。
- ✓ 上石津断層、北勢—多度断層は鈴鹿山脈東縁断層帯と近接しているものの、変位の向きや隆起方向の違い（上石津断層）、走向の違い（北勢—多度断層）により、養老—桑名—四日市断層帯として評価

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

- ✓ 確率は各区間ごとに算出

改訂前

最新活動時期：13世紀以後—16世紀以前

平均活動間隔：1,400—1,900年程度

Aランク（ほぼ0%—0.8%）

改訂後

最新活動時期
（北部）15世紀以後、16世紀以前

平均活動間隔
900—1,500年

S*ランク（ほぼ0%—4%）

（中部）13世紀以後、16世紀以前

800—1000年

S*ランク（0.04%—14%）

（南部）約2千4百年前以後、少なくとも1回

1,400—1,800年程度

Aランク（2%）

（鈴鹿沖）不明

5,300—8,000年程度

Aランク（0.4%—0.6%）

- ✓ 1回のずれの量：約5—7 m（上下成分）

→ 約7 m（上下成分、北部と中部が同時に活動した場合）

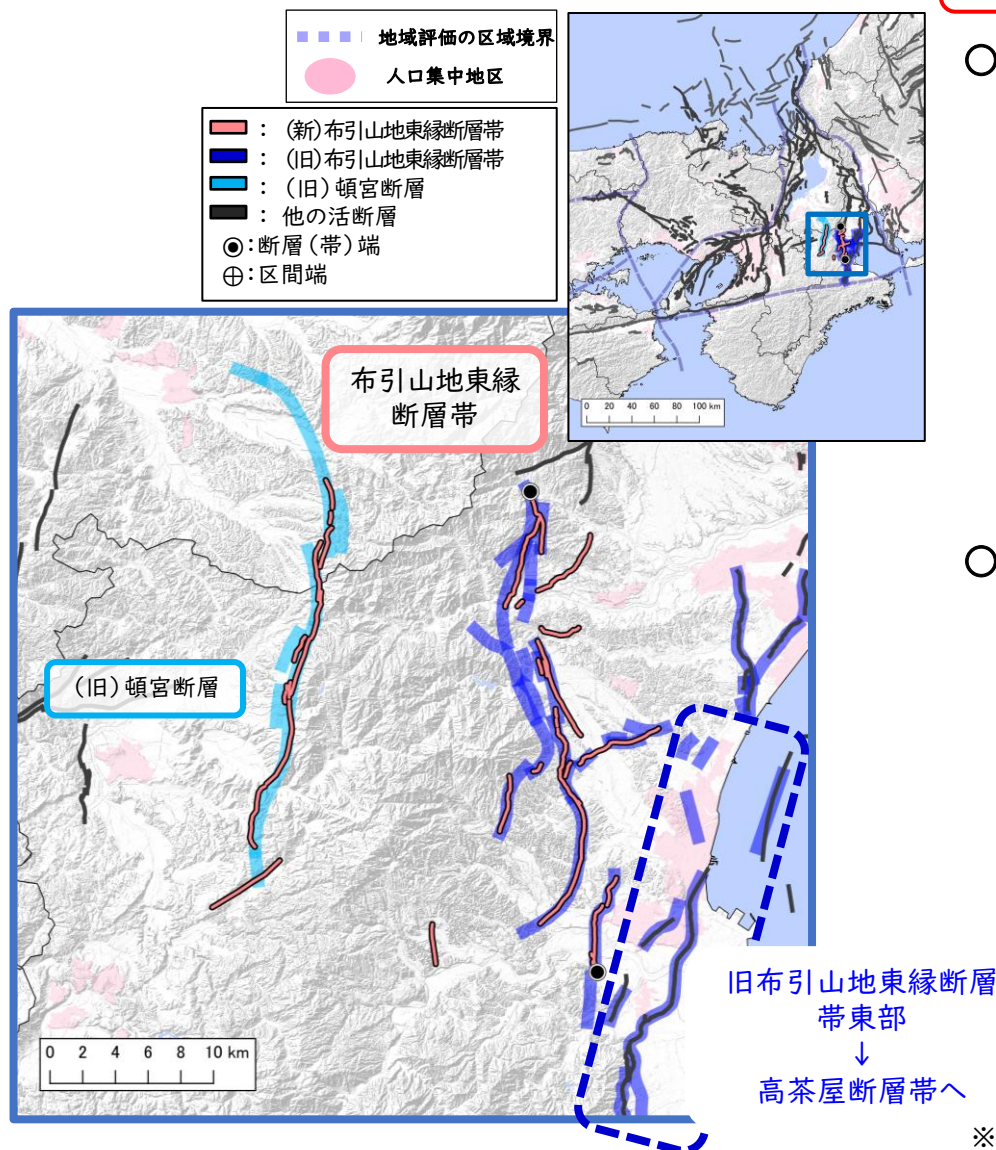
約2 m（上下成分、中部、南部、鈴鹿沖）

約4 m（上下成分、北部）

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年（2026年）1月1日
地震後経過率（ p_{14} ）が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

布引山地東縁断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価 「布引山地東縁断層帯の評価」(平成16年4月14日公表)
「頓宮断層の評価」(平成16年9月8日公表)



○位置形状の見直し

- ✓ 旧布引山地東縁断層帯西部 + 頓宮断層
→ (新)布引山地東縁断層帯
- ✓ 2004年に頓宮断層として評価した断層については、文部科学省研究開発局ほか(2005)*等の資料によって、布引山地東縁断層帯の副次的な断層であることが示された。
※布引山地を横断する大深度反射法弾性波探査
(地下30 kmまでの地下構造に関する資料を取得)
- ✓ 全体の長さ:約33 km → 約30 km (M7.4程度
→ M7.3程度)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

- ✓ 平均活動間隔:17,000年程度(間接法)
→ 12,000-25,000年程度(直接法)
- ✓ 最新活動時期:約2万8千年前以後、約4百年前以前
→ 約3万年前以後、16世紀以前
- A*ランク(ほぼ0%-1%) → A*ランク(ほぼ0%-2%)

(参考)旧頓宮断層の改訂前の評価

平均活動間隔:約1万年以上

最新活動時期:約1万年前以後、7世紀以前

A*ランク(1%以下)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している

たかぢやや 高茶屋断層帯の長期評価

改訂前の評価「布引山地東縁断層帯の評価」(平成16年4月14日公表)

○断層帯の名称の見直し

- ✓ 布引山地東縁断層帯 → 高茶屋断層帯が独立

○位置形状の見直し

- ✓ 旧布引山地東縁断層帯東部 → 高茶屋断層帯
- ✓ 旧布引山地東縁断層帯東部の北部(千里(ちさと)断層)が養老-桑名-四日市断層帯に
全体の長さ: 約48 km → 約36 km

(M7.6程度 → M7.4程度)

※千里(ちさと)断層の南には陸域に安濃(あのみ)撓曲、海域に伊勢湾断層帯の白子(しろこ)-野間断層と東西方向の構造が連続している。これらの東西方向の構造が、養老-桑名-四日市断層帯と布引山地東縁断層帯を隔てると判断し、千里断層を養老-桑名-四日市断層帯南部区間の構成断層とした。

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

- ✓ 最新活動時期: 約1万1千年前頃 → 約6千6百年前以後、約4千9百年前以前

※津冲断層の調査結果(岡村ほか(2013)、文部科学省・産業技術総合研究所(2013))
より

- ✓ 平均活動間隔: 25,000年程度 → 3,400-8,100年程度
(間接法) (直接法)
- ✓ 地震後経過率: 0.4 → 0.6-1.9

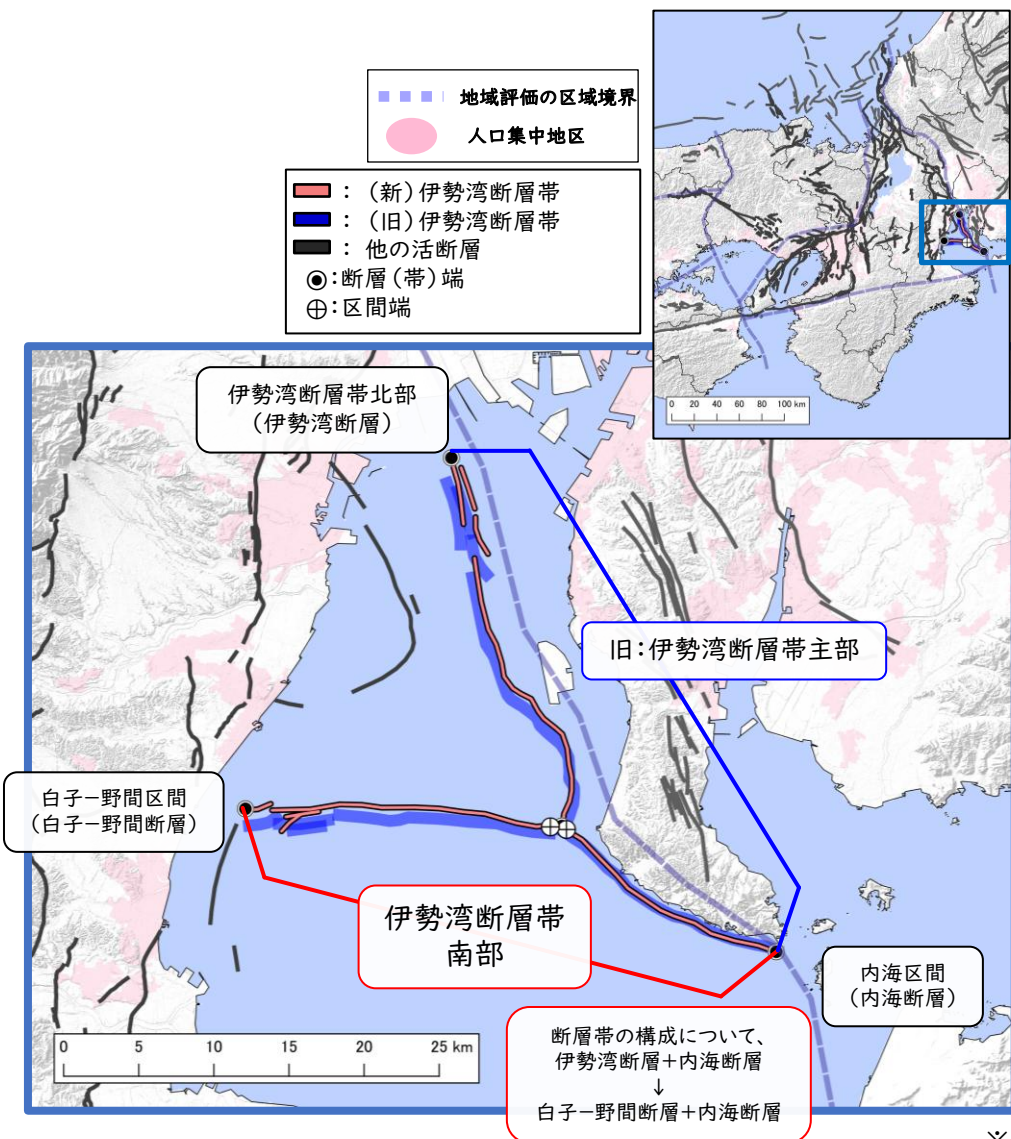
Zランク(0.001%) → S*ランク(0.1%-6%)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日
地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している



いせわん 伊勢湾断層帯の長期評価(一部改訂)

改訂前の評価「伊勢湾断層帯の評価」(平成14年5月8日公表)



○位置形状の見直し

- ✓ 伊勢湾断層+内海断層(42 km、M7.5程度)
→ 白子-野間断層+内海断層(36 km、M7.4程度)
- ✓ 断層帯の位置及び形態や過去の活動を再検討した結果に基づき、伊勢湾断層帯を、伊勢湾断層からなる断層帯北部と白子-野間区間及び内海区間からなる断層帯南部の二つに再区分した
※断層長に対してずれの量が大きく、
白子-野間断層と内海断層の形状は連続的(岡村ほか, 2013)

○変位速度、活動時期、1回のずれの量、活動間隔、確率の見直し

- ✓ 伊勢湾断層帯北部: ほぼ変更なし Zランクのまま(ほぼ0%)
- ✓ 内海区間: ほぼ変更なし Zランクのまま(ほぼ0%–0.002%)
- ✓ 白子-野間区間:
平均活動間隔: 8,000年程度(間接法)
→ 3,600–8,300年(間接法)
A*ランク(0.2%–0.8%) → S*ランク(0.1%–6%)
平均的なずれの速度: 0.3 m/千年程度(上下成分)
→ 0.3–0.7 m/千年程度(上下成分)

※ランク及び今後30年以内の地震発生確率の算定基準日は令和8年(2026年)1月1日地震後経過率(p.14)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している